

— 茨城県土浦市 —

# 山川古墳群（第2次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

2004

土 浦 市  
土 浦 市 教 育 委 員 会  
山 川 古 墳 群 第 二 次 調 査 会

— 茨城県土浦市 —

# 山川古墳群（第2次調査）

— 土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集 —

2004

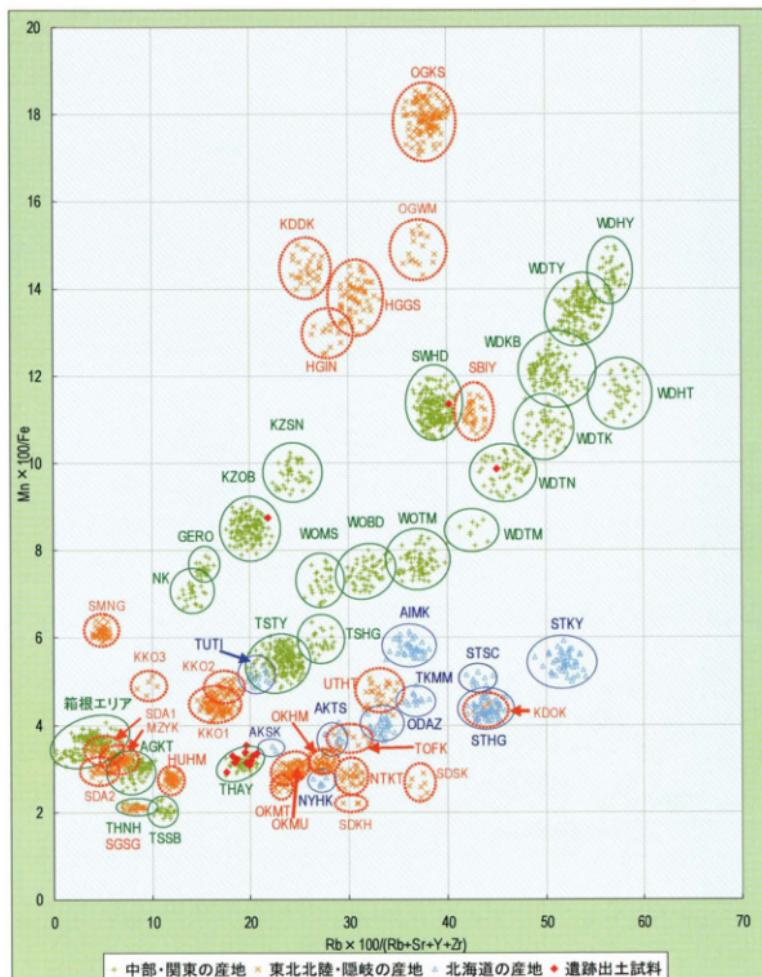
土 浦 市  
土浦市教育委員会  
山川古墳群第二次調査会



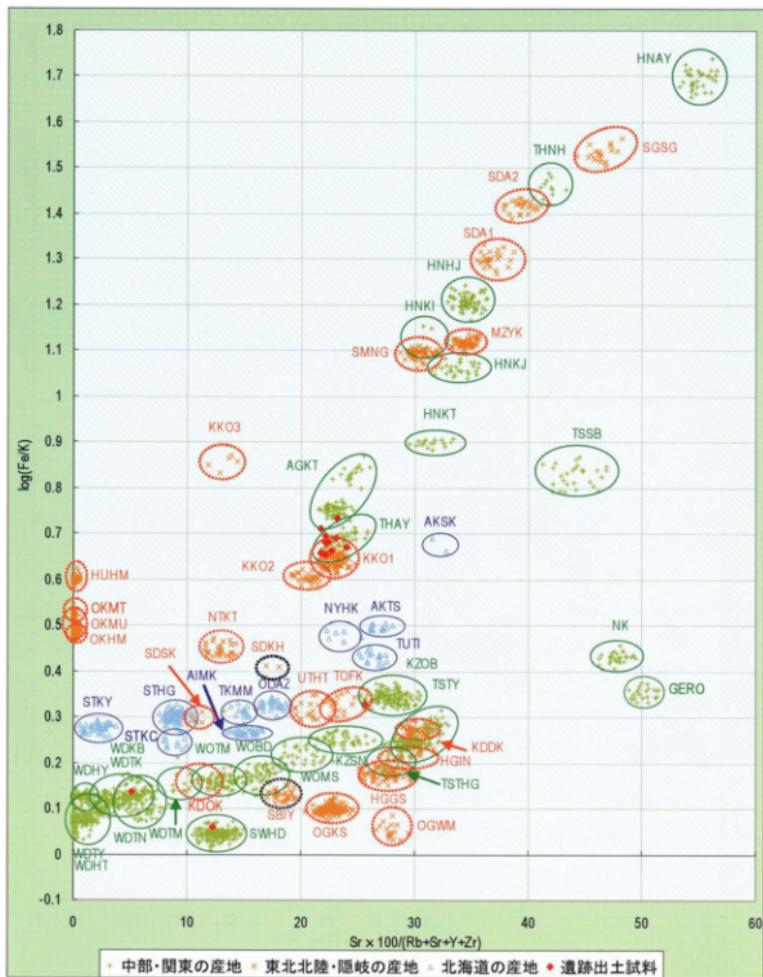
神明遺跡（第4次調査）・山川古墳群（第2次調査）全景（合成）



山川古墳群（第2次調査）遠景（北より）



グラフ1 黒曜石产地推定判別図1 (縦軸: Mn/Fe、横軸: Rb分率)



グラフ 2 黒曜石産地推定判別図 2 (縦軸: Fe/K、横軸: Sr分率)

## 序

茨城県土浦市は霞ヶ浦の西端に位置し、筑波山より続く新治台地と筑波稲敷台地、その間を流れる桜川の下流に位置する水と緑の豊かな都市です。市内の各所には、この恵まれた風土によって育まれた長い歴史を物語るさまざまな文化財が、今なお数多く伝えられています。

このたび、土浦市において市内北部の常名地区の台地上に市総合運動公園の建設が予定されましたことから、当該地内に存在する埋蔵文化財の保存につきまして関係機関と協議を行いましたところ、遺跡の保存を図ることができない場所については、発掘調査のうえで記録として保存することになりました。そのため、教育委員会では平成5年度から常名台遺跡群の発掘調査を進めており、今年度は山川古墳群の一部を発掘調査することになりました。

この調査によって明らかになりました数々の成果につきましては、専門の研究者のみならず、これから土浦地域の歴史・郷土学習の資料として、広く皆様に対してご利用いただけるよう心掛けていきたいと思います。併せまして、地域に残された貴重な文化財の保護につきましても、今後とも皆様の一層のご理解をいただきたいと考えております。

結びになりますが、今回の調査にご協力いただきました関係各位に心から厚く感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

土浦市教育委員会  
教育長 富永 善文

## 例　　言

1. 本書は山川古墳群第二次調査会が実施した土浦市大字常名字山川2740他に所在する山川古墳群の第2次調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、土浦市（担当：都市計画部公園緑地課）から委託を受け、山川古墳群第二次調査会が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査は大瀬淳志・小川和博【（有）日考研茨城】が担当し、2003（平成15）年7月29日から10月11日まで実施した。調査事務は石川功・岡口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。
4. 本遺跡の整理作業及び報告書執筆・編集作業は【（有）日考研茨城及び上高津貝塚ふるさと歴史の広場】において2003（平成15）年10月16日より2004年2月28日まで実施した。全体総括・編集については石川功が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）・窪田恵一（山川古墳群第二次調査会調査員）およびその他職員が補佐した。
5. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

石川 功 第1章、第2章、第4章、第5章

小川和博 第3章第1節・第2節・第4節・第5節・第6節（2）・（3）・（4）・第7節

小川和博・大瀬淳志 第3章第3節

窪田恵一 第3章第5節・第6節（1）

（遺構写真） 小川・大瀬・窪田

（遺物写真） 小川・船田圭吾

付編1についてはパリノ・サーヴェイ（株）【植木真吾・辻本崇夫・北脇達也】より、付編2については望月明彦氏（国立沼津工業高等専門学校物質工学科教授）より分析報告をいただいた。

なお、第2章第2節周辺遺跡の位置図については変更がないため、「山川古墳群碑認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第6次調査） 神明遺跡（第4次調査）」2003において比毛君男が製作したものを使用した。

また、第2章第1節地理的環境、第2節歴史的環境（1）全体の概況については「北西原遺跡（第1次調査）」2004をもとに一部修正して使用した。

6. 本遺跡の航空写真及び常名台遺跡群全体図ならびに神明遺跡第4次調査区・山川古墳群第2次調査区合成写真は（株）シン技術コンサルが作成した。
7. 調査及び本報告書の作成にあたり、下記の諸氏または諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（50音順・敬称略）  
青山俊明・石橋充・（株）市毛組・船田健一・船田義弘・（財）茨城県教育財團・茨城県教育庁文化課・及川謙作・大塚博・小野寿美子・川村満博・瓦吹堅・黒澤彰哉・佐々木義則・塙谷修・鷲田圭吾・白石真理・（株）シン技術コンサル・大栄測量（株）・土浦市都市整備部公園緑地課・土浦市文化財保護審議会・萩野谷悟
8. 本報告書に關わる出土品、記録図面、写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。  
なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、山川古墳群第2次調査にはUY2という略号を与えていた。

## 山川古墳群第二次調査会組織

会長	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	石毛一美	教育委員会教育次長
理事	大塚博	文化財保護審議会委員
タ	来栖忠雄	都市計画部建築指導課長
タ (事務局担当)	広瀬昌則	教育委員会文化課長
監事	堀越昭二	博物館協議会委員
タ	大内誠二	監査事務局長補佐
事務局長	宇津野利雄	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
事務局次長	三須洋一	タ 館長補佐
事務局員	石川功	係長(担当)
タ	関口満	主幹(担当)
タ	堀部猛	土浦市教育委員会文化課主幹
調査主任	大潤淳志 (有)	日考研茨城
主任調査員	小川和博	タ
調査員	遠藤啓子	タ
タ	庭田恵一	
タ (整理)	福田礼子	上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員
タ (整理)	吉澤悟	
タ (発掘)	高野麻希	東京学芸大学大学院生
作業員 (発掘)	石黒勇、泉幸子、海老原龍生、大久保敦子、大沼幸一、大潤由紀子、小野聰、 皆藤久子、金塚瑛、河合淳子、寿田真代、佐賀実、酒井悦子、渋谷礼子、竹内 政江、田中勝弘、上田幸子、露久保三郎、友部政夫、中島とみ子、中島秀雄、 中野富美子、根本一夫、箱守よしこ、平江幸子、藤田智康、本間ひさ、吉田み ち、渡辺由美子	
作業員 (整理)	新井栄子、大坪美知子、大潤由紀子、大野美佳、小松崎廣子、坂寄さち、長嶽 道子、長谷川はるみ、浜田久美子	
事務員	鈴木ひと美	

## 凡　例

1. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

土坑：SK 溝：SD 古墳：TM 柱穴：P

その他の遺構：SX 撥乱：K

2. 本報告書での縮尺は可能な限り統一したが、これ以外はその都度表示した。

全測図：1／500 土師器・須恵器：1／3

古墳：1／200 石器：（旧石器）4／5、（縄文）1／3・1／2

溝・道等：1／200 縄文土器：1／3

土坑等：1／30

3. 遺構・遺物の実測図中の範囲は以下の通りである。

か跡： 硬化面： 樹脂混入縄文土器： 自然釉付着範囲： 黒色処理：

上記以外は注釈を付して任意の表示を行った。

4. 遺構・遺物の記述は以下を原則とする。

(1) 水系レベルは海拔高度(m)を示す。

(2) 遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。

(3) 遺物の観察表の法量は、( )が現存値、〔 〕が復元値を示す。

(4) 土層や遺物の色調は『新版標準土色帖』17版(小川正忠・竹原秀雄編1996 日本色研事業株式会社)を使用した。

5. 「常名台遺跡群全体図」は上浦市常名地区地形平面図(平成3年3月作成)を原図にして、これまで実施してきた個々の発掘調査の全体図を合成して作成したものである。これは本報告の調査区も含まれているため、暫定的な性格を持つことを明記しておく。なお、「常名台遺跡群」という名称は、総合運動公園建設予定地内に分布する5つの遺跡(西谷津遺跡・北西原遺跡・神明遺跡・山川古墳群・弁才天遺跡)の総称として使用している。

# 目 次

口絵（神明遺跡（第4次調査）・山川古墳群（第2次調査）全景（合成）、山川古墳群（第2次調査）遠景（北より）、黒曜石产地推定判別図）

## 序

### 例言・凡例

### 目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 周辺の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
(1) 全体の概況	2
(2) 周辺の古墳	5
第3章 山川古墳群第2次調査	9
第1節 調査の方法	9
第2節 調査区の設定	9
第3節 調査日誌抄	11
第4節 遺跡の概要	13
第5節 基本層序と地質環境	15
第6節 遺構と遺物	16
(1) 旧石器時代の調査	16
(2) 縄文時代の遺構と遺物	42
1. 上坑	42
2. 遺構外出土遺物	46
(3) 古墳時代の遺構と遺物	50
・ 2号墳	50
・ 3号墳	53
・ 8号墳	66
・ 9号墳	73
・ 10号墳	79
・ 11号墳	82
(4) 中世・近世以降の遺構と遺物	85
1. 捶立柱建物跡	85
2. 堀跡・道状遺構・溝跡	87
3. 土墳墓	95
4. 集石遺構	98
5. 上坑	98
6. 性格不明遺構	111
7. 風倒木痕	112
8. 表採資料	112
第7節 まとめ	114
第4章 考察	116
第5章 総括	119
付編	121
1. 山川古墳群出土炭化物の放射性炭素年代測定	121
2. 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の产地推定	122

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	1	第33図	遺構外縄文時代遺物（3）	49
第2図	常名台の古墳及び常名地区東側の古墳出土品	6	第34図	2号墳実測図	51
第3図	尾敷付古墳（塚山3号墳）実測図 (『上代文化』37号より)	7	第35図	2号墳土層断面図・出土遺物	52
第4図	常名周辺の古墳分布図	8	第36図	3号墳実測図	54
第5図	グリッド設定図	10	第37図	3号墳周溝土層断面図	55
第6図	山川占墳群第2次調査全体図	14	第38図	3号墳主体部実測図（1）	56
第7図	基本層区分図	15	第39図	3号墳主体部実測図（2）	57
第8図	Ⅸ層段階石器ブロック分布図	17	第40図	3号墳1・3～5号埋葬施設実測図	58
第9図	Ⅸ層段階珪質頁岩-1・2分布図	18	第41図	3号墳2号埋葬施設遺物出土状況	59
第10図	Ⅸ層段階珪質頁岩-1石器実測図（1）	19	第42図	3号墳2号埋葬施設出土遺物（1）	62
第11図	Ⅸ層段階珪質頁岩-1石器実測図（2）	20	第43図	3号墳2号埋葬施設出土遺物（2）	63
第12図	Ⅸ層段階珪質頁岩-1石器実測図（3）	21	第44図	3号墳6号埋葬施設実測図	65
第13図	Ⅸ層段階珪質頁岩-1・2 ホルンフェルス-1石器実測図	22	第45図	3号墳出土遺物	65
第14図	珪質頁岩-1 剥片剥離工程図	22	第46図	8号墳実測図	67
第15図	Ⅸ層段階流紋岩-1石器実測図（1）	23	第47図	8号墳確認トレンチ部分と想定図	68
第16図	Ⅸ層段階流紋岩-1・2石器実測図（2）	24	第48図	8号墳周溝土層断面図（1）	69
第17図	Ⅸ層段階チャート-1石器実測図	25	第49図	8号墳周溝土層断面図（2）	70
第18図	Ⅸ層段階炉跡遺構実測図	27	第50図	8号墳遺物出土状況	71
第19図	Ⅷ層段階器種別分布図	28	第51図	8号墳出土遺物（1）	71
第20図	Ⅷ層段階石材別分布図	29	第52図	8号墳出土遺物（2）	72
第21図	Ⅷ層段階石器実測図（1）	30	第53図	9・10号墳実測図	74
第22図	Ⅷ層段階石器実測図（2）	31	第54図	9号墳周溝土層断面図	75
第23図	V層～IV層下部段階器種別分布図	32	第55図	9号墳主体部実測図	76
第24図	V層～IV層下部段階石材別分布図	33	第56図	9号墳1～5号埋葬施設実測図	78
第25図	V層～IV層下部段階石器実測図（1）	34	第57図	9・10号墳遺物出土状況	79
第26図	V層～IV層下部段階石器実測図（2）	35	第58図	9号墳4号埋葬施設・周溝内出土遺物	80
第27図	各段階石材構成比（点数・重量）グラフ	41	第59図	10号墳周溝土層断面図	81
第28図	3号土坑・出土遺物	43	第60図	11号墳実測図	83
第29図	4号土坑・出土遺物	44	第61図	11号墳1・2号埋葬施設実測図・ 出土遺物	84
第30図	21・27号土坑、27号土坑出土遺物	45	第62図	掘立柱建物跡実測図	86
第31図	遺構外縄文時代遺物（1）	47	第63図	塗跡 S D06A 実測図	88
第32図	遺構外縄文時代遺物（2）	48	第64図	道状遺構 S D06B 実測図	89
			第65図	1～5・9号溝実測図	90
			第66図	S D06A・B・その他中近世遺構出土遺物	92
			第67図	7・8・10号溝実測図	94
			第68図	1号土壤墓（S X01）実測図	96

第69図	2・4号土壙墓（S X02・04）実測図	97
第70図	土坑SK09・23実測図	99
第71図	土坑SK09・23出土物の長径・重量の相関 図	100
第72図	1・2号土坑実測図	101
第73図	5～8号土坑実測図	103
第74図	10～13号土坑実測図	105
第75図	14～17号土坑実測図	107
第76図	18・19号土坑実測図	109
第77図	20・22・24～26号土坑実測図	110
第78図	性格不明遺構（S X03）実測図	112
第79図	風削木痕（S X05・S X06）実測図	113
第80図	山川古墳群古墳分布図	118

## 写真図版

PL. 1	山川古墳群（第2次調査）全景
PL. 2	調査前風景 表土除去後
PL. 3	北側調査区IX層段階旧石器検出状況（西から） IX層段階旧石器（珪質頁岩-1）同旧石器（流紋岩-1・2）
PL. 4	IX層段階旧石器（珪質頁岩-1）同旧石器（珪質頁岩-1・ホルンフェルス-1）
PL. 5	IX層段階炉跡遺構（北東から） 炉跡遺構上層断面（北から） 炉跡遺構炉床面接写（北東から）
PL. 6	南側調査区VII層段階旧石器検出状況（南から） VII層段階旧石器（黒色頁岩・ホルンフェルス・碧玉） 同旧石器（黒色頁岩・黒色安山岩）

## 表 目 次

第1表	旧石器観察表1（北側調査区・IX層段階）	37
第2表	旧石器観察表2（IX層段階・水洗選別資料のうち実測図掲載分）	39
第3表	旧石器観察表3（南側調査区）	39
第4表	旧石器観察表4（遺構外一括資料）	40
第5表	IX層段階器種・石材個体別点数構成表	40
第6表	VII層段階器種・石材個体別点数構成表	40
第7表	V層～IV層下部段階器種・石材個体別点数構成表	40
第8表	2号墳出土遺物観察表	52
第9表	3号墳（2号埋葬施設）出土遺物観察表	59
第10表	3号墳出土遺物観察表	64
第11表	8号墳出土遺物観察表	73
第12表	9号墳出土遺物観察表	81
第13表	10号墳出土遺物観察表	82
第14表	11号墳出土遺物観察表	84
第15表	掘立建物跡柱穴計測表	87
第16表	2003年現在確認されている山川古墳群の周溝墓・古墳	118
PL. 7	南側調査区I層～V層下部段階旧石器検出状況（北から） V層～IV層下部段階旧石器検出状況と土層断面（北西から）	
PL. 8	V層～IV層下部段階旧石器 黒曜石（表） 同黒曜石（裏） 同旧石器チャート・硬質頁岩 同旧石器緑色岩・石英斑岩	
PL. 9	土坑SK03 土坑SK04 土坑SK04遺物出土状況	
PL. 10	土坑SK27 土坑SK27遺物出土状況 土坑SK27遺物出土状況（拡大）	
PL. 11	2号墳全景 2号墳上層堆積状況 2号墳確認状況	
PL. 12	3号墳全景 3号墳主体部 3号墳主体部（側面）	
PL. 13	3号墳主体部 3号墳周溝土層堆積状況	
PL. 14	耳環出土状況	
PL. 15	3号墳主体部 1号埋葬施設 2号埋葬施設 3号埋葬施設 4・5号埋葬施設（左4号） 6号埋葬施設	
PL. 16	3号墳 2号埋葬施設遺物出土状況 3号墳 2号埋葬施設遺物出土状況（拡大）	

PL.16	8号墳全景 8号墳周溝内遺物出土状況	PL.38	2号墳出土遺物 3号墳出土遺物 8号墳出土遺物
PL.17	8号墳周溝土層堆積状況 8号墳確認状況	PL.39	3号墳 2号埋葬施設出土遺物 (1)
PL.18	9・10号墳全景 (手前: 9号墳) 9・10号墳全貌 (左: 10号墳) 9号墳主体部上層堆積状況	PL.40	3号墳 2号埋葬施設出土遺物 (2)
PL.19	9号墳主体部 9号墳周溝 9号墳 4号埋葬施設	PL.41	9号墳出土遺物 10号墳出土遺物 11号墳出土遺物
PL.20	9号墳 4号埋葬施設遺物出土状況 墓溝内遺物出土状況 1号埋葬施設 2・5号埋葬施設 (奥 2号) 4号埋葬施設 墓溝内遺物出土状況	PL.42	S D06 A・B出土遺物 出土錢貨 (S D06 B・11・12、掘立柱建物跡-13・14、表探資料-15)
PL.21	10号墳全景 遺物出土状況 墓溝内上層堆積状況		
PL.22	11号墳全景 1号埋葬施設 2号埋葬施設		
PL.23	掘立柱建物跡全景 同途景 銭貨出土状況		
PL.24	堀跡 S D06A 途景 堀跡 S D06A		
PL.25	堀跡 S D06A・性格不明遺構 S X03 (中央) 堀跡 S D06A		
PL.26	溝 S D01 溝 S D02 溝 S D03 溝 S D04 溝 S D05 道状遺構 S D06B 錢貨出土状況		
PL.27	溝 S D07 溝 S D08 溝 S D09 溝 S D10 風倒木痕 S X05 風倒木痕 S X06		
PL.28	土壤墓 S X01 土壤墓 S X02 土壤墓 S X04		
PL.29	集石遺構 土坑 S K09 上坑 S K23		
PL.30	上坑 S K01 土坑 S K02 上坑 S K05 土坑 S K06 土坑 S K07 土坑 S K08		
PL.31	土坑 S K09 上坑 S K11 土坑 S K12 土坑 S K13 上坑 S K14・S K20 (左) 土坑 S K15		
PL.32	土坑 S K16 土坑 S K17 土坑 S K18 土坑 S K19 上坑 S K23 土坑 S K24		
PL.33	土坑 S K04出土土器 同石器 土坑 S K27 出土土器		
PL.34	遺構外出土繩文土器 (1)		
PL.35	遺構外出土繩文土器 (2)		
PL.36	遺構外出土繩文土器 (3)		
PL.37	遺構外出土繩文土器 (4)・土製品・石器		

## 第1章 調査に至る経緯

土浦駅東口に近い、霞ヶ浦湖畔の川口二丁目に設置されている「川口運動公園」は、市民のスポーツ活動の拠点として1954（昭和29）年に完成したものである。その後1972（昭和47）年に施設は改修されたものの、次第に狭隘化、老朽化などが見られるようになってきた。そこで土浦市では同運動公園の機能更新について検討を重ねてきたが、その結果市北部の常名地区の台地上25.4haを移転予定地として決定し、1990（平成2）年には『土浦市総合運動公園基本計画報告書』を作成している。

ところで、本事業予定地内には1980～82（昭和55～57）年に実施された市内遺跡分布調査によって、「西谷津遺跡」「北西原遺跡」「神明遺跡」「山川古墳群」「弁才天遺跡」の5遺跡が存在することが知られていた。そこで、本事業計画の進展に伴い事業予定地内の遺跡の広がり等を確認する必要が生じたため、1990（平成2）年に事業予定地内の試掘調査を実施することとなった。この結果、各地の試掘調査区より多数の遺構が確認され、これらの遺跡は予定地内の台地上の大半に展開する可能性が高いことが想定された。そのため、工事着手前には記録保存のための発掘調査が必要であることが確認された。

発掘調査は1993（平成5）年より始められ、昨年までに北西原遺跡（1993・1994・1995・2002年調査）、山川古墳群（1995年調査）、弁才天遺跡（1996年調査）、神明遺跡（1997・2001・2002年調査）西谷津遺跡（2002年調査）の各遺跡、合計約9.7haの調査を実施している（註）。

平成15年度分の調査については、2003（平成15）年5月28日に土浦市都市整備部公園緑地課長池田勝則より土浦市教育委員会文化課長広瀬昌則に対して、土浦市常名運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査（山川古墳群のうち約7,000m<sup>2</sup>）についての依頼文が提出されたことから、教育委員会で依頼のあった遺跡の調査について協議したところ、山川古墳群第二次調査会を結成して調査を実施することと決定した。そこで6月24日に同調査会を発足させ、7月17日付けで土浦市と山川古墳群第二次調査会の発掘調査契約を締結した。また6月27日付け土教委第499号にて文化財保護法57条第1項及び第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を茨城県教育委員会に提出し、7月29日より発掘調査を開始した。

（註）各遺跡の調査年度及び報告は下記のとおり。

- ・1993年調査：「北西原遺跡（第1次調査）」2004
- ・1994年調査：北西原遺跡（第2次調査）：2005年刊行予定
- ・1995年調査：「北西原遺跡（第3次・第4次調査）山川古墳群（第1次調査）」2001
- ・1996年調査：弁才天遺跡・北西原遺跡第5次調査：2004年刊行予定
- ・1997年調査：「神明遺跡（第1次・第2次調査）」1998
- ・2001年調査：「常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）」2002
- ・2002年調査：「山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第6次調査）神明遺跡（第4次調査）」2003
- ・その他上高津貝塚ふるさと歴史の広場第5回企画展『常名台の古代のむら』1999において概要が報告されている

## 第2章 周辺の環境

### 第1節 地理的環境

土浦市は茨城県南部の中央、霞ヶ浦の北西部「土浦入り」の最奥部に位置する。市域は北の新治台地と南の筑波稲敷台地、間に古怨怒川の堆積作用が生んだ沖積低地があり、県西部岩瀬町付近を源とする桜川が霞ヶ浦に向かって西から東に流れている。今回の調査地点である「常名台」は桜川の北岸、標高約25~30mの新治台地上にあり、地質学的には南関東の段丘区分で成層面（M1面）に相当する台地である。この桜川沿いの両台地には所謂「谷津」が発達し、茨城県南部霞ヶ浦沿岸の特徴的な地形を形成している。土浦入りの場合は右岸の筑波稲敷台地側の方が細かな谷津が数多くかつ樹枝状に発達しているのに対し、左岸の新治台地側の方は谷津の数がやや少なく、境川や今回の常名台などにやや大規模な谷津が形成されているといった感がある。原始古代の遺跡の多くはこの両側の台地上、特に谷津の周辺に展開している。

常名台の台地上は平坦で、土地利用は主に畑作である。ここでは長年根菜類や桑の作付けが行われているが、近年農業はやや衰退気味で、それに代わり国道125号線方向より次第に住宅地が広がりつつある。今回の総合運動公園予定地は、この台地と中央部のY字状に貫入する谷津から構成される南北約600m、東西約700m、面積約24haに及ぶ広大なものである。

### 第2節 歴史的環境

#### （1）全体の概況

旧石器時代：現在土浦市内では50ヶ所以上の旧石器時代の遺跡が発見されている。常名台でも現在までに北西原遺跡（1993年調査）、神明遺跡（1997・2001・2002年調査）、山川古墳群（1997年・今回調査）、弁才天遺跡（1996年調査）からも30,000年前から13,000年前の旧石器が発見されている。

縄文時代：神明遺跡については中村盛吉が縄文中期の遺跡として紹介しており、2001年の確認調査でも中期の住居跡や地点貝塚、遺構群が確認されたことから、大規模な集落跡が存在するものと考えられる。また西側の新治台地内には、前期の貝塚である上坂田北部貝塚や上坂田寺裏貝塚、後期・晩期の貝塚である下坂田貝塚が存在している。

弥生時代：北西原遺跡（1994年調査）から竪穴住居跡1軒が確認されているのみで、遺跡の分布は希薄である。

古墳時代：今までの調査の結果、中央部の北西原遺跡（1993~1995年調査）~神明遺跡（2001年調査）からは古墳時代前期の集落跡が、北側の西谷津遺跡（2002年調査）・東側の弁才天遺跡（1996年調査）からは古墳時代前期・後期の集落跡が発見されている。いずれの遺跡も中央の谷津を向いて展開しており、谷津を利用した生活基盤を推定することができる。集落の規模としては特に北西原・神明遺跡の前期集落は100戸を超える大集落であるが、それに比べ中期の住居跡ははいずれの遺跡からもあまり発見されず、また後期の集落は西谷津・弁才天遺跡に中心が移るなど、遺跡の消長及び位置に違いがある点が興味深い。古墳について詳細は後述するが、北西原古墳群（1993~1994・2002年調査）は終末期の古墳群、山川古墳群（1995年・今回調査）は前期から終末期の古墳群である。

奈良・平安時代：谷津北側の西谷津遺跡（2002年調査）と東側の弁才天遺跡（1996年調査）から奈良・平安時代の集落が発見されている。それに比べ谷津の西側では山川古墳群の西端から竪穴住居跡1軒の確認例があるものの、北西原・神明遺跡からは発見されないといった集落分布の偏在が認められる。このうち弁才天遺跡は、奈良・平安時代の竪穴住居跡58軒、掘立柱建物跡5棟以上が発見されているほか、和同開珎なども出土しており、この地域の拠点的な集落であると考えられる。また西谷津遺跡からも竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟等が発見され、銅製帶金具などが出土しており、弁才天遺跡との関連が想定される。

中世：山川古墳群の北側と重複する神明遺跡の南側から、方形に溝を巡らせた遺構が発見され、区画に中からは多数の掘立柱建物跡が発見されており館跡の可能性が指摘されている（1999・2002年・今回調査）。また本事業地脇の金山寺には室町中期のものと考えられる大型五輪塔〔市指定文化財〕が、常名天神山古墳の前方部にも安土桃山期のものと考えられる宝鏡印塔〔市指定文化財〕が存在する。他には「常名城」の伝承があり、台地下の八幡社が遺跡地と伝えられるが、造構・遺物とも発見されておらず、詳細は不明である。

近世：1865（慶応元）年に描かれた常名の村絵図では、集落は台地下の現在地に形成されている。常名台の大半は畠と林になり、一部に寺院なども存在していたことが判る。今までの発掘調査で発見された近世の遺構としては、北西原遺跡（1996年調査）と神明遺跡2次調査（1997年調査）から墓塚が各1基発見されている。



常名村絵図〔原図・国立史料館蔵〕〔『土浦歴史地図』より〕



番号	遺跡名	時代
1	博明遺跡（常名台遺跡群）	旧石器・縄文・古墳・中世
2	北西原遺跡（常名台遺跡群）	旧石器・縄文・古墳
3	北西原古墳群（常名台遺跡群）	古墳
4	山川古墳群（常名台遺跡群）	古墳
5	弁才天遺跡（常名台遺跡群）	縄文・古墳・奈良平安
6	西谷津遺跡（常名台遺跡群）	古墳・奈良平安
7	天神塚遺跡	縄文・古墳・奈良平安
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山古墳	古墳
10	瓢箪塚（挑戦塚）古墳	古墳（澤城）
11	八幡下遺跡	古墳・奈良平安
12	殿里古墳	古墳
13	羽黒後遺跡	縄文
14	坂の上遺跡	縄文
15	小坂の上遺跡	縄文
16	中畠遺跡	縄文
17	アラク遺跡	縄文・中世
18	石橋古墳	古墳
19	下坂田遺跡	中世
20	軒廻久保古墳群	古墳
21	坂田種荷山古墳群	古墳
22	下坂田貝塚	縄文・弥生

第1図 周辺の遺跡

## (2) 周辺の古墳

今回発掘調査を実施した山川古墳群の他にも、常名地区及び周辺地域では多数の古墳が確認されている。そこで桜川北岸台地上の近隣地域の古墳について概述したい。

### ①常名台の古墳

本調査区南側に存在する常名天神山古墳は、1989年度の測量調査の結果、全長85~90m、後円部径40~48m、高さ7m、前方部幅25m、高さ2~3mを測る柄鏡形の前方後円墳であることが確認されている。出土品は確認されていないが古墳の墳形から5世紀前葉の築造と推定され、古代筑波郡の有力豪族の墳墓であると考えられる。また常名天神山古墳の西側には弧築塚（挑戦塚）古墳があり、全長74m、前方部高さ2.6m後円部高さ5.2mの前方後円墳と伝えられている。1966年に破壊され出土遺物は残されていないが、写真からは比較的発達した前方部が見られることから5世紀代の古墳と思われ、常名天神山古墳に後続する首長塚と考えられている。山川古墳群は以前から古墳3基が確認されていたが、1995年の調査では4世紀の方形周溝墓3基、5~6世紀頃の円墳4基が新たに発見されている。2001年に実施した確認調査でも多数の周溝らしい遺構を検出していることから、山川古墳群にはまだ多数の古墳・周溝墓が埋没しているものと考えられる。また、山川古墳群の北側にあたる北西原遺跡からも1993・1994・1995・2002年の調査で7世紀末から8世紀前葉頃の終末期方墳4基が発見されたため、新たに北西原古墳群として命名されている。

なおこれらその他に、「土浦市史民俗編」には常名の大塚に円墳があったという記載があるが、現在この古墳の存在は確認されていない。また「図説土浦市史」では常名地区の大塚、桜塚、平足塚などの地名についても古墳との関係を想定している。

### ②常名地区東側の古墳

常名地区の北側である殿里・真鍋地区にも古墳が確認されている。まず東側約1kmの殿里地区には、殿里古墳（円墳：径約14m）が存在している。1926（大正15）年に「殿里字道坂の古墳」から人骨2体が出土した記録があるので、本墳が周辺の古墳であろう。北側の殿里台古墳は1972年に箱式石棺1基が発見されたもので、調査の結果、人骨3~4体分と、直刀3・金屬環1（鐔止め？）が検出されている。

次に東側約2kmの真鍋地区にはどんどん塚（円墳：径19m・塚か？）及び真鍋愛宕神社古墳（円墳：径31m）が存在している。真鍋愛宕山古墳周辺では埴輪も採取されているので、他にも古墳が存在した可能性も考えられる。

なお、土浦工業高校入り口脇からは丁字形鏡板や盞鏡、馬銘など馬具一式が表現された大型の馬形埴輪が出土している。「常総古文化研究」には、昭和30年代に「真鍋町台古墳」から形象埴輪（馬・瓶？）や人物埴輪（馬子）などが出土したと記されており、埴輪を有する6世紀代の古墳がこの地域に存在していたことは間違いない。ただし出土状況などは不明であるため、どのような古墳が存在したものであるのかは不明である。真鍋地区は比較的早くから市街化した地域でもあるため、これらの古墳の他にも記録を残さずに湮滅した古墳があつた可能性も考えられる。

### ③常名地区西側の古墳

常名地区と常磐自動車道を隔てた新治坂田地区にも多数の古墳が確認されている。まず西側約1kmの下坂田地区では石橋古墳、円墳2基からなる积迦久保古墳群、円墳8基からなる下坂田古墳群や屋敷付古墳（旧塚山3号墳）が確認されている。西側約2kmの上坂田地区では1982年の北坂田貝塚（上坂田北部貝塚）の調査中に方形周溝墓1基が発見されているほか、上坂田古墳群、武者塚古墳群などが確認されている。またこの他に湮滅した古墳群として坂田稻荷山古墳群がある。このほかにも縄作中に時折石棺や埴輪が出土す



常名天神山古墳実測図（『博古研究』創刊号より）



削平前の瓢箪塚古墳（『図説 土浦市史』より）



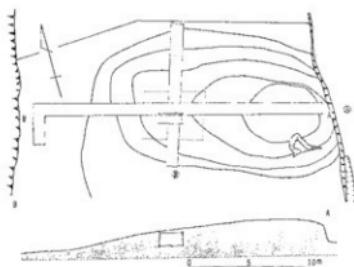
真鍋町台町古墳出土の人物埴輪と  
形象埴輪（『常総古文化研究』より）

第2図 常名台の古墳及び常名地区東側の古墳出土品

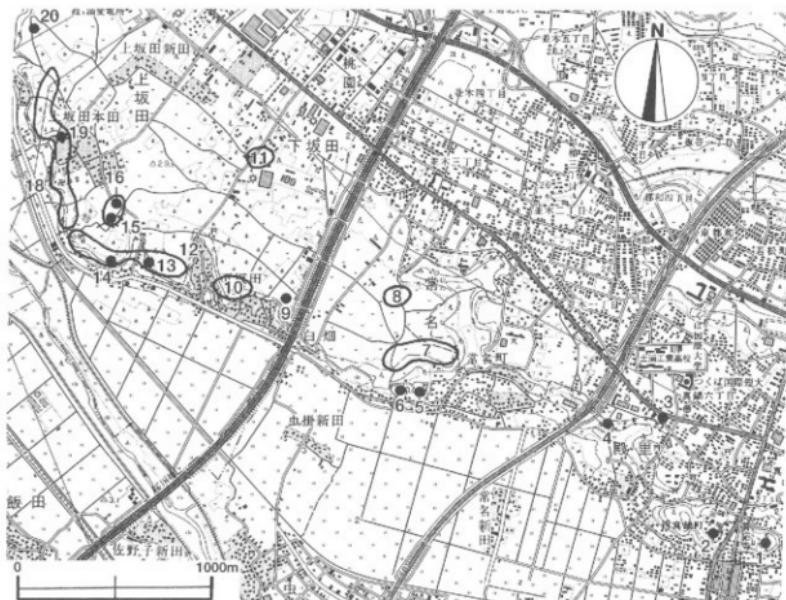
ることがあるそうなので、これらのほかにも古墳が存在していたものと考えられる。

これらの古墳の多くは未調査であるが、いくつかの古墳については内容が知られている。まず下坂田古墳群の武具八幡塚古墳（円墳：径約15m）からは、江戸時代末期の安政元（1854）年の耕作中に、銜角付冑1・眉庇付冑1・横矧板鉄留短甲1・桂甲1・頭甲1・肩甲1・笠手2・鐵鎌63などが出土しており、5世紀後半の古墳と考えられる。これらの遺物は現在でも古文書とともに出土品が発見者の子孫に伝えられている。次に屋敷付古墳（円墳？：径20×12m）は1964年に土浦二高・国学院大学によって発掘調査が行われ、検出された箱式石棺1基の中から、人骨推定5体のほか直刀4・鐵鎌26・鹿角裝刀子2・鐵環2が出土している。このうち1本の鐵鎌は頭蓋骨顎面部から茎部のみが確認されたもので、鐵鎌が眼窩から頭蓋骨を突き通したものである可能性が指摘されている。年代的には7世紀頃の古墳であろう。墳形については円墳とされているが、墳丘と発見された主体部の位置関係から見ると終本期前方後円墳の可能性も考えられる。また上坂田古墳群中の根がら古墳（円墳：径約21m）からは昭和30年頃2基の箱式石棺が発見され、斗利出中学校郷土クラブによる発掘調査によって、3体分の人骨のほか直刀3・鐵鎌11・刀子1・耳環2などが発見されている。最後に武者塚古墳〔新治村指定史跡〕（円墳：径23m）は1983年に筑波大学によって発掘調査が行われ、特徴的な横穴式石棺が発見された。遺物は前室からは銀製帶状金具1・銜角付青銅鏡約1・三葉環頭太刀1・主頭太刀1・直刀3・鐵鎌42が、玄室からは勾玉16・切子玉1・小玉88などが出土しており、7世紀末から8世紀の古墳と考えられている。また確認された遺骸のうち1体にはみずら・頸髄・口髭が確認され、古墳時代の結髪などの様相を知る上でも大変貴重な資料となっている。なお武者塚古墳の北東脇からも箱式石棺1基が発見され、直刀2・鐵鎌6などが確認されている。そのほか下坂田出シ山において耕作中に6世紀頃の櫛齒文鏡1枚が出土しており、古墳陪葬品である可能性が考えられている。

これらの状況を見ると、近隣の殿里・真鍋地区や坂田地区においても多数の古墳が確認されており、桜川北岸地域の台地上に連続して古墳が築造されていたことが分かる。ただしこれらの地域の中では常名地区以外では大型の前方後円墳は確認されておらず、各々の古墳（群）の時期や性格にも差異があることが想定される。



第3図 屋敷付古墳（塚山3号墳）実測図（『上代文化』37号より）



(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

第4図 常名周辺の古墳分布図

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	どんどん塚	6	瓢箪塚古墳	11	坂田稻荷山古墳群	16	武者塚古墳
2	真鍋愛宕神社古墳	7	山川古墳群	12	下坂田古墳群	17	武者塚2号墳
3	殿里台古墳	8	北西原古墳群	13	屋敷付古墳	18	上坂田古墳群
4	殿里古墳	9	石橋古墳	14	武具八幡塚古墳	19	根がら古墳
5	常名天神山古墳	10	枳迦久保古墳群	15	武者塚古墳群	20	北坂田貝塚

## 第3章 山川古墳群第2次調査

### 第1節 調査の方法

今回の調査は、當名遺跡群の神明遺跡の東側にあたり、平成14年度に確認調査を実施した「山川古墳群」の北側の一部が対象である。その範囲はトレントによる確認調査で溝等の遺構が検出された14c、15b、16b、17b・c、18b・cトレント（小川他2003）すべてが含まれている。なお、この地点が昭和46年に学術調査され、箱式石棺を主体とする山川古墳群3号墳（大塚1973）および現在も墳丘が遺存している同2号墳の存在によって「包蔵地」としてではなく、「古墳群」として遺跡名が付されているのはそのためである。しかし、隣接し昨年本調査を行った神明遺跡で明らかにされた旧石器文化層の広がりや中世溝である第6号溝（SD06）とのつながりとその関連遺構等、古墳以外にも他時期の遺構の存在が確実に予想され、トレントによる確認調査で把握された以上に当該遺跡に対する専門情報が豊富であった。従ってこれら遺跡内容を十分に考慮しながらの本調査となった。

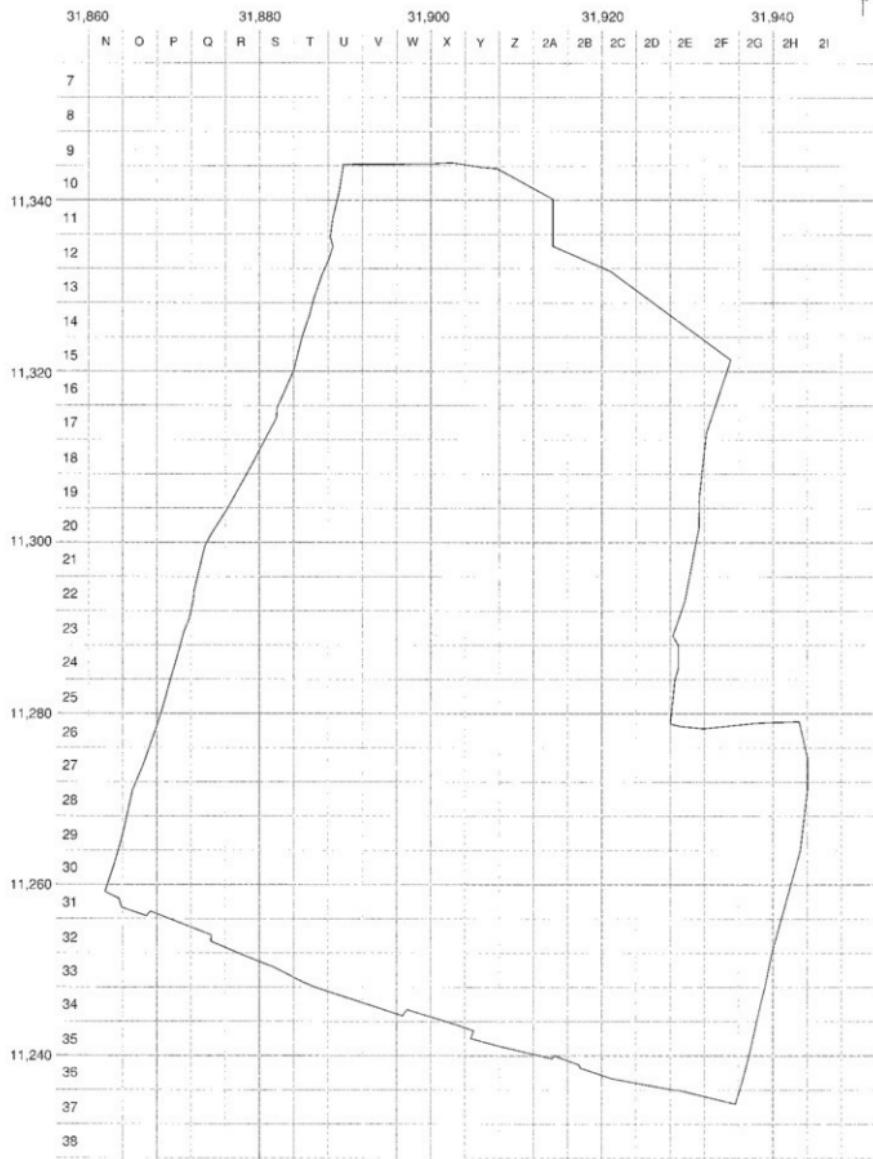
なお、事前の確認調査や神明遺跡の本調査結果に基づき確定された調査面積は約7,000m<sup>2</sup>であるが、西側は神明遺跡に接した農道によって画され、南側はやはり墓地に通ずる農道を境とする。また北側は斜面縁辺部を、東側は未開拓地を境界としてその全面が調査範囲として決定された。

まず調査は重機による表土層を除去から開始し、その後遺構確認のため人力による精査を行い、検出された遺構を順次調査することになった。事前にその存在が明らかにされている3号墳および隣接する2号墳、さらに神明遺跡で確認された旧石器包含層および中世溝や建物跡以外にも古墳の周溝と推定される溝状遺構4基に加え、縄文時代の土坑、古代の上墳墓等が新たに検出されたものの、堅穴住居跡は皆無であった。

### 第2節 調査区の設定（第5図）

昨年実施した神明遺跡の調査区設定をそのままこの山川古墳群調査区に継続して用いることとなり、基準点・グリッド単位および呼称についてはほぼ踏襲した。これは遺跡名が変わることにより、隣接する神明遺跡とつながる同一遺構の位置関係や呼称が別名称になる懼れがあり、整理段階で混乱を招くと判断したからであるが、大グリッドのカタカナ表記については当調査区東側において対応が煩雑になるため、今回外すこととなった。

まず基準点については、今までどおり日本平面直角座標第IX系のX = 11,750m、Y = 31,900mの交点を起点とし、残存していた昨年の基準杭X = 11,320m、Y = 31,880mから調査区内に20m四方の大グリッド基本杭を設定した。さらにこの大グリッドを東西方向と南北方向にそれぞれ5分割して4m × 4mの小グリッドを設け、昨年の神明遺跡で使用したグリッド名をそのまま継続させた。とくに小グリッド名であるアルファベットと算用数字の組合せ表記はまったく同じで、これによって前回調査の第6号溝（SD06）の位置関係と遺物の出土地点が一致することとなった。



第5図 グリッド設定図

### 第3節 調査日誌抄

- 7.26 本日より発掘調査を開始する。調査区南端からユンボによる表土層除去を開始する。2号墳の周溝を検出する。
- 7.29 ユンボによる表土層除去の継続。遺構検出を開始する。3号墳の主体部を確認。さらに南端部で方墳状の幅広い溝を検出し、8号墳と命名する。
- 7.30 ユンボによる表土層除去を継続する。調査区南側を完了する。
- 7.31 ユンボによる表土層除去の継続。調査区西側を開始する。
- 8.01 ユンボによる表土層除去継続。調査区中央部を行なう。遺構検出作業。調査区東側で前方後方墳状の溝を確認する。9号墳と命名する。
- 8.02 ユンボによる表土層除去継続。調査区中央部を継続。遺構検出作業。中世の館溝であるSD06を確認する。
- 8.05 ユンボによる表土層除去継続。調査区中央部を継続。遺構検出作業。9号墳北側で円形周溝が確認され、10号墳と命名する。
- 8.06 ユンボによる表土層除去継続。調査区北部を行なう。遺構検出作業。館溝SD06の東側をほぼ検出する。また長方形を呈した土壤墓を調査区東側で確認する。
- 8.07 ユンボによる表土層除去継続。調査区北側を行なう。遺構検出作業。館溝SD06の北側を確認し、昨年の調査した北側溝とほぼ一致する。
- 8.08 ユンボによる表土層除去継続。調査区北側を行なう。遺構検出作業。
- 8.09 降雨のため作業中止とする（台風10号）。
- 8.12 ユンボによる表土層除去作業を完了する。遺構検出作業の継続。
- 8.13 遺構検出作業継続する。北側をほぼ完了する。遺構検出状況写真撮影。
- 8.19 遺構検出作業を継続する。調査区の南側半分の再度遺構検出作業を開始する。とくに古墳群の集中する南東部を重点的に実施する。
- 8.20 全体の遺構検出作業が完了し、遺構輪郭に白線を引き、写真撮影を実施する。写真終了後、大形方墳である8号墳周溝から発掘調査することとなり、周溝に4本の土壟断面観察用にセクションベルトを設け、5区画調査区とする。南西側から調査を開始する。
- 8.21 8号墳周溝覆土排土作業を継続する。周溝南西側調査区を完掘する。
- 8.22 8号墳周溝覆土排土作業を継続する。周溝西側調査区を完掘する。
- 8.23 8号墳周溝覆土排土作業を継続する。周溝北西側調査区を完掘する。
- 8.26 8号墳周溝覆土排土作業を継続する。周溝北側調査区を完掘する。
- 8.27 降雨の為作業中止
- 8.28 8号墳周溝覆土排土作業を継続する。3号墳主体部の調査を開始する。同時に箱式石棺の平面図作成を始める。
- 8.29 8号墳周溝セクション実測作業。3号墳主体部調査の継続、图形を確認する。また主体部平面図作成の継続。
- 8.30 8号墳周溝セクション実測作業の継続。3号墳主体部調査の継続。主体部彫形を掘削する。
- 9.02 8号墳周溝セクション実測作業の継続。3号墳主体部調査の継続。主体部彫形を掘削する。館溝

SD06の調査区を設定する。

- 9.03 館溝SD06東溝南側から調査を開始する。3号墳周溝の調査区を設定し、周溝掘削を開始する。
- 9.04 館溝SD06の掘削を継続する。なお、SD06の中段に硬面が延びており、道状遺構と判断した。この硬面は新期である。
- 9.06 3号墳の周溝調査の継続。なお周溝内に土坑を検出し、埋葬施設であることが判明した。北側を1号埋葬施設と命名する。2号墳周溝の調査区を設定し、掘削調査を開始する。
- 9.09 3号墳主体部の実測作業を継続する。周溝内の埋葬施設を新たに3基検出し、うち3号埋葬施設内および周辺から多量の土器粗製小型鉢が出土する。2号墳周溝調査の継続。周溝内から須恵器大甕の破片が出土する。11号墳周溝の調査区を設定し、掘削を開始する。
- 9.10 3号墳主体部を完掘し、平面実測および写真撮影を実施する。また周溝内埋葬施設の調査継続。9号墳周溝の調査区を設定し掘削を開始する。また主体部の調査も開始する。11号墳周溝調査の継続。周溝内から須恵器大甕の破片が出土する。
- 9.11 9号墳周溝調査の継続。周溝内から理葬施設を3基検出し、括れ部付近の埋葬施設から底部穿孔のプラスコ形長頸瓶が出土する。同時に主体部をほぼ完掘する。盗掘を受けていることが判明した。
- 9.12 9号墳周溝調査の継続、10号墳との切り合い関係が明瞭となり、10号墳が古期であることが判明する。また周溝重複部付近から9世紀代の須恵器坏が出土する。長方形土壙墓SX01の調査を開始する。
- 9.13 10号墳の周溝調査を行い、5世紀代の円形墳と判明する。また11号墳の周溝を完掘する。館溝SD06の硬面の除去を開始する。長方形土壙墓SX01の調査継続および土壙墓SX02の調査を開始する。
- 9.17 館溝SD06北側の調査を行う。また館溝SD06の北東隅で確認された竪穴状遺構をSX03と命名し、掘削を開始する。
- 9.18 館溝SD06を完掘する。引き続き近現代溝であるSD04およびSD05を調査を開始する。竪穴状遺構SX03の調査を継続する。
- 9.19 溝SD04・05の調査を完了し、新たに近現代溝SD07・08・09・10をほぼ完掘する。土坑SK04・05の調査を実施する。掘立柱建物跡の調査を実施する。
- 9.20 降雨の為作業中止。
- 9.24 空中写真撮影のため、調査区全体を清掃する。土坑および上壙墓の遺構写真撮影を行い、完了する。
- 9.25 空中写真撮影のため、調査区全体を清掃する。
- 9.26 掘立柱建物跡の調査の継続。また調査区中央で検出された風倒木SX05・06を掘削し、新たに検出された上壙墓SX04の調査を開始する。
- 9.27 空中写真撮影のため、調査区全体を清掃する。風倒木SX05の調査を行う。
- 9.30 空中写真撮影のため、調査区全体を清掃する。
- 10.01 調査区全体の揮除を完了し、空中写真撮影を実施する。写真終了後、旧石器文化層調査を開始する。
- 10.02 3号墳周溝平面図、エレベーション作成。旧石器文化層調査の継続。
- 10.03 8号墳周溝平面図、エレベーション作成。旧石器文化層調査の継続。
- 10.04 9号墳周溝平面図、エレベーション作成。旧石器文化層調査の継続。
- 10.07 10号墳周溝平面図、エレベーション作成。旧石器文化層調査の継続。
- 10.08 2・11号墳平面図、エレベーション作成。旧石器文化層調査の継続。調査区全測図作成を開始する。
- 10.09 旧石器調査中、検出された縄文土坑SK27の調査を実施する。旧石器文化層調査の継続。調査区全測

図作成。

10.10 旧石器文化層調査の継続。

10.11 旧石器文化層調査の継続。本日にて調査を完了する。

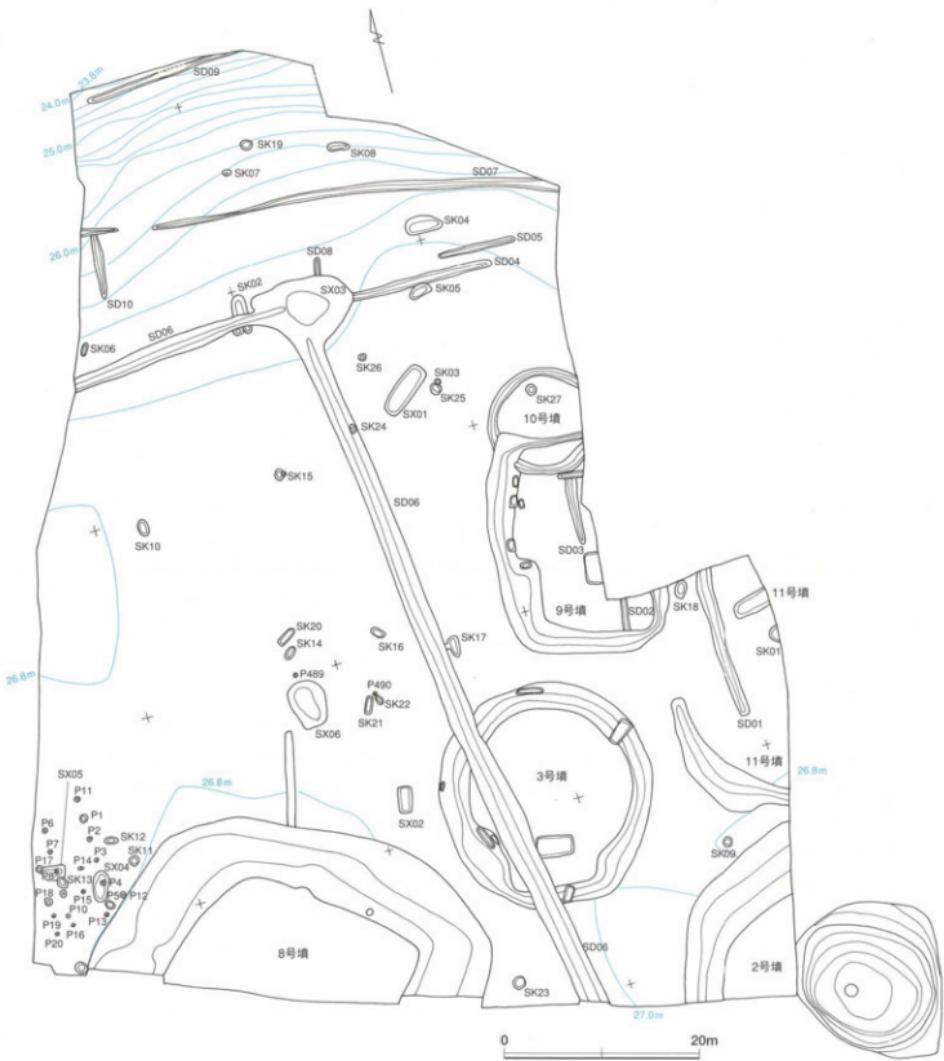
#### 第4節 遺跡の概要

山川古墳群は既に分布調査等によって開発予定前に周知されていた遺跡のひとつで、今回の調査範囲内でも2号墳と3号墳と呼称されている2基の古墳が対象となっている。なかでも3号墳は主体部が発掘調査され、その位置や形状が明らかにされ、また2号墳については、調査区外に埴丘が遺存している。なお、主体部が明らかな3号墳の埴丘は全く確認できず、周溝と主体部のみの検出であり、また2号墳は周溝の一部が確認されただけであったが、この2基の古墳を取り巻くように新たに4基の古墳が明らかにされた。まさに可視的な埴丘の存在がないものの、本遺跡名である「山川古墳群」の名は当を得ていたことになる。

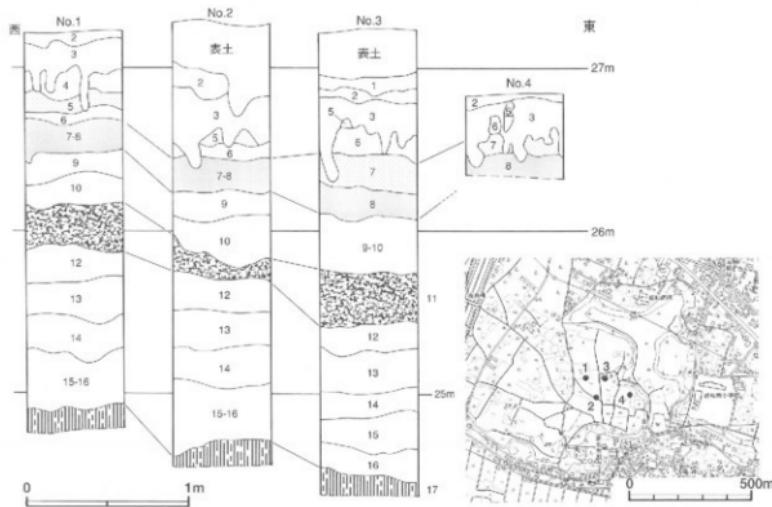
今回の調査で検出された遺構・遺物は、古墳を含め旧石器時代から中世においてその内容は比較的豊富であるが、その時期は大きく限定され、旧石器時代・縄文時代・古墳時代、そして中世に分けることが可能である。まず旧石器時代は文化層とユニットを検出することができた。つぎの縄文時代は遺構として竪穴1基、竪穴状遺構1基および土坑2基である。その出土遺物の時期は早期宋葉・前期前半・中期後半および後期初頭から中葉にかけてで、竪穴状遺構は前期前半・黒浜式期に相当し、土器以外に磨製石斧や石皿が伴っていた。また土坑は後期前半に比定される小形の円形土坑である。

古墳時代は墳墓のみで、竪穴住居跡等は検出されていない。既に主体部が明らかにされている3号墳以外に周溝が完全に検出されたものではなく、2号墳を含め5基はいずれも部分調査である。しかし、破壊され消滅しているものではなく、将来調査されれば周溝の全容が掌握できるものばかりである。まず前期に比定される8号墳は大形の方墳を呈し、周溝内から竪棺の出土がある。中期5世紀代の10号墳は小形の円墳である。残り4基は後期に比定され、3号墳は帆立貝式前方後円墳である。箱式石棺を主体部にもち、周溝内にも埋葬施設を有し、6世紀後半に位置付けられる。また隣接する9号墳は前方後方墳で、括れ部に主体部を配し、周溝内に埋葬施設をもつ。周溝出土の上器から7世紀中葉に比定される。2号および11号墳は円墳で、7世紀代と推定される。

中世の遺構は既に確認されている第6号溝(SD06)と命名された館溝の延長部が明らかできた。とくに東側の限界が確認され、これによって幅一町の方形堀であることがほぼ把握された。溝からは15世紀前後と推定される遺物が出土した。さらにこの堀は中世末から近世にかけて道路として使用されており、東側堀に限定されるが堀中段に硬化面が延びていた。以上今回対象となった本遺跡は、中世以前は隣接する居住遺跡群とは異なる墓域を主体とする区域であり、中世以降は居館の一部として占地していたことが判明した。



第6図 山川古墳群第2次調査区全体図



第7図 基本層序区分図

## 第5節 基本層序と地質環境（第7図）

常名台遺跡群が位置する台地は筑波山塊南麓に広がる新治台地の南端になる。地形区分では、箱根東京軽石（Hk-TP）が堆積し始める頃に離水して風成ロームが堆積することで形成された台地で、中位段丘（M1面）と区分表記されている〔早川1982〕。表土層以下のローム層から常緑粘土層に達する深部掘削作業においても、常緑粘土（17）層上面に堆積する16層中に箱根東京軽石粒子の含有を確認している。その他に堆積時期を考える際に指標となるテフラとしては、11層とした硬質ロームでは武藏野台地でも確認している青灰色不発泡灰土灰層（BCVA）と、9層には赤城鹿沼軽石（Ag-KP）が、6層下部には始良丹沢軽石（AT）層の挟在を確認した。また7・8層は立川ローム層第2暗色帶（BB2）に、5層は同第1暗色帶（BB1）に対比している。今回の調査区では、6層上部、7層上半部、7層下半部から8層上半部において人工遺物の検出に成功した。なお基本層序図では表示していないが、ローム層上位に平均40cmの厚さの表土層が存在している。柱状図では、神明遺跡第1・2・3次調査区と今回の調査区を並列表示している。各層位の層相や含有物などの詳細は各報告書を参照されたい。

1. 黄褐色土層 (7.5YR4/6)
2. 黄褐色土層 (7.5YR4/6)
3. 明褐色軟質ローム (7.5YR5/8)
4. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)
5. 黄褐色硬質ローム (7.5YR4/6) BB1
6. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8) AT包含層
7. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6) BB2上半部
8. 海色硬質ローム (7.5YR4/6) BB2下半部
9. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6) Ag-KP包含層
10. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)
11. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8) BCVA包含層
12. 明褐色硬質ローム (7.5YR4/4) 武藏野ローム暗色帶相当
13. 鹿沼硬質ローム (7.5YR5/6)
14. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)
15. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)
16. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8) Hk-TP包含層
17. 明褐色粘土層 (7.5YR5/6) 常緑粘土層。以下掘削せず。

## 第6節 遺構と遺物

### (1) 旧石器時代の調査

#### a) 調査の概要

**調査に至る経緯** 今回の調査区は、2002年度に実施した神明遺跡第4次調査区の東側に隣接することや、表土除去作業中に北向き斜面の傾斜変換線付近に少量ながら炭化物片の散布を確認したことから、調査開始当初からローム層内に旧石器時代の遺構・遺物の存在を予測していた。調査開始後、縄文時代以降の後世の遺構調査中に、SX01の覆土中から黒曜石製ナイフ形石器（第25図3）や硬質貝殻製の錐形石器（第26図14）、黒色貝殻製の削刃削器（第26図15）の3点が出土し、SX01南側の3層上面から黒曜石製の剥片（第25図4）を検出した。以上の状況から、北側の埋蔵予測地点以外にも旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性を想定して、縄文時代以降の遺構調査終了後に旧石器時代の調査に着手した。

**調査方法** 調査区は北側開析谷に面した地点に北側調査区（北区と省略）を、SX01を含めた地点に南側調査区（南区）と旧石器調査区を2ヶ所設定した。南区での掘削調査の結果、当初の設定範囲の東壁寄りに石器ブロック1基や黒曜石製石器が単独で点在していることを把握した。遺物分布範囲の東側限界を確認するため、埋没土壤の観察用壁を挟む状態で東側に調査範囲を拡張していった（南2区）。その結果、さらに石器ブロック1基を検出した。

調査は北区から開始したが、南区調査開始時点SD06の壁面を観察中、8層下部に大量の炭化物粒と共に土器片状の焼土が平面的に集中する箇所が法面に露出していることに気付き、中央区として新たに調査区を追加した。最終的な調査面積は北区が75m<sup>2</sup>、南区が170m<sup>2</sup>、中央区が4m<sup>2</sup>の合計249m<sup>2</sup>となった。

掘削作業は鍛鍊による削平作業を中心とし、遺物の検出を確認してからは移植鍛による削平とした。2002年度の調査でも実施したが、長軸規模10mm未満の検出・記録漏れ遺物を回収するために、調査期間や作業量を考慮した結果、北側の石器ブロック中心部の削平掛土約8m<sup>2</sup>に対し現地にて水洗作業を実施した。なお、水洗後に残ったサンプル土壤の重量は42kgである。微細遺物の最終的な選別・回収作業は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場の施設に搬入して実施した。回収した微細遺物を観察・検討した結果、二次加工石器の製作行為を証明する良好な資料が含まれていた。

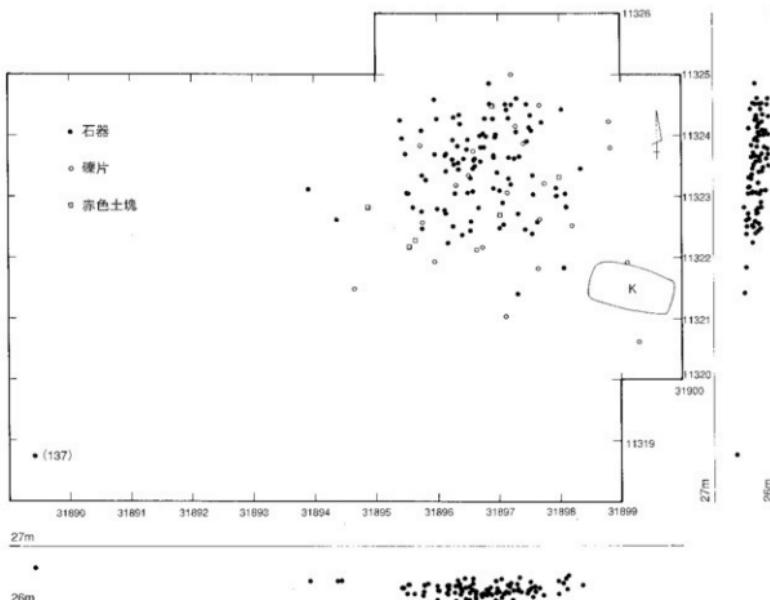
検出地点の記録化に成功した遺物は178点、水洗選別作業にて回収した一括遺物は34点、その他に縄文時代以降の遺構中から検出した一括遺物9点の合計221点の遺物を旧石器時代の遺物と認定した。

遺構・遺物包含層であるローム層の観察は考古層位区分を行ったが、土壤学上の区分・自然科学分析作業は実施していない。層位の表記は、基本層序区分と対応する。

**遺構・遺物の遺存状況** 北区は、北側の開析谷に向かって勾配が徐々に大きくなる傾斜変換線である。調査区内には最近の耕地利用に伴う「ゴミ穴」が2ヶ所あるが、耕作機械利用による溝状の搅乱はほとんど及ばず、植物根やモグラなどの動物による搅乱もほとんどなく、遺存状況は比較的良好である。しかし調査の結果から、軟質ロームがほとんど確認できず、ローム上部が流失している可能性が高いことを確認した。

南1～2区は、ほぼ平坦で勾配はない。中央に比較的大型な遺構（SX01）と十坑5基が分布し、部分的には縄文時代の包含層土が円形の土坑状に残存する個所がある。SX01の掘削深度は8層上位に達し、覆土中から石器が検出されていることから、地下の遺物包含層に達する掘削によって遺物が移動し再埋没していたと考えている。

中央区で確認した炉跡遺構は、SD06の南側法面に露出していた。SD06は9層（立川ロームX～XI層相当）



第8図 IX層段階 石器ブロック分布図 (S=1/80)

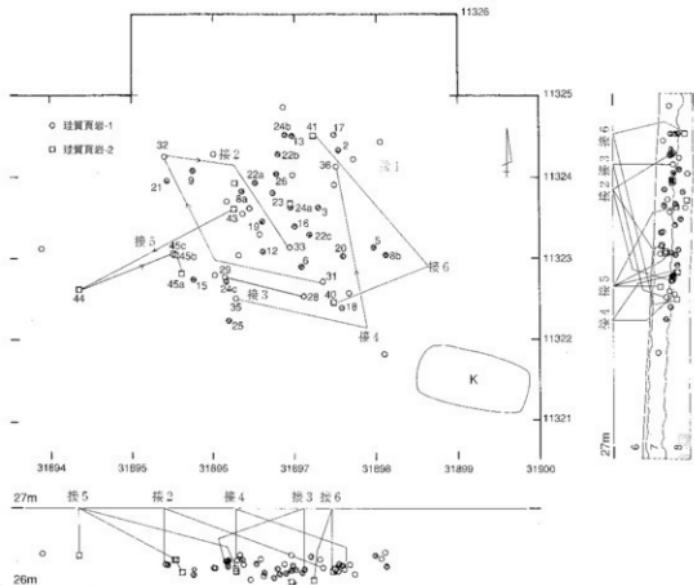
に達する深さまで掘削されており、調査の結果北側の炉床面範囲の30%ほどが削平され失われていた。遺構範囲にピットが2基重複している。

**遺構・遺物の記載方法** 今次の調査では、4ヶ所の剥離区から石器ブロック3基、炉跡遺構1基を検出した。石器ブロックは包含層位がそれぞれ異なり埋没した時間差を示すと判断できる資料群である。少なくとも南関東地域において時間軸上の対比を可能とするため、包含層である関東ローム層に対して武藏野台地における考古層位区分名称に準拠しながら、ここではIX層段階、VII層段階、V層～IV層下部段階と記載して報告する。特にⅦ層段階資料群は、接合作業を行ない剥片剥離作業の様相を詳細に観察することができた。ここでは最初に二次加工石器の観察内容の記載からではなく、各母岩の肉眼観察記載からはじまり、剥片剥離の様相、そして生産された剥片に対して二次加工を施し製作した“石器”的観察内容という順に記載を行なう。石材は重量比が最も高く占める石材種、その中の識別個体の順に説明を行なう。石材の色調の記載には、新版標準土色帖を準用している。

#### b) 遺構と遺物

##### IX層段階（包含層位：8層）

**石器ブロック**（第8～17図） 北区で1基を検出した。平面分布範囲は東西10m×南北9mに広がり、中心部の東西6m×南北5.5mの分布密度が高い。垂直分布範囲は標高26.02m～26.51mの0.5m幅に分布し26.2m



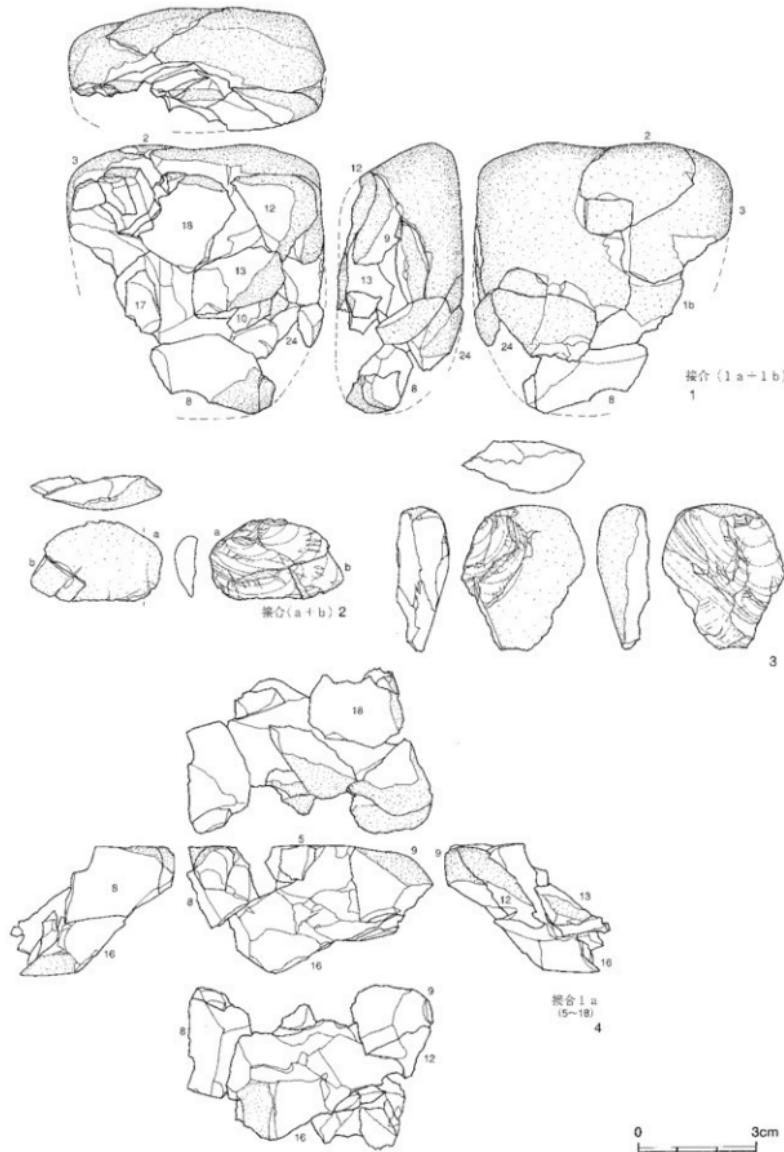
第9図 Ⅳ層段階 珪質頁岩-1・2 (S, Sh-1・2) 分布図 (S=1/60)

付近に集中する。北側の埋没谷に向かう上層の傾斜堆積に並行して、垂直分布は細緻分布している。

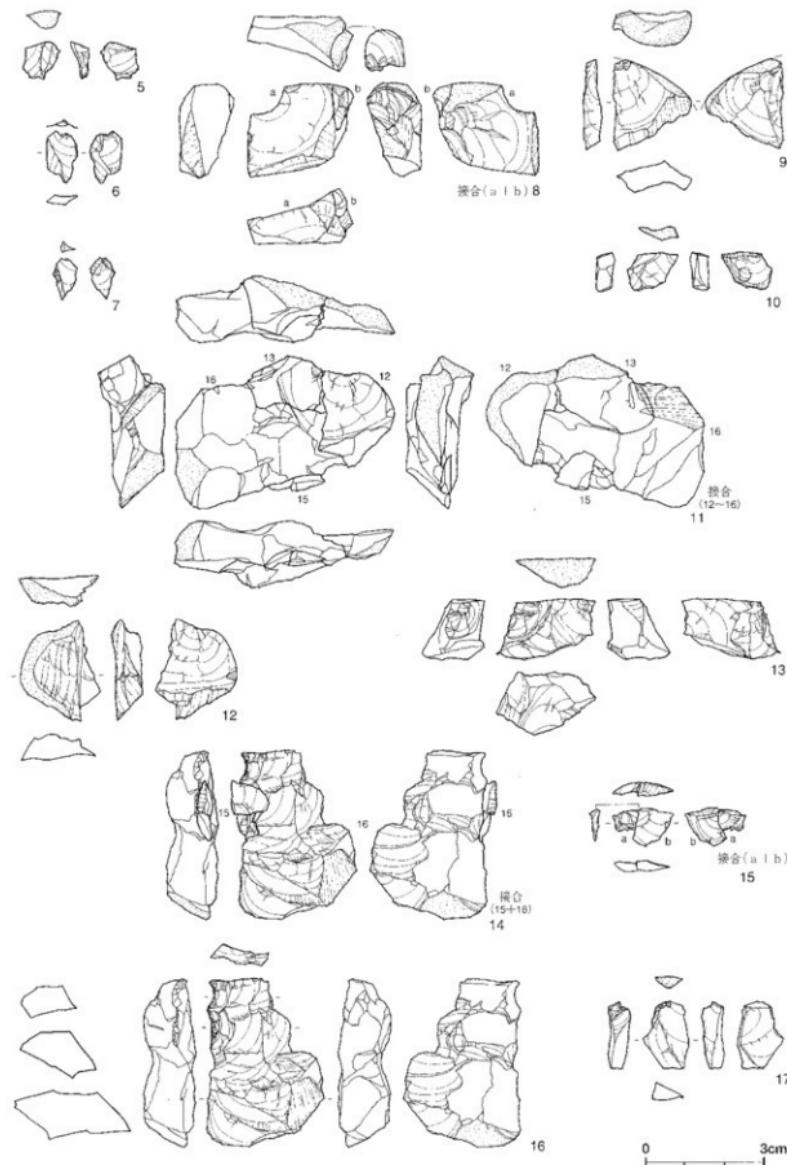
遺物を構成する遺物は、検出位置記録遺物は石器類が104点(224.0 g)、礫片が26点(82.0 g)、水洗選別作業により回収した微細遺物で石器類34点(3.1 g)を加えて合計164点(309.1 g)である。その他に赤色土塊が有り、5点は位置記録を作成している上に水洗選別作業でも多数回収している。石材種構成は、珪質頁岩2個体《S.Sh-1・2》、流紋岩2個体《Rh-1・2》、チャート1個体《Ch-1》、ホルンフェルス1個体《Ho-1》、黒色安山岩1個体《B.An-1》の5種7個体から構成される。本遺構内で確認できた二次加工石器の器種構成は、白形様石器《Ch-1》、鋸歯線石器《S.Sh-1》、楔形石器《SSh-1》である。

珪質頁岩1 (S.Sh-1) (第10~13図) 61点 (121.6g) で構成する個体。石材の特徴は、風化面が灰白色 (7.5YR7/2) を基調として灰色 (7.5YR4/1) の並行縞が発達している。この縞は、石材の形状とは無関係に発達している。灰色縞の明瞭な部分には節理面があり、隙間に鈷鉄銹鉻が生じている。この節理面では剥片の破断・破壊が起きており、剥片剥離に大きな影響を及ぼしていることが接合資料の観察から窺われた。石材の規模は長幅70mm×短幅65mm×厚さ30mmの円筒度の高い円錐である。

接合関係が確認できた資料数は36点で4組（接-1～4）を構成する。剥片剥離は29点で構成する接合資料-1を中心に記載する。素材疊の一部に剥離を施して剥片（2～3）を数枚剥離した後に、節面で分割が生じている。この分割は素材疊の長軸規模はそのままながらも厚みが半減していて、剥片素材としての規模（特に打面長）を大きく縮小する要因となっており、意図した物ではなく偶発的なアクシデントであったと見られる。分割個体を1a・1bとする。分割個体1aは14点から構成されるもので、自然面打面から不定形



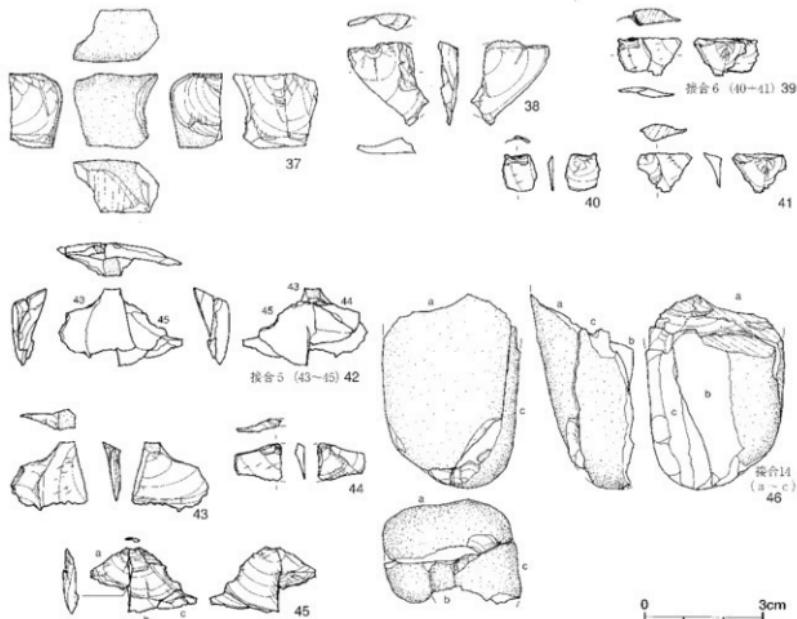
第10図 IX層段階 珪質頁岩-1 (S. Sh-1) 石器実測図 (1) (S=4/5)



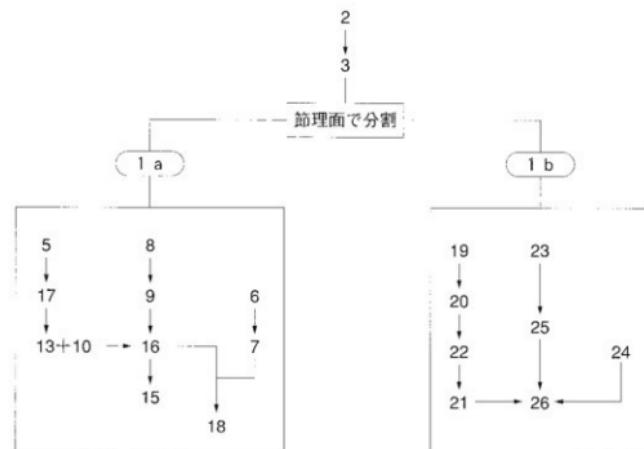
第11図 IX層段階 紋賀貝岩-1 (S. Sh-1) 石器実測図 (2) (S=4/5)



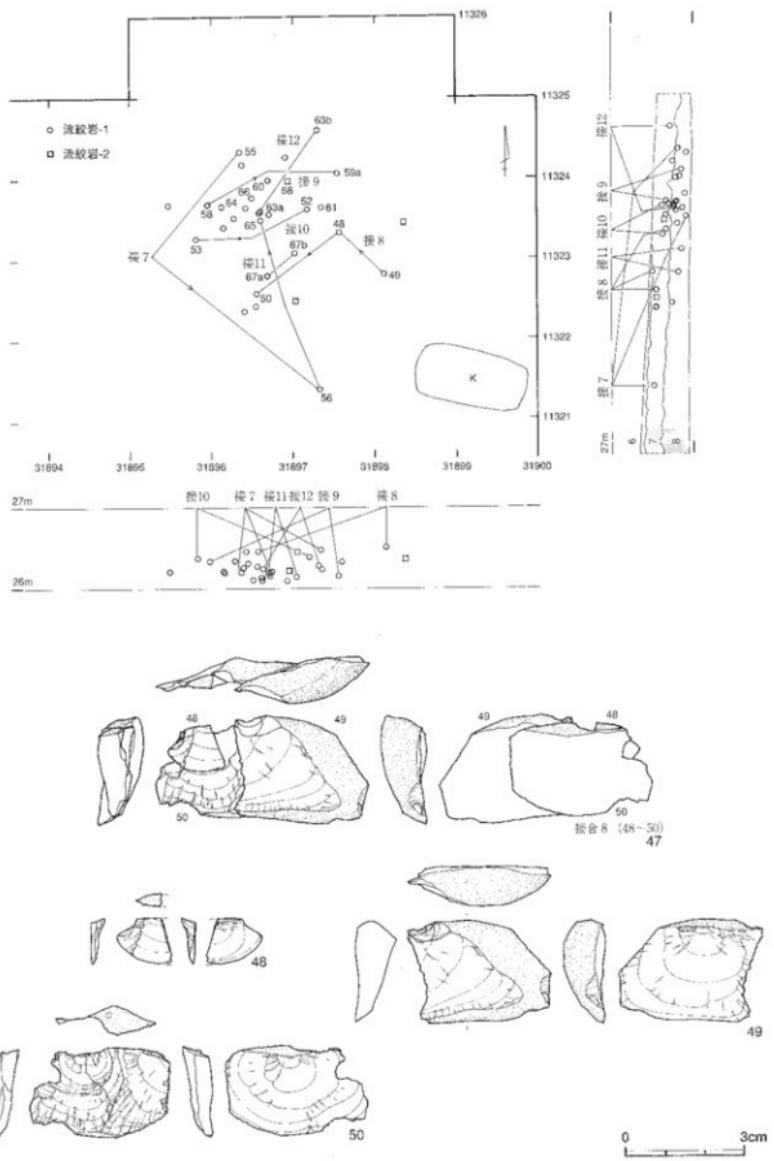
第12図 IX層段階 珪質頁岩-1 (S. Sh-1) 石器実測図 (3) (S=4/5)



第13図 IX層段階　珪質頁岩-1・2 (S. Sh-1-2) ホルンフェルス-1 (Ho-1) 石器実測図 (S=4/5)



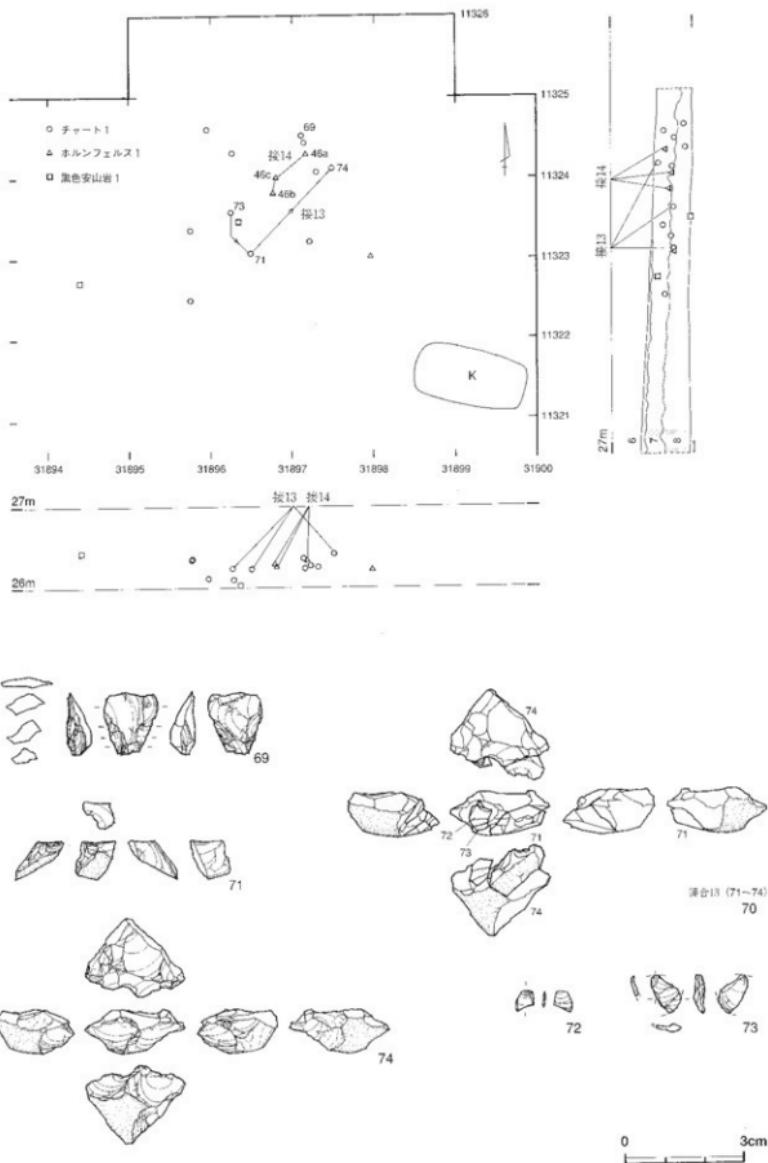
第14図 硅質頁岩-1 (S. Sh-1) 剥片剥離工程図



第15図 IX層段階 流紋岩-1 (Rh-1) 石器実測図 (1) (S=4/5)



第16図 IX層段階 流紋岩-1・2 (Rh-1-2) 石器実測図 (2) (S=4/5)



第17図 IX層段階 チャート-1 (CH-1) 石器実測図 (S=4/5)

剥片（5~17）を剥離している。その内剥離長軸32mm×直交短軸45mmの規模を持つ横長剥片1点（第11図11）が鋸歯縁石器（16）の素材として使用されている。打点からの縱割れや損壊によって剥片の半分を破碎してしまっているが、大きく残った剥片の腹面側に二次加工を施し椎歯縁部を形成している。この二次加工は硬質な敲打器を使用していた様で剥離した調整剥片も縱割れを起こして破砕している。分割個体1aには残核はなく、遺構外に搬出されている。分割個体1bは12点で構成され、自然面を打面として剥片剥離を行なっている。最終段階に剥離した剥片の内1点が楔形石器（25）として使用されている。ここでは残核（26）が残っている。接合資料2~4（27~36）は1a・1bとは直接接合しなかったが、石材内部の構成から一連の剥片剥離によって生じた資料群であると判断した。剥離工程では、自然面除去も剥離によって打面形成を図ることもせず、自然面をそのまま打面として使用している。また敲打器は硬質な素材ばかり使用している様で、立体的なフィッシャーが生じ、長さが10mm未満の小さな剥片でさえ打点からの縱割れを生じる状態である。打面調整には底状の端部を除去する調整も無く、打点を左右に移動することだけで剥離を連続している。

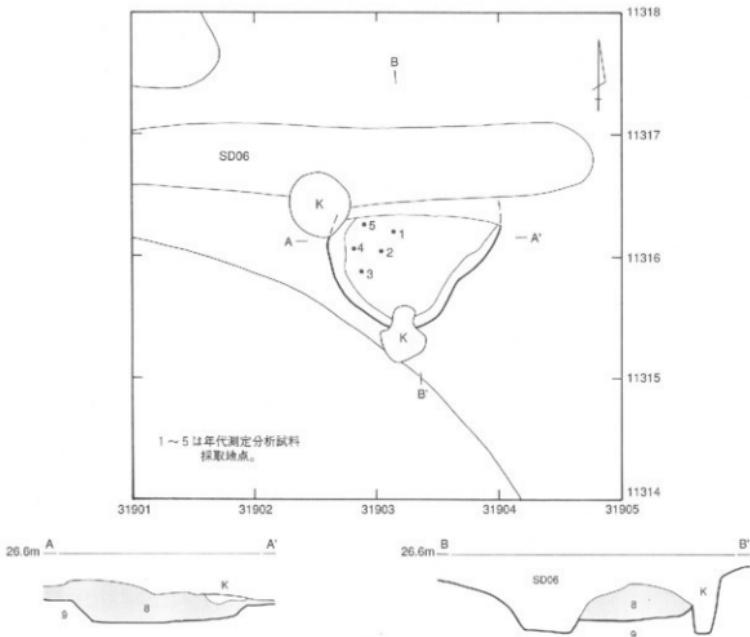
珪質頁岩2《SSh-2》（第13図） 9点（3.0g）で構成する個体。石材は、自然面が明黄褐色（10YR6/6）、内部は暗灰黄色（2.5YR5/2）で、自然面から内部側に3mm幅で自然面と並行する多層薄膜状変色帯が形成されている。この変色帯は、石材の形状に対応して形成されるもので、基盤部から分離して転覆になって以降に形成されている。接合資料は7点で2組（接-5・6）を構成する。自然面打面（接-5）と單剥離面打面（接-6）がある。剥片剥離では、打面頭部調整は施さず剥離を行なっている。剥片の多くは、打点からの縱割れを起こして器體が破碎している。器種構成は剥片のみである。調整剥片も確認していないことから、二次加工石器の成形作業は行っていないと判断した。

流紋岩1《Rh-1》（第15・16図） 40点（42.4g）で構成する個体。石材は、自然面がにぶい黄褐色（10YR5/3）で内部がにぶい黄橙色（10YR6/4）で、僅かに並行する褐色灰色縞が認められる。石材の形状として、平面規模は不明ながらも厚さ20mm位の板状縞を想定復元している。接合資料は15点で6組（接-7~12）を構成する。剥片剥離は、自然面を打面として弱いながら打点頭部調整が認められるが、打面調整は施していない。剥離した剥片の形状は横長形が多く、打点からの縱割れが頻繁に生じていて器體破碎資料が多い。剥離は打面から下部自然面に達する剥離はフェザーエンドだが、途中で止まるものはヒンジ・ステップフランチャーを起こしている。フィッシャーは非常に立体的である。器種構成は剥片のみである。

流紋岩2《Rh-2》（第16図68） 5点（7.3g）で構成する個体。石材は、自然面ではなく外面の状態は不明、内部は灰色（7.5Y6/1）部が数ミリ単位の角縞状に破碎し、隙間を極暗赤褐色（7.5R2/3）部が埋めている。接合資料は確認できなかった。剥片剥離は、剥離面を打面として不定形な剥片を剥離する。器種構成は剥片のみである。

ホルンフェルス1《Ho-1》（第13図46） 5点（44.4g）で構成する個体。石材は、オリーブ灰色（2.5GY5/1）で縞模様が発達して、堇青石の微細な結晶が認められる。5点の内3点が接合資料（接-14）を構成し、その他は微細な碎片である。本石材は石器製作の際に素材砾を叩く敲打器として使用され、敲打痕からの入力で節理面の影響を受けて器體を損壊し、工具として使用不能になるほどに破碎してしまっている。この石材資料は剥片剥離工程の復元ではなく、破碎してしまった工具の復元を示した資料である。

チャート1《Ch-1》（第17図） 16点（8.2g）で構成する個体。石材は、自然面・内部共に青灰色（5B5/1）で、節理面の形成は弱く均質な状態に見える。接合資料は4点で1組（接-13）を構成する。剥片剥離は、自然面をそのまま使用して剥離作業面と打面を頻繁に交替させながら鱗状剥片を剥離している。打面調整は施していない。器種構成は台形様石器1点、剥片14点、石核1点である。台形様石器（第17図69）は、



第18図 IX層段階 炉跡遺構実測図 (S=1/40)

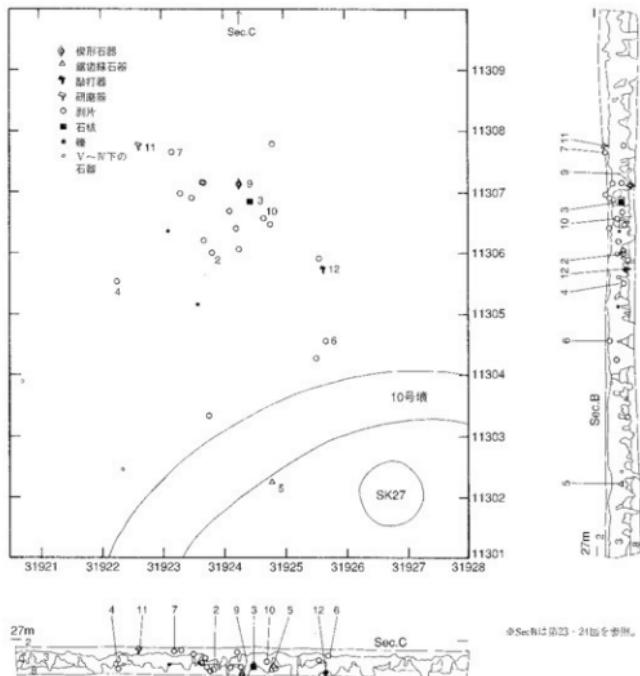
基部側に最大厚が位置する剥片を使用して、押圧剥離ではなく打撃による剥離を表裏両面に施して基部加工を行なっている。

黒色安山岩1《B.An-1》 2点(0.2g)で構成する個体。石材は、風化による表面劣化が激しい。器種構成は剥片のみで接合資料はない。実測図は未掲載。

炉跡遺構（第18図） 中央区で1基検出した。調査では遺構確認状況の写真撮影を行い、直交する2方向から覆土の観察を行うための十字状壁を設定して、移植鍛により薄く割り下げる作業を実施した。

平面規模は東西1.4m×南北0.9m（残存計測値）で、上位がSD06により削平されているため掘り込み開始面の確認は不明瞭である。9層との境界部分が最大で0.2m掘り込まれて、焼土粒子（赤橙色・10R6/8）と炭化物粒子を多量に含む8層を主要母材とする覆土が充填している状態を確認した。底面はほぼ平坦だが壁面寄りがやや立ち上がり気味で皿状をなす。底面は厚さ15mmを測る焼土ブロックが残存しており、南西隅では縄文時代早期末葉によく認められる「炉穴」の炉床部と類似する状態で赤色硬化部分が認められた。この硬化部分が水平方向ばかりではなく法面状に立ち上がった個所も認められることから、浅いながらも0.2m以上掘り込まれている可能性がある。この硬化部分もサンプルとして一部を回収してある。遺構内からは石器等の人工遺物は検出できず、燃料材の残滓物である炭化物片のみを検出した。

炉床面では年代測定用の5mm角程度の炭化物を5点採取し、AMS法による放射性炭素年代測定作業を実施した（詳細は付図1を参照）。測定結果では補正年代でBP31,650～BP31,480を示し、検出層位が8層（立川ローム第IX層相当）であったことからも、後期旧石器時代前半の遺構と判断した。



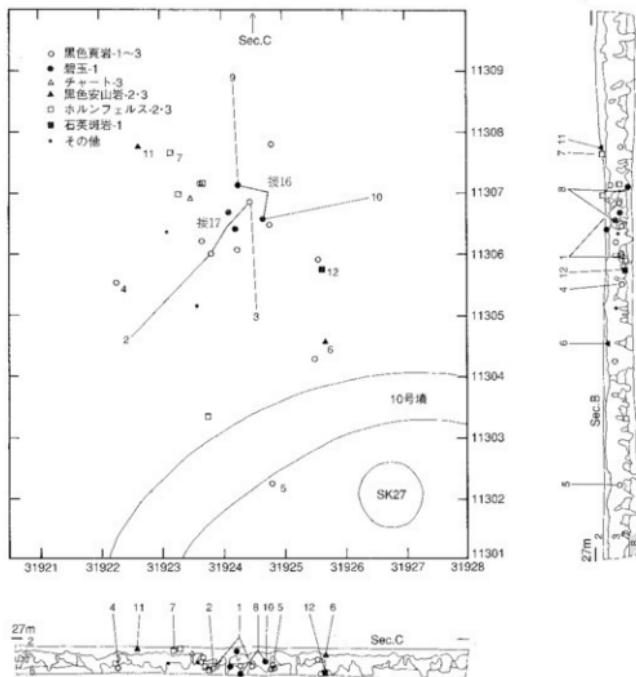
第19図 VII層段階 器種別分布図 (S=1/80)

#### VII層段階（包含層位：7層）

石器ブロック（第19・20図） 南21mで1基を検出した。平面分布範囲は東西3.6m×南北5.8mに広がり、北側の東西2.4m×南北2.0mの範囲の分布密度が高い。垂直分布範囲は標高26.5m～26.6mの0.1m幅に分布する。検出遺物は石器23点（391.3g）、螺2点（2.4g）の合計25点（393.7g）である。石材種構成は、黒色頁岩1～3《B.Sh-1～3》、黒色安山岩2・3《B.An-2・3》、ホルンフェルス2・3《Ho-2・3》、碧玉1《Ja-1》4点、チャート3《Ch-3》1点、硬質頁岩1《H.Sh-1》、石英斑岩1《Qp-1》1点と7種11個体である。器種構成は、鋸齒縁石器1点、楔形石器1点、剥片18点、石核1点、研磨器1点、敲打器1点である。

黒色頁岩1《B.Sh-1》 7点（32.8g）で構成する個体。表面の風化による軟質化・剥落が著しい。その内接合資料は2点1組（接-17）を確認した（1～3）。40mm以上の縦長剥片を剥離しながら、途中に打面再生工程を組み込んでいる。剥離方向に180度対称する箇所があり、打面転位が行なわれていたことが認められる。器種構成は剥片6点、石核1点である。

黒色頁岩2《B.Sh-2》 鋸齒縁石器1点（31.7g）で構成する個体（5）。灰色（5Y6/1）で風化しているが、黒色頁岩1よりは状態は良い様だ。縦長剥片を利用して、腹面側に二次加工を施している。二次加工の程度が大きく、縁辺が鋸歯状を成す。



第20図 VII層段階 石材別分布図 (S=1/80)

黒色頁岩3《B.Sh-3》 2点(19.6g)で構成する個体(4)。灰黄色(25Y7/2)で、今回検出した黒色頁岩の中では最も風化程度が低く、還存状態が良好である。器種構成は剥片2点である。

黒色安山岩2《B.An-2》 研磨器1点(24.1g)で構成する個体(11)。表面はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈する。研磨による面取り・稜線が形成されている。

黒色安山岩3《B.An-3》 剥片1点(6.1g)で構成する個体(6)。風化面で覆われているが、硬質部による並行縞模様が残る。武子川・姿川産の黒色安山岩と見られる。

ホルンフェルス2《Ho-2》 3点(6.9g)で構成する個体(7)。灰白色(5Y7/2)で粉を吹いたような風化面を成す。器種構成は3点とも剥片である。

ホルンフェルス3《Ho-3》 剥片1点(1.6g)で構成する個体。にぶい黄橙色(10YR6/4)を成し、最も風化が進行している。実測図は未掲載。

碧玉1《Ja-1》 4点(20.0g)で構成する個体。自然是浅黄橙色(10YR8/3)で内部は淡黄色(5Y8/3)を成し、僅かに褐色の斑文が認められる。接合資料は2点1組(接-16, 8~10)を確認した。断面三角形で17mm程の厚みのある楔形石器を、両極削離によって自然面部を除去している。この除去作業はある程度成形が進行して以降の剥離のようだ。器種構成は楔形石器1点、剥片3点である。楔形石器(9)は、直線状を成して対峙する2辺に、末端にヒンジフラクチャーを生じている小規模な剥離面が密集している。



第21図 VI層段階 石器実測図(1) (S=4/5)

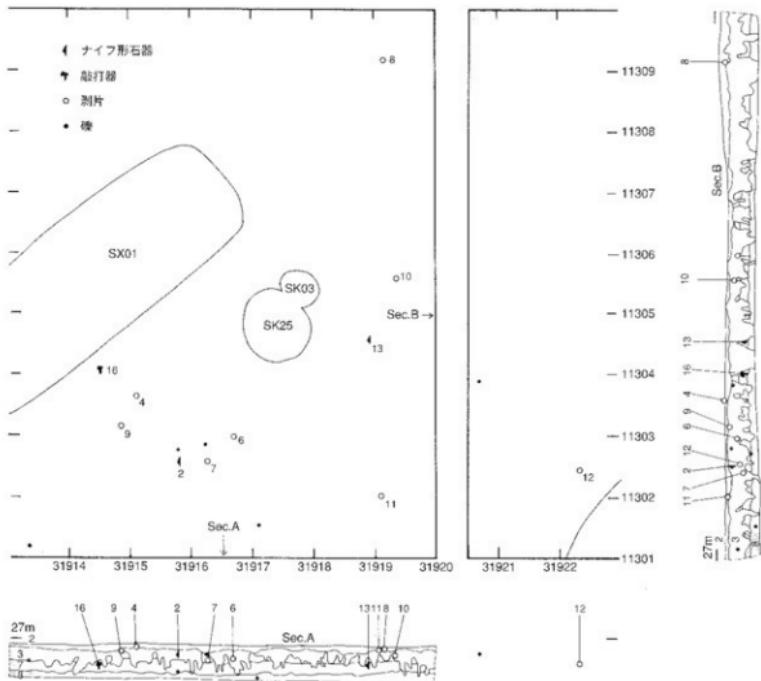


第22図 VII層段階 石器実測図（2）（S=4/5）

チャート3《Ch-3》 剥片1点 (2.3 g) で構成する個体。自然面はにぶい黄橙色 (10YR6/4) で内部は暗灰黄色 (25Y5/2) を成す。

硬質頁岩1《H.Sh-1》 剥片1点 (1.8 g) で構成する個体。内部は黒褐色 (7.5YR3/2) で、一部には粗粒部が残っている。

石英斑岩1《Qp-1》 敲打器1点 (244.4 g) で構成する個体 (第22図12)。平坦面2面の中央に溝状の窪みが集中する。側面にも2ヶ所に窪みが認められる。

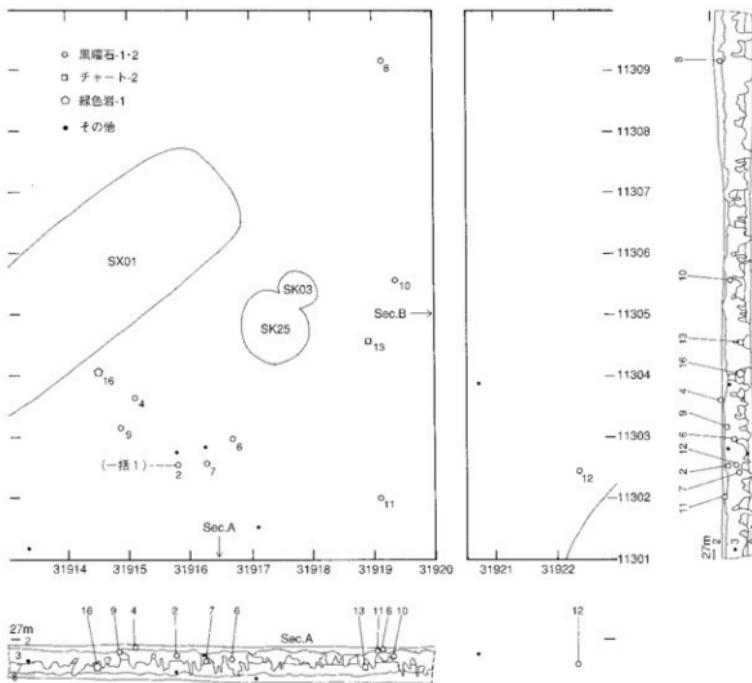


第23図 V層～IV層下部段階 器種別分布図 (S=1/80)

#### V層～IV層下部段階（包含層位：6層）

石器ブロック（第23・24図） 南1区で1基を検出した。平面分布範囲は東西5m×南北7.8mに分布し、南西側の東西2.4m×南北2.2mで分布密度が高い。垂直分布範囲は標高26.5m～26.8mの0.3m幅に分布する。SX-1内から検出した石器3点（3、14～15）は、包含層内検出のナイフ形石器2と3が接合関係を示すこと、周間に他段階の石器群が分布しないことから本段階の資料群として扱う。検出遺物は石器類15点（141.4g）、礫5点（478.1g）で合計20点（619.5g）である。石材種構成は、黒曜石1～2《Ob-1～2》、黒色頁岩4《BSh-4》、硬質頁岩2《HSh-2》、チャート2《Ch-2》、緑色岩《G.R-1》と5種6個体である。黒曜石に対しては床地推定作業を実施している。その結果、黒曜石1～2と共に栃木県高岡山日湯沢群産と判定されている（付編2の望月報告を参照）。

黒曜石1《Ob-1》（第25図1～10、12） 10点（36.5g）で構成する個体。漆黒様の黒曜石で白色微結晶は少ない。接合資料は2点1組（接-15）を確認している。この資料はナイフ形石器2点で、背面の先端部に転覆面が一部残る。打面調整を施しながら横長剥片を剥離している。器種構成はナイフ形石器2点、剥片7点、石核1点である。ナイフ形石器は2点ともに素材剥片時の打面を残置し一側縁加工を施している。2は器体形状が切り出し状を成し、3は二次加工部が曲線状を成す。石核（5）は表裏で90度剥離方向が直交する。一部



第24図 V層～IV層下部段階 石材別分布図 (S=1/80)

に「ズリ面」が残る。

黒曜石2《Ob-2》(第25図11) 剥片1点(9.8g)で構成する個体。黒曜石1よりも白濁する。一側縁に微細な剥離面が連続しないで分布する。

黒色頁岩4《B.Sh-4》(第26図15) 削器1点(20.7g)で構成する個体。灰白色(5Y7/1)に風化して軟質化している。打点が割れ円錐状に残り、片側を打点から同時に緩割れによって失っているようだ。鋭角を成す側縁の腹面側に、連続する剥離面が刃部を成形している。

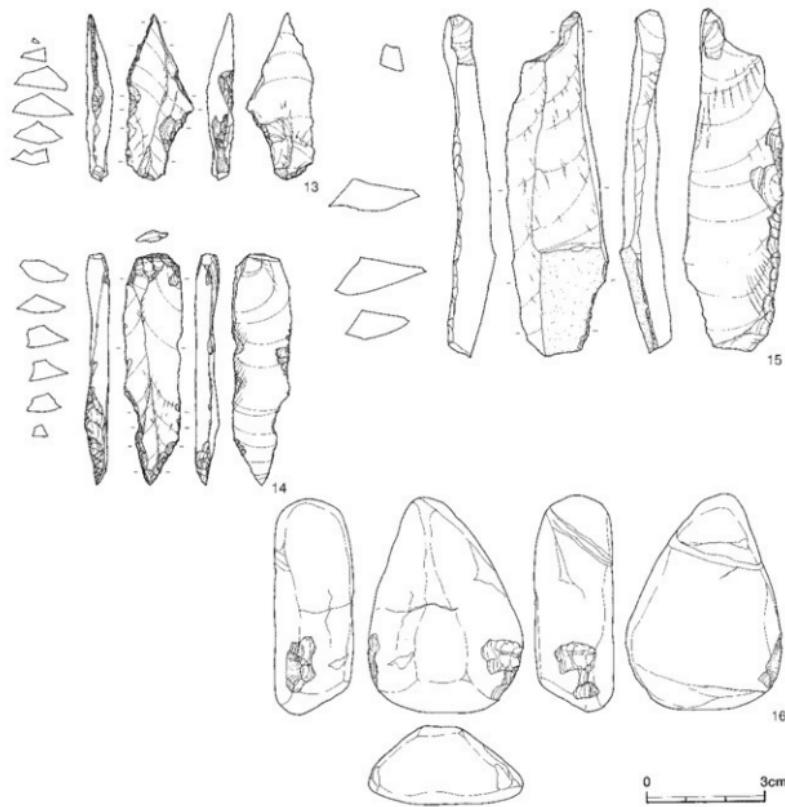
硬質頁岩2《H.Sh-2》(第26図14) 錐形石器1点(4.8g)で構成する個体。灰黄褐色(10YR5/2)で僅かに斑紋が認められる。打面頭部調整が丁寧に施され打面には割れ円錐が認められる。素材剥片末端側に内側縁からの二次加工を施し、錐部を成形している。

チャート2《Ch-2》(第26図13) ナイフ形石器1点(3.5g)で構成する個体。灰色(5Y5/1)で節理面も無く均質に見える。背面には、180度剥離方向の異なる剥離面が認められる。調整打面が残るが、バルブ部にはインバースリタッチが施されている。両側縁に二次加工を施して切り出し状を成す。

緑色岩《G.R-1》(第26図16) 敷打器1点(59.1g)で構成する個体。略三角形礫の2個縁角に敲打痕が認められ、そこから剥離面が生じている。さらに右側縁に表示した範囲には、敷打板と擦板が隣接している。



第25図 V層～IV層下部段階 石器実測図（1）（S=4/5）



第26図 V層～IV層下部段階 石器実測図（2）(S=4/5)

c) 旧石器時代の小結

**Ⅴ層段階** 本遺跡では、不定形剥片を使用して台形様石器や楔形石器を少数製作している事例を検出した。珪質頁岩や流紋岩など鬼怒川上流域で採取可能な石材が持ち込まれ、那珂川流域で採取されるメノウや大洗海岸産の黒色安山岩の使用量は低い。本段階の資料は古鬼怒川流域では近年確認事例が増加していて、土浦市域でも下野遺跡で黒色頁岩を使用して楔形石器を主要器種として製作している資料群を確認している。

石器ブロックに近接して、ほぼ同時期の遺構と考えられる炉跡遺構を1基検出した。後世の溝状遺構壁面での検出で一部削平を受けていたが、炉床部が認識しやすい遺存状況であった。AMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、BP31500頃との測定結果が提示された。旧石器時代の炉跡遺構は、土浦市域では田村沖宿遺跡群の調査でも寺畠遺跡・石橋北遺跡で各1基検出しており、今回の事例は3例目である。測定法が異なるため測定値には隔たりがあるが、ほぼ同時期の遺構と考えられる。炉と石器ブロックの存在から、ある程度の期間は当時の人のキャンプサイトであったことを示している。

旧石器時代資料の捏造問題が露呈してから、日本島における前・中期旧石器時代の存在が再び模索されている中で、茨城県南部では未だ姿を見せない「古い石器」を考える契機と成り得るだろう、3万年を越えて遡る後期旧石器時代開始期の石器としての位置付けができる貴重な資料群である。本資料と田村沖宿遺跡群の寺畠遺跡の資料を検討することが今後の検討事項となるだろう。

**V層段階** 常名台遺跡群では、本段階のナイフ形石器単独検出事例を数多く確認していたが、小規模ながらも製作遺構の確認は今回が初の事例となった。古鬼怒川流域や花室川流域などでは単独資料の確認された遺跡が多数分布しているが、石器ブロックは検出していなかった。その様な遺跡では、本遺跡のように小規模な石器ブロックが散漫に分布している可能性を考慮しなければならないと考える。

**V層～VI層下部段階** 茨城県南部域において本段階の資料は、栃木県高原山産黒曜石を主要石材としている特徴がある。古鬼怒川流域では近年同段階で石材利用の様相が類似する遺跡の調査が相次いでおり、土浦市域でも向原遺跡（高原山産黒曜石と鬼怒川水系武子川・姿川産の黒色鞍山岩）、入ノ上遺跡（高原山産黒曜石）が該当する。横長剥片生産を基本としてナイフ形石器やエンドスクリイバー、少数例ではあるが寄居遺跡で角錐状石器も確認しており、南関東地域の調査事例と対比することがようやく可能になりつつある。石材供給の様相からは、鬼怒川流域産の石材が主体を占めて、茨城県中央部を流れる那珂川や北部の久慈川流域で採取できる黒色鞍山岩やメノウがほとんど持ち込まれていないことは注意すべき様相と考えている。当時の人の活動に「古鬼怒川」が果たした重要性を垣間見ることが可能となっている。

**水洗選別作業について** 2002年度の神明遺跡第4次調査に引き続いて実施した水洗選別作業によって回収した微細遺物は、第1の目的が現地作業によって検出位置の記録化ができなかった資料を回収することであったが、加えて微細遺物35点の内6点が接合資料を構成し、検出地点において二次加工作業が行われた証明を示す（第11図14）事を明らかにすることができた。石器ブロックがいかなる作業の結果に形成された遺構なのかを考える際に、長軸長規模10mm以上の石器のみの検出資料の観察から導き出された内容よりも、微細遺物を含めた資料群の観察結果を加味して検討作業を行った方が実態に近い内容であろうと考える。発掘作業全体から見ると水洗選別作業は手間が掛かり作業効率は悪くなるが、資料操作から導き出した結果は遅延充実した内容を示すことができたと考える。

常名台遺跡群では現在までに、X層（9層）段階と細石器石器群を除く、後期旧石器前半から縄文時代草創期に至る各段階の石器群を検出している。この様に、ある程度の範囲内に広がる遺跡群で各段階の様相が編年順に確認できるのは、田村沖宿遺跡群や木田余台遺跡群などと共に広域調査事例の効果であろう。今後調査が進展すれば、さらに旧石器時代の資料は増加していく、地形と遺跡の関連性が検討できる良好な広域調査事例が提示できることを考えている。今回実施したAMS法の放射性炭素年代測定や蛍光X線による黒曜石产地判定作業など、自然科学分野と連携してその分析手法を積極的に取り入れていくことにより、土浦の台地深くに残された過去の資料をより深く理解することが可能となると考えている。

第1表 旧石器觀察表1 (北側調査区・Ⅳ層階)

遺物No	記番No	X座標値	Y座標値	標高(m)	器種	石材	個体No	組合No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状
1	11324.44	31898.03	26.391	磨片	珪質頁岩	S.Shr-1			6.5	12.3	1.3	0.1	鈍面理面
2	11324.52	31997.68	26.321	磨片	砂岩	Sa							0.1
3	17-74	11324.12	31897.48	26.420	石核	チャート	Ch-1	13	21.8	19.0	11.6	4.2	
4	17-69	11324.53	31897.12	26.362	白粉様石核	チャート	Ch-1		16.1	19.8	4.9	1.0	
5	11324.44	31897.14	26.351	刮片	チャート	Ch-1			18.6	10.3	4.5	0.8	
6	13-46a	11324.30	31897.17	26.340	刮片	ホルンフェルス	Ho-1	14	47.6	33.1	15.1	24.6	
7	11324.85	31896.85	26.318	磨片	珪質頁岩	S.Shr-1			6.3	16.7	2.7	0.3	單側理面
8	12-26	11324.03	31896.77	26.255	石核	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	43.3	46.9	13.9	37.7	
9	13-46b	11324.82	31896.78	26.280	刮片	ホルンフェルス	Ho-1	14	40.8	25.3	11.8	10.9	
10	12-22a	11323.92	31896.50	26.324	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	16.2	13.0	4.3	0.9	自然面
11	11-6a	11323.84	31896.34	26.357	磨片	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	24.6	25.9	13.5	6.7	自然面
12	11323.66	31895.43	26.303	磨片	波紋岩	Rh-1			14.1	5.6	4.4	0.2	
13	11323.71	31896.16	26.363	磨片	珪質頁岩	S.Shr-1			10.1	9.5	6.7	0.5	自然面
14	11323.53	31896.28	26.336	刮片	波紋岩	Rh-1			12.5	5.0	4.2	0.1	
15	16-58	11323.70	31895.97	26.330	刮片	波紋岩	Rh-1	9	18.8	13.3	4.4	1.0	自然面
16	11323.31	31896.56	26.379	磨片	珪質頁岩	S.Shr-1			11.0	11.6	1.4	0.2	單側理面
17	11323.36	31896.76	26.384	刮片	チャート	Ch-1			12.6	7.7	3.9	0.4	
18	11323.31	31896.31	26.406	磨片	石英閃羽岩	Oo			42.8			39.5	
19	11323.05	31896.31	26.426	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1			7.9	6.8	2.0	0.1	自然面
20	12-33	11323.15	31896.93	26.428	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	2	14.6	12.7	4.9	0.5	自然面
21	12-22c	11323.31	31897.18	26.410	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	14.2	9.4	2.9	0.3	
22	15-48	11323.35	31897.57	26.333	刮片	波紋岩	Rh-1	8	12.3	14.9	3.9	0.4	自然面
23	11-5	11323.15	31897.95	26.429	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	10.0	9.9	4.8	0.2	自然面
24	11-3	11323.64	31897.28	26.373	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1	37.7	32.0	13.4	14.0	自然面
25	16-52	11323.64	31897.18	26.382	刮片	波紋岩	Rh-1	10	22.8	55.8	7.6	9.2	自然面
26	11323.91	31897.47	26.273	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1			6.8	10.1	3.6	0.2	
27	11323.24	31897.75	26.281	磨片	石英斑岩	Oo						1.9	
28	11323.47	31898.35	26.356	刮片	波紋岩	Rh-2			18.2	11.7	4.8	0.7	
29	11-8b	11323.07	31898.10	26.288	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	9.9	10.1	3.5	0.5	自然面
30	15-49	11322.85	31898.11	26.510	刮片	波紋岩	Rh-1	8	27.0	35.8	10.1	8.7	自然面
31	11322.60	31897.85	26.461	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1			7.2	8.3	6.0	0.3	理面
32	12-18	11322.41	31897.56	26.295	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	25.1	20.3	7.5	3.8	自然面
33	11322.50	31897.02	26.447	刮片	波紋岩	Rh-2			10.8	19.9	3.4	0.5	線状
34	16-50	11322.50	31896.56	26.496	刮片	波紋岩	Rh-1	8	24.6	36.0	6.5	3.9	自然面
35	11322.38	31896.62	26.497	刮片	波紋岩	Rh-1			9.1	12.9	3.2	0.2	自然面
36	11322.20	31896.73	26.526	磨片	砂岩	Sa						0.6	
37	11322.25	31896.19	26.361	楔形石核	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	21.7	15.0	6.9	2.2		
38	16-56	11321.42	31897.32	25.471	刮片	波紋岩	Rh-1	7	19.8	13.7	2.6	0.6	自然面
39	11321.06	31897.11	26.562	刮片	石英斑岩	Oo						0.9	
40	11321.95	31899.11	26.552	磨片	石英斑岩	Oo						1.6	
41	11322.85	31894.88	26.436	赤色塊	—								
42	11322.72	31894.41	26.425	刮片	電色安山岩	BAn-1			7.3	4.0	1.6	0.1	
43	13-44	11322.63	31894.36	26.422	刮片	珪質頁岩	S.Shr-2	5	9.8	12.0	3.0	0.3	自然面
44	13-36	11321.34	31893.91	26.437	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1		22.0	21.4	4.3	1.2	自然面
45	11321.52	31894.65	26.515	磨片	石英斑岩	Oo						1.6	
46	12-32	11324.26	31895.40	26.318	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	2	9.1	9.3	1.5	0.1	自然面
47	13-37	11324.29	31896.00	26.267	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1		19.0	22.5	13.0	8.9	
48	12-21	11323.96	31895.44	26.312	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	13.1	12.1	2.5	0.3	
49	11322.86	31895.73	26.318	磨片	砂岩	Sa						6.6	
50	16-53	11322.27	31895.83	26.367	刮片	波紋岩	Rh-1	10	11.1	13.9	4.1	0.3	自然面
51	13-46c	11323.07	31895.52	26.360	刮片	珪質頁岩	S.Shr-2	5	11.0	4.5	1.9	0.1	
52	11322.50	31895.77	26.353	刮片	チャート	Ch-1			4.8	3.1	2.1	0.1	
53	11321.97	31895.96	26.208	磨片	チャート	Ch						0.1	
54	11322.15	31896.65	26.264	磨片	チャート	Ch						5.4	
55	11322.45	31896.55	26.266	刮片	波紋岩	Rh-1			8.1	5.4	0.7	0.1	
56	12-35	11322.53	31895.27	26.363	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	4	11.9	6.9	2.1	0.2	自然面
57	12-24c	11322.73	31896.16	26.284	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	12.6	7.8	2.9	0.3	
58	11322.91	31896.02	26.272	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1			9.7	8.6	2.4	0.2	自然面
59	17-71	11323.08	31896.50	26.233	刮片	チャート	Ch-1	13	16.5	7.9	5.7	0.7	
60	11-12	11323.10	31896.60	26.207	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	21.4	25.7	6.9	3.1	
61	11-16	11323.49	31896.66	26.245	楔形石核	珪質頁岩	S.Shr-1	1a	43.5	31.9	14.6	15.7	
62	12-24a	11323.94	31896.94	26.242	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1	1b	16.1	9.7	4.9	0.8	
63	11323.57	31896.72	26.210	刮片	波紋岩	Rh-1			7.9	9.9	2.1	0.1	自然面
64	16-63a	11323.82	31896.81	26.241	刮片	波紋岩	Rh-1	12	16.6	8.9	3.2	0.4	自然面
65	11323.76	31896.60	26.247	磨片	砂岩	Sa						0.2	
66	11323.56	31896.35	26.304	刮片	珪質頁岩	S.Shr-1			10.5	6.2	2.7	0.1	單側理面
67	13-43	11323.62	31896.26	26.214	刮片	珪質頁岩	S.Shr-2	5	18.9	19.0	3.0	1.0	自然面

造物No.	図版No.	X座標値	Y座標値	標高(m)	岩種	石 材	個体No.	接合No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打頭形状
68	11323.93	31896.26	26.256	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2			9.4	6.0	2.4	0.1	
69	16-68	11323.98	31896.96	26.218	剥片	流紋岩	Rh-2		37.6	21.2	13.0	5.8	
70	13-46c	11324.00	31896.88	26.257	剥片	ホルンフェルス	Ho-1	14	44.3	14.5	12.4	8.7	
71		11324.18	31896.98	26.251	剥片	流紋岩	Rh-1		7.6	4.7	1.0	0.1	
72	12-24b	11324.53	31896.87	26.212	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1b	16.3	30.3	10.9	5.2	
73	11-13	11324.52	31896.96	26.297	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1a	14.8	25.0	15.9	4.6	自然面
74	16-63b	11324.61	31897.30	26.276	剥片	流紋岩	Rh-1	12	15.5	9.2	3.3	0.3	自然面
75	11-17	11324.53	31897.48	26.246	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1a	17.4	11.6	5.5	0.9	自然面
76	10-2a	11324.34	31897.51	26.307	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1c	23.9	30.2	8.4	4.9	自然面
77	12-36	11324.14	31897.51	26.267	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	4	7.2	7.5	1.7	0.1	
78		11324.08	31897.31	26.263	剥片	チャート	Ch-1		5.1	8.4	1.9	0.1	
79		11323.89	31897.41	26.356	塊	チャート	Ch					0.4	
80	16-61	11323.65	31897.35	26.236	剥片	流紋岩	Rh-1		16.1	26.0	4.3	1.3	自然面
81		11323.22	31897.22	26.270	剥片	チャート	Ch-1		4.4	5.2	1.3	0.1	
82		11323.08	31867.15	26.274	塊	チャート	Ch					0.8	
83	12-20	11323.05	31867.59	26.243	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1b	10.2	12.4	2.5	0.2	自然面
84		11323.03	31897.97	26.221	剥片	ホルンフェルス	Ho-1		3.7	2.2	1.6	0.1	
85	11-5	11322.92	31867.08	26.211	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1a	12.2	8.4	2.3	0.2	
86		11322.72	31897.03	26.213	剥片	ホルンフェルス	Ho					0.1	
87	12-28	11322.58	31867.10	26.256	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	3	5.0	6.3	1.9	0.1	自然面
88		11322.65	31897.69	26.278	剥片	石英斑岩	Op					1.8	
89	13-40	11322.48	31897.46	26.218	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2	6	9.4	8.9	1.6	0.1	自然面
90	12-31	11322.74	31897.34	26.260	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	2	9.1	7.9	0.9	0.1	自然面
91		11321.85	31897.65	26.466	塊	チャート	Ch					0.1	
92		11321.85	31868.08	26.466	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1		8.2	10.1	3.0	0.2	自然面
93		11322.55	31898.22	26.249	塊	チャート	Ch					0.2	
94	11-9	11324.09	31865.74	26.186	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1a	23.9	20.2	6.7	2.9	自然面
95		11323.69	31895.49	26.201	剥片	流紋岩	Rh-1		27.0	14.2	5.3	1.6	單剝離面
96	13-45b	11323.06	31895.53	26.368	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2	5	16.6	14.6	2.6	0.7	自然面
97	13-45a	11322.82	31895.62	26.208	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2	5	10.7	10.2	1.8	0.1	自然面
98	11-15a	11322.78	31895.76	26.259	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1a	8.1	5.2	2.2	0.1	点 状
99		11322.60	31895.76	26.262	塊	砂岩	Sa					0.2	
100		11322.31	31895.56	26.219	赤色塊	—							
101		11322.20	31895.59	26.322	赤色塊	—							
102	16-67a	11322.51	31896.70	26.180	剥片	流紋岩	Rh-1	11	8.8	4.5	2.7	0.1	自然面
103		11323.41	31896.16	26.189	剥片	流紋岩	Rh-1		5.9	3.6	1.0	0.1	
104	17-73	11323.58	31896.27	26.236	剥片	チャート	Ch-1	13	9.4	6.1	1.7	0.1	点 状
105	16-64	11323.67	31896.14	26.212	剥片	流紋岩	Rh-1		23.6	19.2	9.9	3.2	自然面
106	16-55	11324.34	31896.36	26.193	剥片	流紋岩	Rh-1	7	19.6	15.7	4.7	0.9	自然面
107	12-22b	11324.29	31896.79	26.182	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1b	13.2	3.5	3.6	0.1	
108		11324.23	31897.71	26.187	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1		5.9	5.4	1.7	0.1	点 状
109		11322.62	31897.90	26.192	塊	チャート	Ch					5.0	
110		11323.83	31898.84	26.200	塊	石英斑岩	Op					4.8	
111		11324.24	31898.82	26.216	塊	石英斑岩	Op					0.1	
112	12-16	11323.47	31896.60	26.172	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1b	7.8	9.5	2.5	0.2	自然面
113		11324.50	31896.96	26.153	赤色塊	—							
114	16-60		31896.71	26.157	剥片	流紋岩	Rh-1		20.4	38.0	5.9	4.7	
115	12-23	11323.82	31896.72	26.150	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	1b	7.0	6.1	2.1	0.1	自然面
116	16-66	11323.88	31896.50	26.100	剥片	流紋岩	Rh-1		10.9	15.0	5.5	0.8	單剝離面
117		11323.03	31896.44	26.137	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1		8.2	6.7	3.0	0.1	單剝離面
118		11323.60	31896.60	26.135	剥片	流紋岩	Rh-1		14.3	15.6	4.4	0.8	單剝離面
119	12-65	11323.50	31896.62	26.095	剥片	流紋岩	Rh-1	7	15.3	9.7	2.5	0.2	自然面
120		11323.36	31896.52	26.172	塊	砂岩	Sa					0.4	
121	12-67b	11323.10	31897.03	26.141	剥片	流紋岩	Rh-1	11	9.3	5.0	2.2	0.1	自然面
122		11323.69	31896.94	26.067	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2		15.3	10.2	3.5	0.3	單剝離面
123	16-59a	11324.08	31897.65	26.154	剥片	流紋岩	Rh-1	9	9.5	3.4	4.6	0.4	自然面
124		11320.64	31899.30	26.418	塊	砂岩	Sa					0.7	
125		11325.77	31896.89	26.294	(欠番)	—							
126		11324.60	31895.97	26.110	剥片	チャート	Ch-1		9.9	11.8	3.2	0.3	
127		11324.31	31896.28	26.097	剥片	チャート	Ch-1		3.8	2.2	0.3	0.1	
128		11324.28	31896.92	26.093	剥片	流紋岩	Rh-1		18.3	5.4	3.1	0.2	
129		11324.04	31896.97	26.075	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1		4.9	3.8	1.5	0.1	自然面
130		11323.47	31896.36	26.021	剥片	黑色安山岩	BA-1		6.3	8.4	2.8	0.1	單剝離面
131	12-29	11322.79	31896.14	26.135	剥片	珪質頁岩	S.Sh-1	3	16.0	13.5	8.4	1.5	輪理面
132		11323.33	31898.00	26.137	赤色塊	—							
133		11324.18	31897.29	26.074	塊	石英斑岩	Op					8.7	
134	13-41	11324.52	31897.22	26.111	剥片	珪質頁岩	S.Sh-2	6	9.8	13.7	4.2	0.3	單剝離面
135		11325.01	31897.22	26.330	塊	石英斑岩	Op					0.1	
136		11325.69	31898.70	26.311	塊	チャート	Ch					0.1	
137		11318.73	31898.41	26.525	剥片	黑曜石	Ob-3		6.8	10.5	3.4	0.2	点 状

第2表 旧石器観察表2 (Ⅳ層段階・水洗選別資料のうち実測図掲載分)

遺物No.	回収No.	器種	石材	個体No.	接合No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状
WS-括1	11-10	剥片	珪質頁岩	SSH-1	1a	9.3	112.8	4.5	0.5	自然面
WS-括2	11-15b	剥片	珪質頁岩	SSH-1	1a	9.8	8.2	3.5	0.3	節理面
WS-括3	10-2b	剥片	珪質頁岩	SSH-1	1c	13.2	9.1	5.3	0.8	なし
WS-括4	11-7	剥片	珪質頁岩	SSH-1	1a	10.9	6.2	2.4	0.1	単剥離面
WS-括5	16-59b	剥片	流紋岩	Rh-1	9	8.3	7.7	2.8	0.2	自然面
WS-括6	16-62	剥片	流紋岩	Rh-1		20.9	19.9	4.3	1.3	自然面
WS-括7	17-72	剥片	チャート	Ch-1	13	5.3	4.7	0.8	0.1	単剥離面

第3表 旧石器観察表3 (南側調査区)

遺物No.	回収No.	X座標	Y座標	標高(m)	器種	石材	個体No.	接合No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状
1	25-12	11302.45	31922.37	26.596	剥片	黒曜石	Ob-1		25.8	19.5	4.6	1.6	自然面
2		11303.90	31920.73	26.744	砂岩	Sa						269.0	
3	22-11	11307.75	31922.66	26.880	研磨器	黒色安山岩	B.An-2		45.4	27.0	16.6	24.1	
4	25-11	11302.03	31919.07	26.847	剥片	黒曜石	Ob-2		34.5	55.8	8.2	9.8	単剥離面
5		11301.54	31917.07	26.349	棒	トロトロ石	B.DS		35.4	29.2	17.7	21.9	
6	25-7	11302.58	31916.24	26.633	剥片	黒曜石	Ob-1		10.7	19.7	3.7	0.5	
7		11302.85	31916.22	26.758	砂岩	Sa			92.9	55.2	31.4	170.5	
8	25-6	11302.99	31916.66	26.645	剥片	黒曜石	Ob-1		13.0	21.0	3.2	0.5	単剥離面
9	25-2	11302.56	31915.75	26.750	ナイフ形石器	黒曜石	Ob-1	15	41.3	24.5	6.9	7.1	単剥離面
10		11302.77	31915.75	26.414	棒	石英斑岩	Q.P					13.8	
11	25-9	11303.16	31914.82	26.794	剥片	黒曜石	Ob-1		12.0	12.3	5.4	0.4	自然面
12		11304.07	31914.48	26.547	敲打器	緑色岩	GR-1		55.8	40.0	20.3	59.1	
13		11301.20	31913.31	26.656	棒	石英斑岩	Q.P					2.9	
14	26-13	11304.59	31918.89	26.547	ナイフ形石器	チャート	Ch-2		42.9	17.7	6.6	3.5	単剥離面
15	25-11	11305.58	31919.34	26.723	剥片	黒曜石	Ob-1		32.0	40.5	9.5	9.6	単剥離面
16	25-8	11309.17	31919.13	26.831	剥片	黒曜石	Ob-1		14.5	12.9	2.2	0.3	
17	21-5	11302.24	31924.81	26.585	圓錐錐石器	黒色頁岩	B.Sh-2		45.7	4.0	17.7	31.7	単剥離面
18		11304.26	31925.52	26.664	剥片	硬質頁岩	H.Sh-1		13.9	23.0	6.6	1.8	
19	21-6	11304.56	31925.70	26.762	剥片	黒色安山岩	B.An-3		25.0	29.5	9.1	6.1	
20	22-12	11305.74	31925.66	26.465	敲打器	石英斑岩	Q.P-1		72.6	56.6	35.2	244.4	
21		11305.91	31925.58	26.444	剥片	黒色頁岩	B.Sh-1		19.6	13.2	3.1	0.9	
22		11307.79	31924.83	26.529	剥片	黒色頁岩	B.Sh-1		20.8	10.4	8.3	2.0	
23	22-9	11307.11	31924.27	26.408	楔形石器	碧玉	Ja-1	16	28.3	36.5	16.9	14.1	
24	21-3	11306.85	31924.47	26.550	石核	黒色頁岩	B.Sh-1	17	45.0	16.5	20.2	21.9	
25		11306.20	31923.69	26.609	剥片	黒色頁岩	B.Sh-1		20.4	9.8	8.6	1.5	単剥離面
26		11306.40	31924.22	26.782	剥片	碧玉	Ja-1		16.8	23.6	6.1	1.8	
27	22-10	11306.57	31924.68	26.642	羽片	碧玉	Ja-1	16	25.5	26.3	6.8	3.5	
28		11306.47	31924.78	26.504	剥片	黒色頁岩	B.Sh-1		23.5	11.0	7.1	1.8	点状
29		11306.07	31924.26	26.562	剥片	黒色頁岩	B.Sh-3		6.0	10.5	1.7	0.1	
30	21-7	11307.64	31923.18	26.819	剥片	ホルンフェルス	Ho-2		30.3	16.3	8.3	3.6	単剥離面
31		11307.15	31923.67	26.711	剥片	黒色頁岩	B.An-3		16.4	23.4	6.2	2.8	複剥離面
32		11306.97	31923.32	26.846	剥片	ホルンフェルス	Ho-2		25.7	19.8	8.0	2.7	
33		11306.90	31923.50	26.763	剥片	チャート	Ch-3		21.9	16.3	10.4	2.3	
34		11306.36	31923.12	26.592	導片	石英斑岩	Q.P					1.9	
35		11306.68	31924.10	26.557	剥片	碧玉	Ja-1		14.9	12.6	4.0	0.6	点状
36		11306.00	31923.84	26.522	羽片	黑色頁岩	B.Sh-1	17	21.0	15.6	6.6	2.1	単剥離面
37	21-2	11305.52	31922.28	26.520	剥片	墨色頁岩	B.Sh-3		41.6	31.7	13.6	195.0	単剥離面
38	21-4	11305.15	31923.60	26.614	導片	石英斑岩	Q.P					0.5	
39		11303.34	31923.78	26.486	剥片	ホルンフェルス	Ho-3		20.5	17.1	4.6	1.6	複剥離面
40		11307.15	31923.71	26.564	剥片	ホルンフェルス	Ho-2		19.8	11.4	3.2	0.6	単剥離面
41	25-4	11303.45	31915.06	26.885	剥片	黒曜石	Ob-1		29.0	36.6	10.7	7.6	点状

第4表 旧石器觀察表4 (遺構外一括資料)

遺物No.	図版No.	器種	石材	個体No.	接合No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状
一括1	25-3	ナイフ形石器	黒曜石	Ob-1	15	38.0	22.1	7.9	6.0	単剥離面
一括2	26-14	錐形石器	硬質頁岩	H.Sh-2		59.5	15.2	5.4	4.8	単剥離面
一括3	26-15	削器	黑色頁岩	B.Sh-4		89.0	25.0	8.6	20.7	単剥離面
一括4	25-5	石核	黒曜石	Ob-1		31.0	31.8	13.0	9.9	
一括5		剝片	珪質頁岩	S.Sh-4		42.7	23.0	11.3	9.2	単剥離面
一括6		剝片	メノウ	Ag-2		31.1	39.6	10.3	8.6	単剥離面
一括7		剝片	メノウ	Ag-1		42.0	31.3	11.0	12.2	単剥離面
一括8		剝片	メノウ	Ag-3		16.6	16.8	6.8	2.0	複剥離面
一括9		剝片	メノウ	Ag-1		30.4	30.4	9.5	4.3	単剥離面

第5表 IX層段階 器種・石材個体別点数構成表

	S.Sh-1	S.Sh-2	Rh-1	Rh-2	Ch-1	B.An-1	Ho-1	小計
台形椎石器	0	0	0	0	1	0	0	1
錐形石器	1	0	0	0	0	0	0	1
楔形石器	1	0	0	0	0	0	0	1
剝片	58	9	40	5	14	2	5	133
石核	1	0	0	0	1	0	0	2
(敲打器)	0	0	0	0	0	0	[1]	[1]
小計	61	9	40	5	16	2	5	138

第6表 VII層段階 器種・石材個体別点数構成表

	B.Sh-1	B.Sh-2	B.Sh-3	B.An-2	B.An-3	Ho-2	Ho-3	Ja-1	Ch-3	H.Sh-1	Qp-1	小計
鑿齒縫石器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
楔形石器	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
剝片	6	0	2	0	1	3	1	3	1	1	0	16
石核	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
敲打器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
研磨器	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
小計	7	1	2	1	1	3	1	4	1	1	1	23

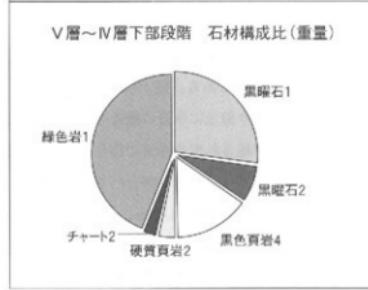
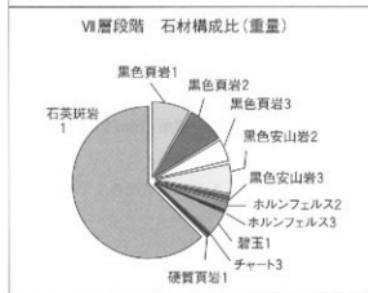
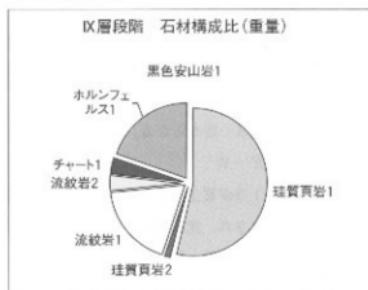
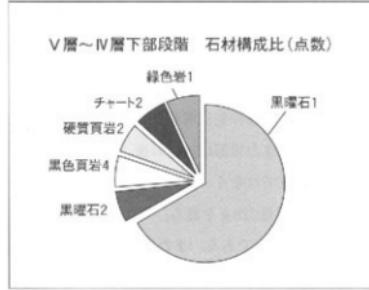
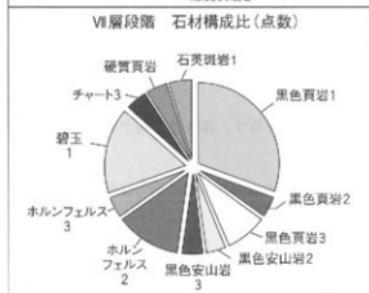
第7表 V層~IV層下部段階 器種・石材個体別点数構成表

	Ob-1	Ob-2	B.Sh-4	H.Sh-2	Ch-2	G.R-1	小計
ナイフ形石器	2	0	0	0	1	0	3
錐形石器	0	0	0	1	0	0	1
削器	0	0	1	0	0	0	1
剝片	7	1	0	0	0	0	8
石核	1	0	0	0	0	0	1
敲打器	0	0	0	0	0	1	1
小計	10	1	1	1	1	1	15

Ⅸ層段階 石材構成比		
石材	点数	重量
珪質頁岩1	61	121.6
珪質頁岩2	9	3.0
流紋岩1	40	42.4
流紋岩2	5	7.3
チャート1	16	8.2
ホルンフェルス	5	44.4
黒色安山岩1	2	0.2

VII層段階 石材構成比		
石材	点数	重量
黒色頁岩1	7	32.8
黒色頁岩2	1	31.7
黒色頁岩3	2	19.6
黒色安山岩2	1	24.1
黒色安山岩3	1	6.1
ホルンフェルス2	3	6.9
ホルンフェルス3	1	1.6
碧玉1	4	20.0
チャート3	1	2.3
硬質頁岩1	1	1.8
石英斑岩1	1	244.4

V～IV層下部段階 石材構成比		
石材	点数	重量
黒曜石1	10	36.5
黒曜石2	1	9.8
黒色頁岩4	1	20.7
硬質頁岩2	1	4.8
チャート2	1	3.5
緑色岩1	1	59.1



第27図 各段階 石材構成比(点数・重量) グラフ

## (2) 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代の遺構として土坑4基を検出した。その中で、遺物の出土はないものの21号土坑はその形態がいわゆる陥穴状を呈していたため、縄文時代に属するものと判断した。また他の3基はいずれも遺構に伴う遺物が出土しており、明確に所属時期を特定することができた。なお4号土坑は東西に細長い落ち込みで当初堅穴住居跡として把握していたものであるが、精査の結果、廻址や柱穴等の本来住居跡に配される諸施設が検出されず土坑とした。あるいはその形状から堅穴状遺構とすべきものであろう。

その他にも多数の土坑が確認されているが、いずれも出土遺物はなく、縄文時代に所属する土坑として決定することはできず、また明らかに覆土の状態等から判断して古代以降としたものについては別項に記載した。

### 1. 土坑

#### 3号土坑 (SK03) (第28図、PL. 9)

位置 調査区の北東、標高26.84~26.89mに位置する。

規模・構造 長軸1.14m、短軸0.94mで楕円形をなす。深さ24cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 褐色土層の單一層からなる。

主軸方位 N-12°-W

遺物 縄文土器1点が覆土中より出土している。第28図1は深鉢の胴部破片である。沈線により磨消懸垂文とモチーフが描出され、沈線間に單節LR縄文を充填させる。胎土に石英・長石粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。後期初頭・称名寺式に比定される。

所見隣接して27号土坑(縄文後期)が構築されているが、本址は前段階の後期初頭称名寺式期に相当する。

#### 4号土坑 (SK04) (第29図、PL. 9・33)

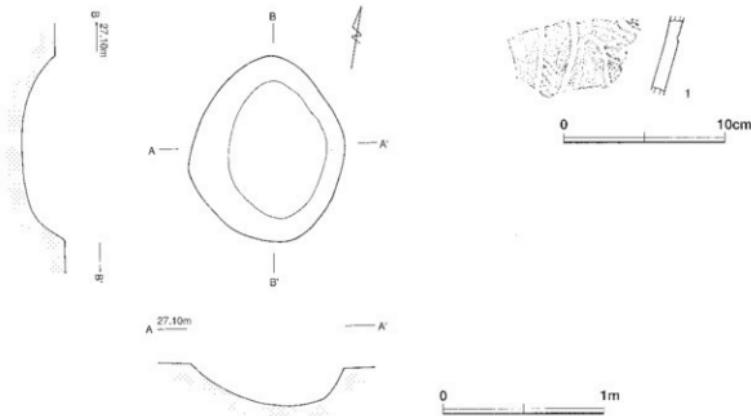
位置 調査区の北側緩傾斜部、標高26.66~28.26mに位置する。

規模・構造 長軸3.70m、短軸1.78mを測り、東西に長い不正楕円形をなす。深さは16cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなる。いずれも黄褐色土で多量のローム粒子を含み、北側斜面側の2層では焼上粒を微量に含む。

主軸方位 N-62°-W

遺物 斜面部で覆土が薄層であったが、縄文土器、石器が織まって出土している。いずれも深鉢で、第29図1はII線部破片で、無節Rの羽状縄文が施文されている。口縁部に幅狭く縦位施文され、その下位に横位さらに縦位施文されている。胎土に多量の纖維と石英粒を含む。2も羽状施文された胴部破片である。単節Rとしによる羽状縄文である。胎土に多量の纖維と石英粒を含む。3・4は胴部破片で、単節RL縄文が施文されている。やはり胎土に多量の纖維を含む。5は磨製石斧である。刃部の先端部分を欠損している。全体的に丁寧な研磨が施されやや幅狭な作りで、断面形は楕円形である。また刃部は敲打の後、二次研磨が施され再生(表面スクリーントーン部分)されているが、完全な刃部再生ではなく、途中で断念されているよう何える。大きさは現存長14.08cm、最大幅4.22cm、最大厚2.67cm、重量228gを測る。6・7は石皿の破片である。安山岩製で、6は全体的に研磨が施され、表面の縁堤部は明瞭である。また裏面は径1.3cm、深さ0.4cmの凹部を有する。現存の大きさは長さ9.83cm、幅11.02cm、最大厚5.75cm、重量854gを測る。7は縁堤



第28図 3号土坑・出土遺物

部の破片であるが、破損後さらに研磨が施されている。大きさは長さ10.04cm、幅7.71cm、厚さ6.25cm、重量451gを測る。

**所見** 出土した土器はいずれも前期前半黒浜式に比定される。北側斜面部が十分に確認できず、調査当初竖穴住居跡として精査していたが、柱穴・炉址等が検出されず、単に竖穴状の遺構であることが判明したため土坑とした。したがって竪穴状遺構として種別すべきであろう。

#### 21号土坑（SK21）（第30図）

**位置** 調査区の標高26.90～26.94mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.05m、短軸0.57m、深さ27cmで長い長方形をなす。土坑中央に2基の坑底施設が構築されている。北側ピットは径33×45cm、深さ9cmの楕円形、南側ピットは径44×44cm、深さ10cmの略円形を呈する。壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 褐色土（10YR4/4）の單一層である。

**主軸方位** N-26°-E

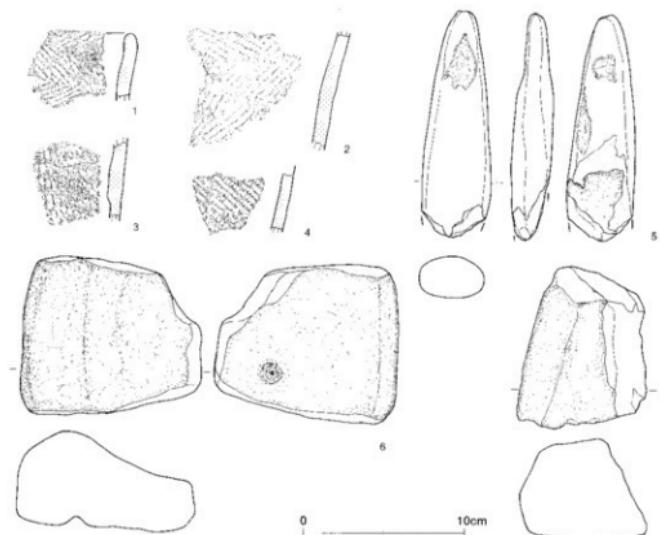
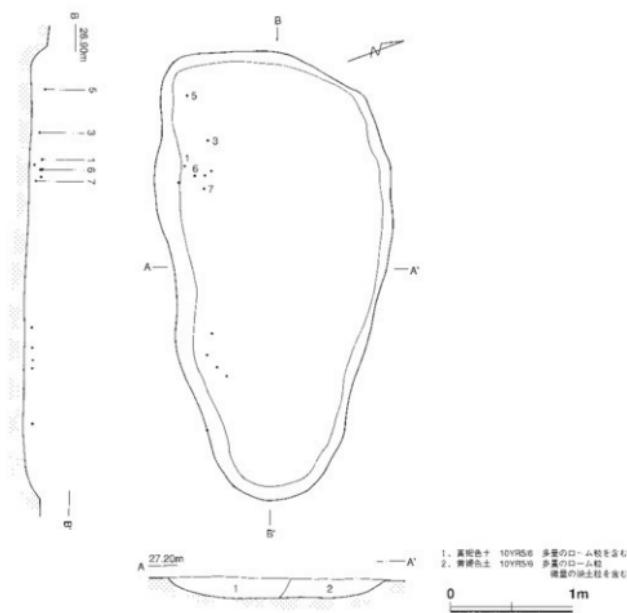
**遺物** 出土遺物は確認できなかった。

**所見** 長い長方形を呈し、坑底には2基のピットが設けてある。深度は浅いが形態は明らかに竪穴である。坑底施設の底面は鍋底状で明確な杭痕を把握できなかった。なお、出土遺物は検出されなかったが、周辺から縄文早中期葉・条紋系土器が出土しており、所属時期を早中期葉に比定したい。

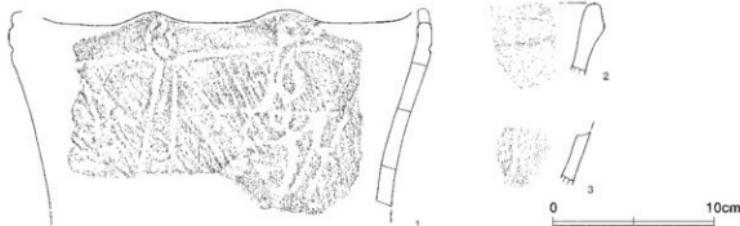
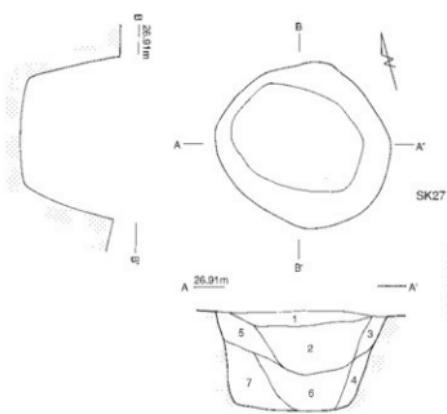
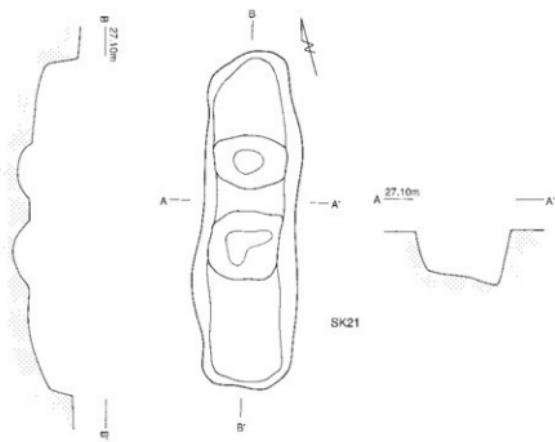
#### 27号土坑（SK27）（第30図、PL. 10・33）

**位置** 調査区の北東側。標高26.72～26.80mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.05m、短軸0.95mで円形をなす。確認面からの深さ61cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に近い外傾して立ち上がる。



第29図 4号土坑・出土遺物



第30図 21・27号土坑、27号土坑出土遺物

**覆土** 7層からなる。ほぼレンズ状堆積を呈しており、覆土上層の1層褐色土、中層の2層暗褐色土、3・5層の黄褐色土、下層の4層黄褐色土、6・7層褐色土が堆積している。

**主軸方位** N-35°-W

**遺物** 繩文土器が3点出土している。第30図1は推定口径25cmを測る深鉢の口縁部破片である。小突起を有する波状口縁で、胴部は括れ、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は幅狭い沈線区画された無文帶で、底面部に沈線によるC字状文が配される。胴部は斜行する平行沈線文を地文に沈線による丁字状あるいは逆丁字文を磨消懸垂文として垂下させる。胎土に石英・長石粒を含み、色調は黄橙色を呈する。2は深鉢の口縁部破片。無文で口縁部が肥厚する。胎土に石英・長石粒を含み、色調は黄橙色を呈する。3は深鉢の胴部破片。単節RL綱文縱位施文を地文に、沈線文が懸垂する。胎土に石英・長石・スコリア粒を含み、色調は橙色を呈する。

**所見** 本址は旧石器文化層の確認段階で検出されたもので、覆土の状態が判別できず困難を要した。覆土中から繩文土器が出土し、繩文土坑であることが判明した。繩文土器は3点出土しており、1以外は小破片である。時期は後期前半堀之内1式に比定される。

## 2. 遺構外出土遺物

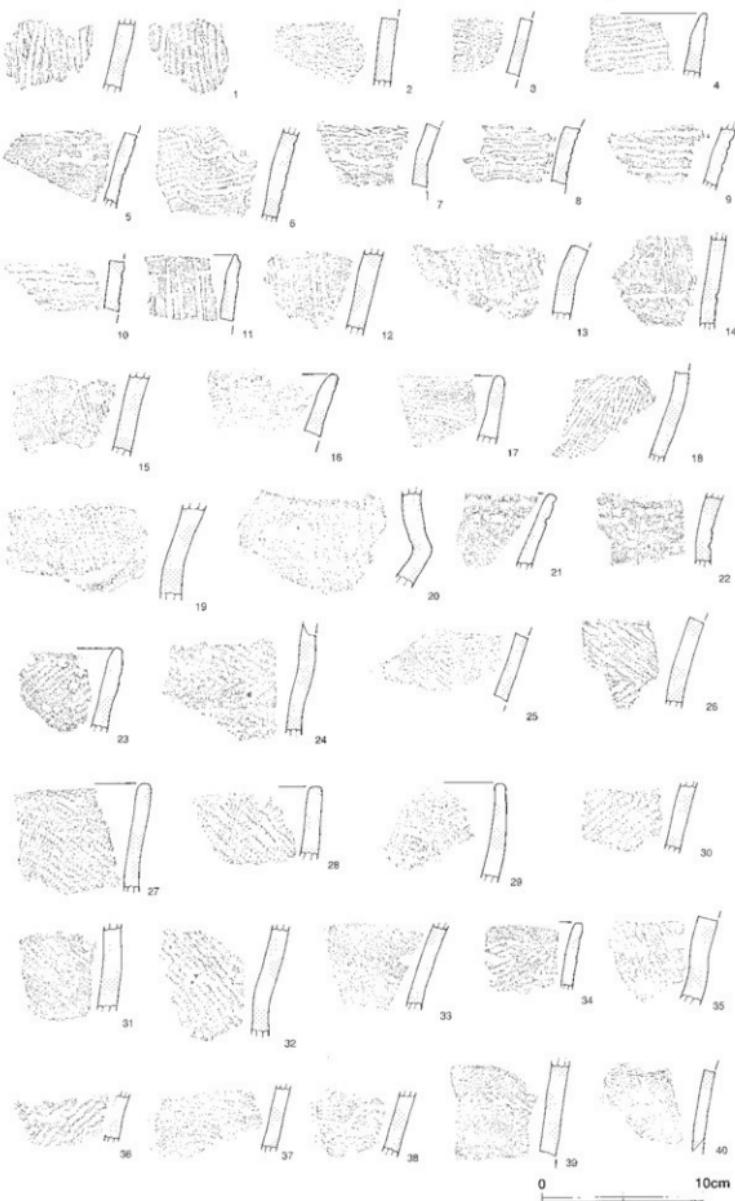
本遺跡全体から繩文時代の遺物が出土している。とくに3号墳とその周辺には包含層と思われるローム層上面の褐色土層中から比較的多くの遺物が確認されていた。しかし薄い表土層直下であることから繩文土器でも前期と後期の上器がほぼ同レベルで出土していること、さらに近世遺物も混入するなど繩文包含層を把握することが困難であった。また明らかに時期の異なる遺構である古墳周溝や溝状遺構・土坑等にも多量の繩文土器が混入されている。ここでは繩文遺構以外で出土した企土器や石器、土製品を一括してここに掲載した。

### 繩文土器（第31～33図、PL. 34～37）

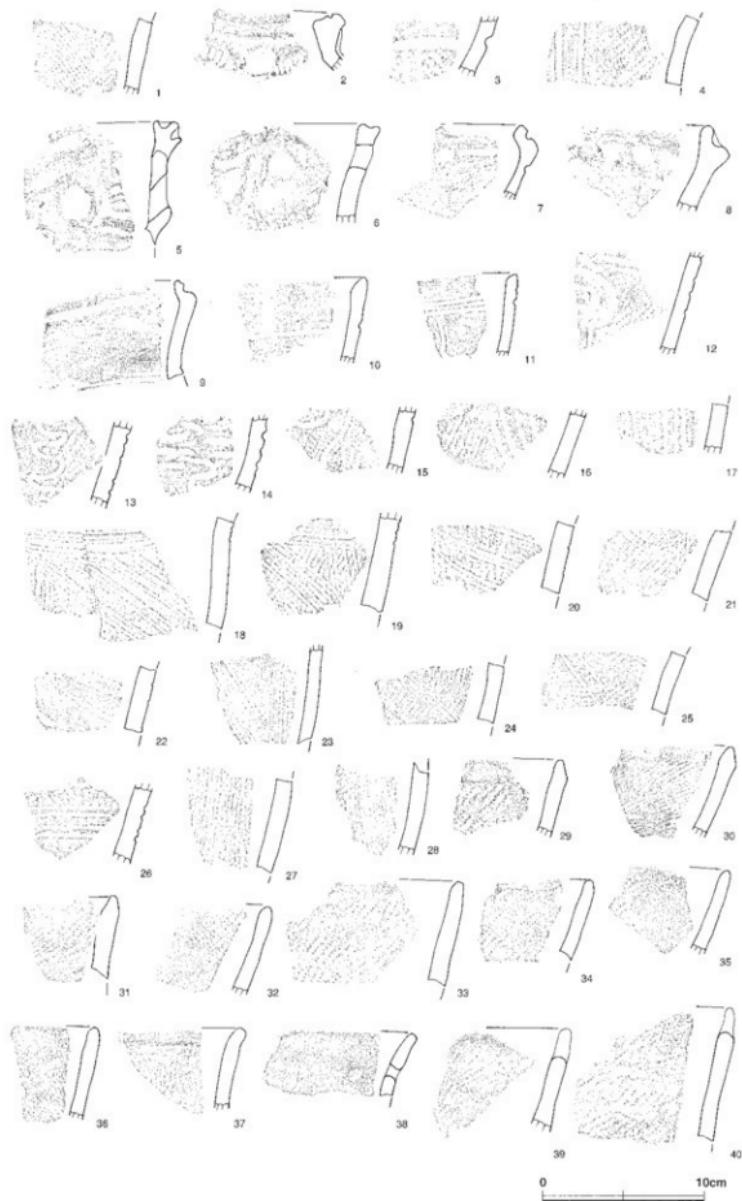
繩文土器は早期末葉から後期中葉にいたるまで確認されているが、とくに前期前半・黒浜式土器と後期前半・堀之内1式土器が盛まっている。いずれの時期も小規模とはいえ当該期の遺構が検出されており、これらに関連するものと推定される。

第31図1は早期末葉・条痕文系土器である。貝殻条痕文が表裏面に施されている。茅山式。同図2～38は前期前半・黒浜式土器に比定される一群である。4～10は半截竹管工具による横位施文される一群で、4は平行直線文、5は平行沈線文にコンパス文が併せ施文される。6はやや雜な波状文、7～9は波状沈線文、10は押引き文が施文されている。11～15は縱位に沈線文が垂下される一群で、11・15は平行沈線文。12は条痕状に間隔を開けることなく密に施文する。13は比較的太い施文具による重線。14は粗い沈線を垂下させる。16～18は彌歯状工具による条線文を施文する。19・20は同一個体である。貝殻痕文を施文する。21～23は繩文通文に円形竹管状工具による円形刺突文を施文するもので、21・22は口縁部に並行して円形刺突文を巡らし、23はさらに円形刺突文を垂下させる。24～26は羽状繩文を施文し、27～33は単節繩文、34・35は無節繩文を施文し、36は結節繩文がみられ、37は燃糸施文である。同図39・40は結節繩文が施された前期末葉の土器である。

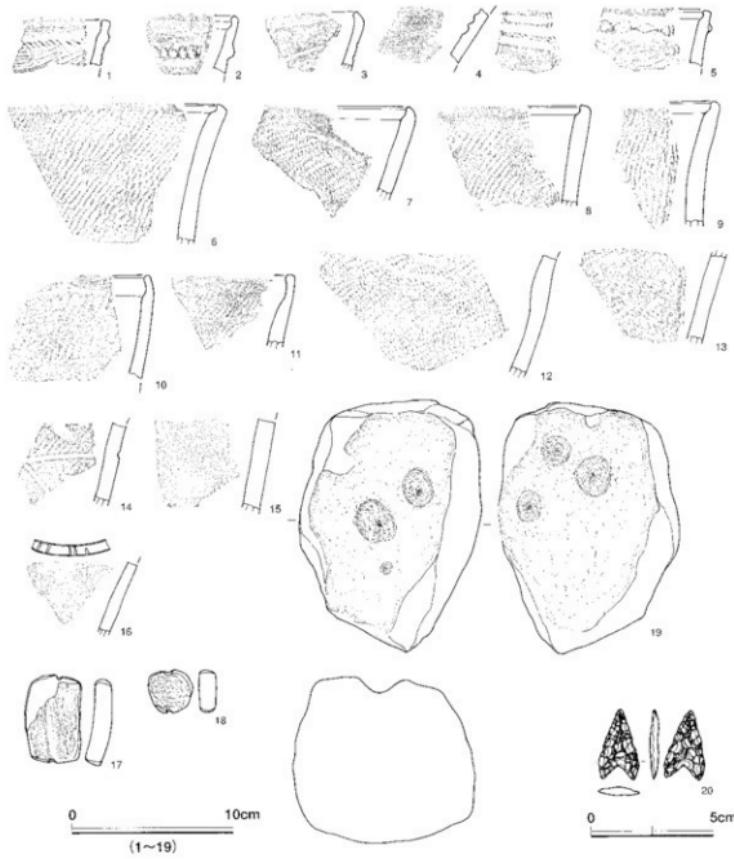
第32図1は縱位羽状繩文が施された中期前半の土器。2～4は加曾利E式土器。2は口縁部が肥厚し、内傾する深鉢で、底帯による棒状区画文内に縱位の沈線文を充填させる。加曾利E1式。3・4は磨消懸垂文



第31図 遺構外縄文時代遺物（1）



第32図 遺構外縄文時代遺物（2）



第33図 遺構外縄文時代遺物（3）

が垂下する加曾利E2式後半の上器である。

同図5~40は堀之内1式土器を一括した。5・6は波状口縁を呈する深鉢。口縁部は無文で、突起直下に貫通する円孔が穿たれ、5は円孔を中心に沈線棒状区画文を配する。6は口唇部に沈線が巡る。7・9は口縁部に1条の沈線が巡らせ、7は円形凹文を配する。8は口縁部に並行して円形の凹文が巡らす。10は口縁部を無文とし、沈線によって区画される。11も平行沈線による区画文と懸垂文を垂下させる。12は胸部破片で、太沈線による蕨手状文を施す。13・14は縄文地文に蛇行沈線文を垂下させる。15も縄文地文に曲線文を描出す。16は多重沈線による弧線文を施す。17~27は縄文地文に半截竹管状工具を用いた平行沈線による幾何学状文が描出される。なお、26・27は縦位の曲線状に垂下せる。28~40は縄文施文のみ深鉢を一括し

た。39・40は山形状の把手を有し、波状口縁を呈する。

第33図1・2は堀之内2式土器である。精製土器で、口縁直下に一条の降帯を巡らし、1は表面を押圧し巡らす。2は刻目を施し、内面に沈線が巡る。3～11は加曾利B1式土器である。3は口唇部がわずかに内湾する精製土器である。外面に沈線を施す。4は浅鉢の口縁部破片である。内面文様として縄文施文上に沈線文を重層させる。5～11は粗製土器で、5は口唇部直下に紐線文を巡らす。8～11は口縁部内面に沈線文を巡らす。14は堀之内2式土器の深鉢副部破片である。縄文地文に幾何学的な沈線によって描出される。15も堀之内2式の粗製土器。6単位の櫛歯状工具による条線文を垂下させる。16は堀之内式土器の崩部破片で、接合部に刻み目を有する。

17・18は土器片鱗である。17は長さ5.47cm、幅3.22cm、厚さ1.13cm、重量30.64gを測り、長方形を呈する。周縁は打削後研磨を施す。長軸中央に紐掛溝を有する。18は長さ2.58cm、幅2.63cm、厚さ1.00cm、重量8.56gを測る。円形を呈し、周縁は打削後丁寧な研磨が施され、短軸にV字状の紐掛溝を刻む。

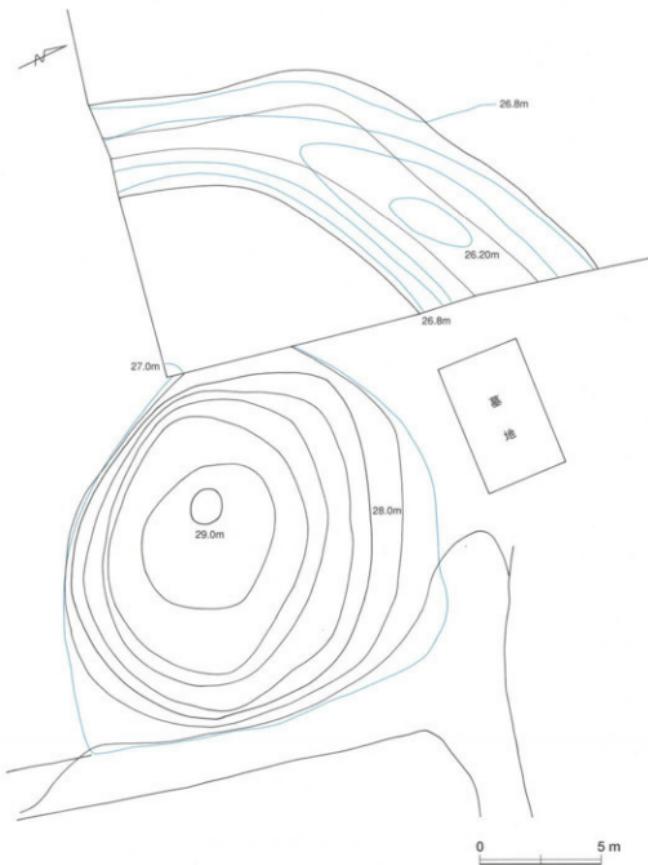
19は多孔石の破片である。花崗岩製で、現存長15.38cm、幅11.12cm、厚さ10.39cm、重量2,254gを測る。表裏面にそれぞれ3ヶの凹部を設ける。20はチャート製の石鏃である。完存品で長さ2.84cm、幅1.67cm、厚さ0.36cm、重量1.48gを測る。基部の抉り部は比較的深く、二等辺三角形を呈し、表裏面とも丁寧な押圧剥離を施している。

### (3) 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査区内で検出された古墳は6基である。いずれも耕作等によって墳丘は削平されていた。その中で以前市の分布測査時に所在が確認され、山川古墳群2号墳、3号墳という番号が付されていたものも含まれている。とくに3号墳はかつて発掘調査され、主体部が検出されていたものであるが、その所在が今回の本調査によって正確に位置付けられ周溝すべてを完掘することができた。また2号墳は現在も墳丘が遺存しており、やはり今回その周溝の一部が調査され内墳であることが確認された。また新たに北側周溝部分のみ調査され8号墳と命名した方墳はかつて実施した確認調査で反対側の南側周溝の一部と連続するものと判明し、その形状と規模を推測することができた。残り3基についても周溝のみであるが前回の確認調査でその存在が予測されていたもので、いずれも完掘することができなかつたが、少なくとも時期と形状を明確にすることができた。

#### ・2号墳（第34・35図、PL. 11・38）

調査区南端で、東側はすでに台地の縁辺に当たり、この縁辺上の平坦部に位置する。本墳はすでに山川古墳群2号墳として周知されていた古墳であるが、今回初めて測量を含めて発掘調査が実施された。なお、北側に隣接する3号墳とは約7.5m隔たっているだけである。墳丘は調査区外には完全な形で遺存していたが、本調査区域では耕作等による削平のため、完全に失われていた。したがって、表土除去段階になってはじめて周溝の一部がここ本調査区内に広がっていることが確認された。そこで検出された周溝と調査区外に遺存している墳丘測量の結果、本墳は外径約38m前後、見かけの高さ約1.5m（現存高）の規模を測る円墳と捉えられた。発掘調査は北西側約1/5程度の周溝のみで、図面上はやや角張り直線的で方形に近い状態に見えるが、全体的な遺存状態は円形を呈しているものと判断した。周溝の幅は3.8～6.5mで北側が広がっている。また深さはやはり幅のある北側が深く70cmで、浅い西側では45cmである。横断面形はやや歪んだ弧状を呈し、幅の割に浅い。覆土は4層確認され、レンズ状に単純に堆積している。周溝の大半を覆っているのが2



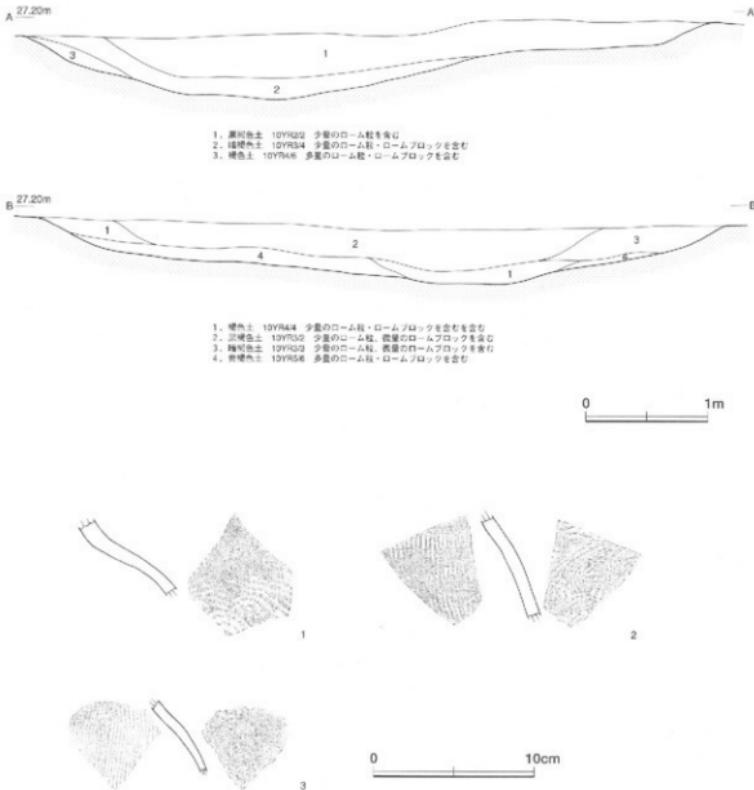
第34図 2号墳実測図

層黒褐色土層で少量のローム粒を含む。底部に接しているのが黄褐色土層と褐色土層である。とくに黄褐色土層は多量のローム粒・ロームブロックを含む。

埋葬施設は検出されなかった。また出土遺物として小片であるが須恵器壺の胴部破片が3点周溝内から検出された。これらが埋葬施設と関連づけられる遺物であるかの判断は困難とはいえ、大まかな時期を推測する一資料であることは間違いない。なお埋葬施設は現存している墳丘部分もしくは調査区外に存在する可能性が考えられる。

#### 出土遺物（第35図、PL. 38）

1～3は須恵器壺の胴部破片である。1は肩部付近の破片であろう。内面に青海波紋がみられる。外面は



第35図 2号墳土層断面図・出土遺物

第8表 2号墳 出土遺物観察表

図版番号	器種	法高(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	須恵器 甌	口径 - 底径 - 器高 -	肩部破片。肩部が大きく張る。	外部ヘラナデ。内面ヨコナデ。青灰白色(7.5Y7/1) 海波紋。	石英・長石粒を含む 灰白色(7.5Y7/1) 良好	
第35図 2	須恵器 甌	口径 - 底径 - 器高 -	肩部破片。器厚は比較的薄い。	外面平行タタキ。内面青海波紋。 外面に自然釉がかかる。	石英・長石粒を含む オリーブ黒(7.5Y2/2) 良好	
第35図 3	須恵器 甌	口径 - 底径 - 器高 -	肩部破片。器厚は比較的薄い。	外面平行タタキ後カキ目。内面ハケ目状の工具による整形が 施されている。	石英・長石粒を含む 淡黄色(5Y7/3) 良好	

ナデ整形で仕上げられている。2は胴部破片で、外面平行タタキで成形され、内面は青海波紋が施されている。外面には自然釉が掛かっている。3は外面が縦方向の平行タタキ、内面はハケ目状の工具による整形が施されている。

#### ・3号墳（第36～45図、PL. 12～15・38～40）

調査区の南側の台地平坦部分に位置する古墳である。やはり先の2号墳と同様周知の古墳である。しかも、本墳の主体部は昭和46年に発掘調査が実施され、詳細に報告されている（大塚1973）。参考のため第39図に当時の実測図を掲載させていただいた。また昨年度実施した確認調査でも周溝の一部が検出され、主体部の位置もある程度は把握できていたものの、確実に3号墳主体部であるとの確証は当初得られなかった。ここは先の2号墳の北側約7.5mで、新たに確認された8号墳とは西側わずか2m隔たっているにすぎない。また調査前の墳丘確認ではわずかに地跡状態で遺存していたものと判断し、丁寧に精査したものの大半の墳丘は耕作等によって削平され、みかけの高まりを残すにすぎなかった。したがって、墳丘は重機と人力の二通りで平行して実施したが、表土層直下で、地山のローム面まで層厚約5cm前後の褐色土層（10YR4/4）が薄く堆積していることが判明した。ここではこの層が明らかに人為的な盛土であるとの確認は得られず、逆に当該層がローム層上面に堆積した自然堆積層であることが判明した。しかも、ここから縄文時代前期・後期の土器が比較的多く含まれていることが確認され、縄文時代の包含層として調査した。しかし、前期の土器と後期の土器がほぼ同レベルで出土していることなどから、自然堆積層でありながら、縄文時代の明確な包含層ではないとの結論を出した。本墳出土の縄文土器については第6節（2）で一括して説明してある。

本墳の墳丘は耕作等によって削平され、既に旧表土層が残置されておらず、その墳丘高・盛土の状況等については不明であり、従って調査は主体部と周溝のみに集中することとなった。発掘調査の結果、西側が大きく南北に走る中世溝であるSD06によって分断されていることが判明したが、規模や形状について大きな影響を受けることなく、正確な形態と共に規模を把握することができた。しかも、南側には箱式石棺の主体部も明確にできることで、さらには周溝の形状から帆立貝式前方後円墳であることが判明した。

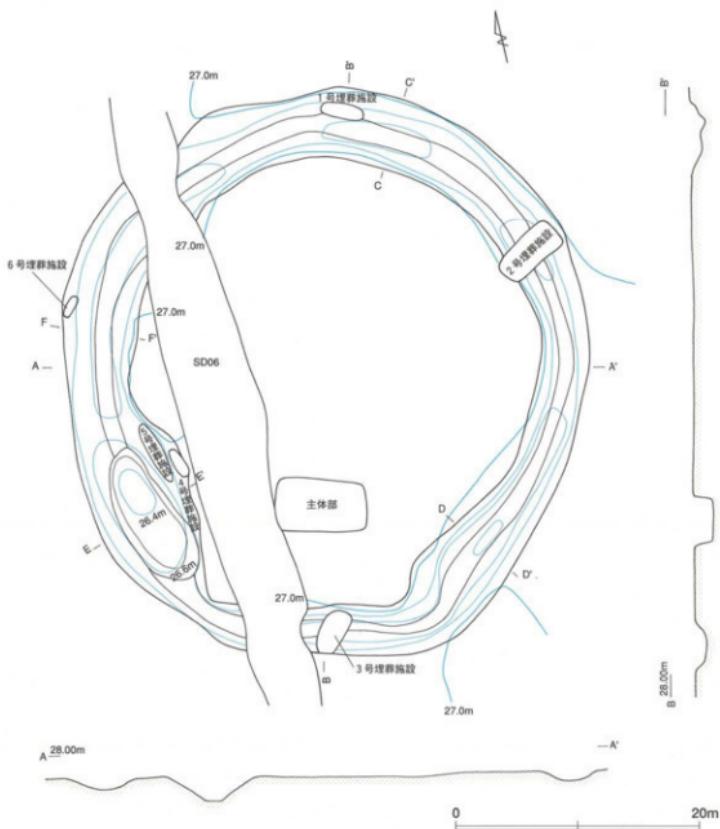
まず規模は総長である南北径23.3m、東西径21.5mを測り、後円部外縁北側が東西にやや膨らむ卵形を呈し、括れ部は外縁部では構築されていない。墳長は18.3mで、後円部は径16.8m、前方部長15m、幅8.3m、括れ部の幅8.8mを測り、主軸方位はN-21°-Eを示す。その周りに2～4mの周溝が南北に長い長円形にある。

周溝は全周し、括れ部における幅は極端に広くなっている。西側括れ部の幅4m、深さ50cm、東側括れ部の幅3.4m、深さ55cm。後円部北側で幅2.8m、深さ60cm。同じく東側幅2m、深さ40cm。反対の西側幅2.7m、深さ40cmである。底面はかなりの起伏がみられ、南西括れ部が最も深く、北側周溝が浅くなっている。覆土はほぼレンズ状の自然堆積層を呈し、上層は黒褐色土で覆われ、中層から下層は暗褐色土および褐色土が堆積している。いずれも土質があり、粘性とともに。

#### 箱式石棺（内部主体部）（第38・39図、PL. 12～14）

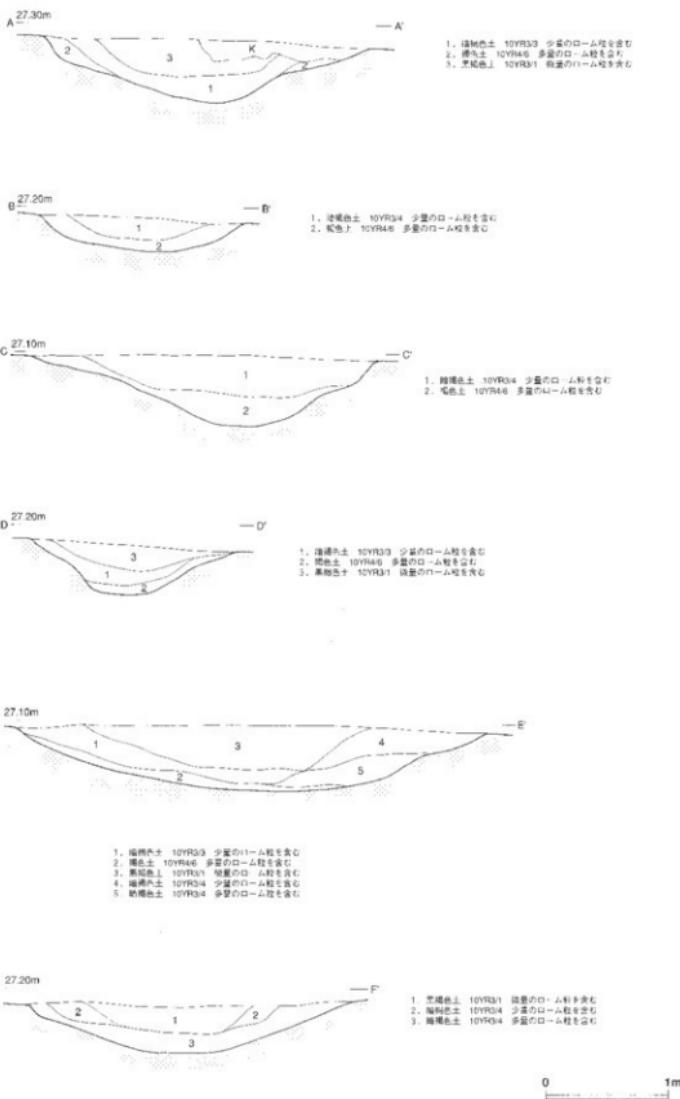
墳丘内埋葬施設としての主体部が墳丘括れ部中央に位置する。箱式石棺で、土坑内に埋設されており、土坑の横断面形状は四隅を若干丸味をもたせる長方形である。その規模は長軸3.25m、短軸2.22m、深さ0.79mを測る。主軸方位はN-79°-Wで、古墳本体の主軸と直交する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、石棺の埋置部が溝状に掘り込まれている。台座は掘り込み底面より低くなっている。石棺の規模は内側長軸1.77m、短軸0.77mを測り、構築材は雲母片岩の板石を使用し、蓋石4枚、北側壁2枚、南側壁3枚、内側小口各1枚で、床部は8枚以上に打削された不正形板石を組み合わせた床石で構成されている。なお、蓋石は1973年の発掘調査後に大きく移動され、原位置を留めていないため、位置関係については先の調査報告書を参照されたい。

まず蓋石は4枚とも大きさが異なり、長さ80～113cm、幅45～71cmとばらつく。長さについては欠損され

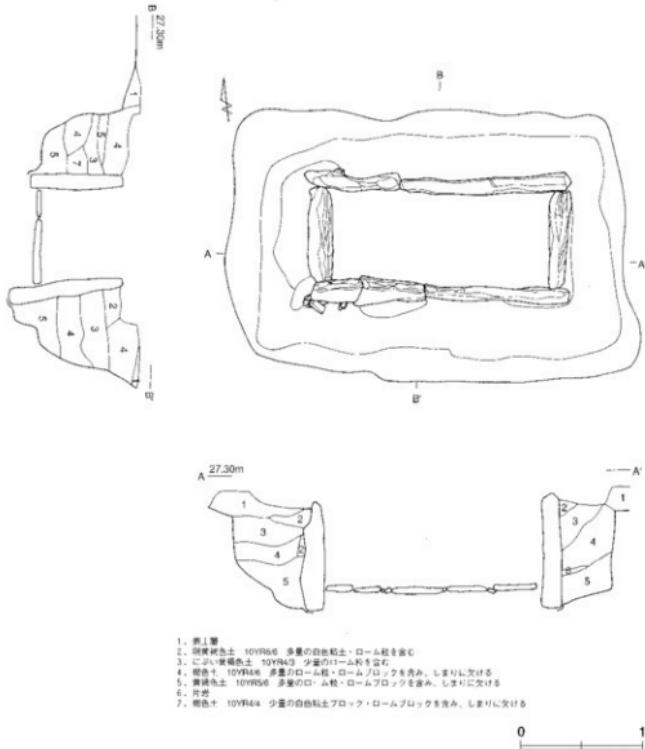


第36図 3号埴実測図

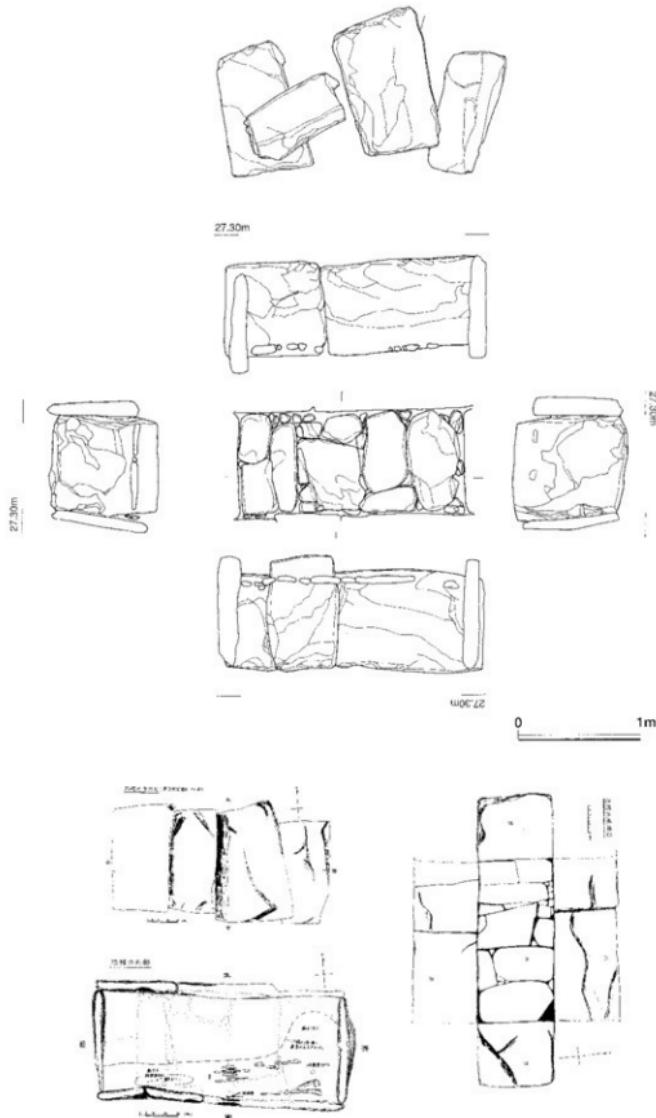
ているものもあるが、幅についてはほぼ原状を保っているものと推定される。北側壁2枚の大きさは東側が大きく本棺で最も大きな板石を使用しており、高さ75cm、幅141cm、厚さ12cm。西側板石は高さ76cm、幅80cm、厚さ13cmの大きさである。南側壁は3枚を組み合わせたもので、東側板石が最も大きく高さ83cm、幅118cm、厚さ13cm。中央板石は高さ92cm、幅54cm、厚さ17cm。西側板石は高さ78cm、幅41cm、厚さ19cmを測る。小口である東側壁板石の大きさは高さ90cm、幅79cm、厚さ15cm。反対の西側壁板石は高さ87cm、幅76cm、厚さ21cmの1枚板石を使用している。なお、床部は80×45cmの板石を最大にして8枚の板石を組合せ、隙間については打割した屑板石を詰めて充填している。裏込はロームブロックを主とする混和材を交互に版築状に詰め込み、基礎に白色粘土を利用して固定していた。石棺内部における副葬品については、先に報告済みであるが、わずかに残存していた直刀および刀子と人骨片が検出されている。



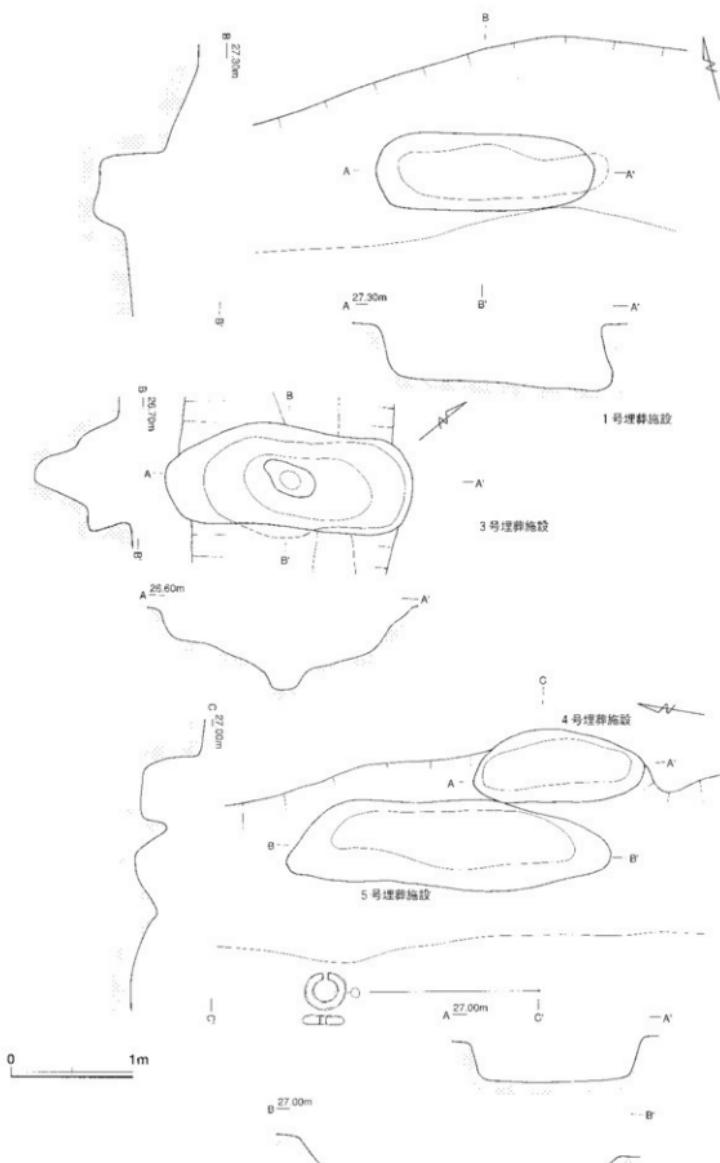
第37図 3号墳周溝土層断面図



第38図 3号墳主体部実測図（1）



第39図 3号墳主体部実測図（2）（下図は大塚 1973より再録）



第40図 3号墳1・3~5号埋葬施設実測図

石棺内出土遺物（第45図1～3、PL. 38）

1は直刀の破片である。接合はしないが、同一個体と思われる刃部2片が出土している。計測は2点接合しないため右破片現存長9.2cm、左破片現存長8.8cmで、刃幅3.8cm、背厚0.64cmを測る。2点の総重量は74.46gである。2は刀子破片で2点が接合した。鍛造が著しく正確な計測は不可能であるが、両闇で、細身の刀子である。切先および茎尻を欠損する。現存長12.15cm、刃部長9.42cm、刃幅1.54cm、背厚0.37cm。茎部現存長2.73cm、茎幅1.10cm、茎厚0.53cmを測り、重量は27.82gである。3も刀子破片である。やはり鍛造が著しく正確な計測は不可能であるが、片闇で、細身の刀子である。切先を欠損する。現存長8.78cm、刃部長2.95cm、刃幅1.46cm、背厚0.26cm。茎部は完存し、長さ5.75cm、茎幅1.16cm、茎厚0.50cmを測り、茎尻部には木質が残存する。

周溝内埋葬施設（第40・41・44図、PL. 14・15）

その他の施設として周溝内から6基の埋葬施設と推定される土坑状の掘り込みが検出されている。6基のうち、周溝の掘形に平行する施設と直交する施設の2種がある。前者は1・4～6号埋葬施設であり、後者は2・3号埋葬施設である。ここで土坑状の埋葬施設を計測しておきたい。

1号埋葬施設（第40図、PL. 14）

1号埋葬施設は北側周溝外縁に位置し、周溝に沿って構築されており、主軸方位はN-74°-Wを指す。規模は長軸178cm、短軸64cm、深さ37cmを測る指円形を呈し、東側がわずかにオーバーハングしている。床面はほぼ平坦で、とくに硬く踏み固められている個所は確認できなかった。ここでは埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。なお、底面は平坦で、壁面がある程度整えられていることから、やや幅が狭いとはい、木棺を使用していたものと推定される。

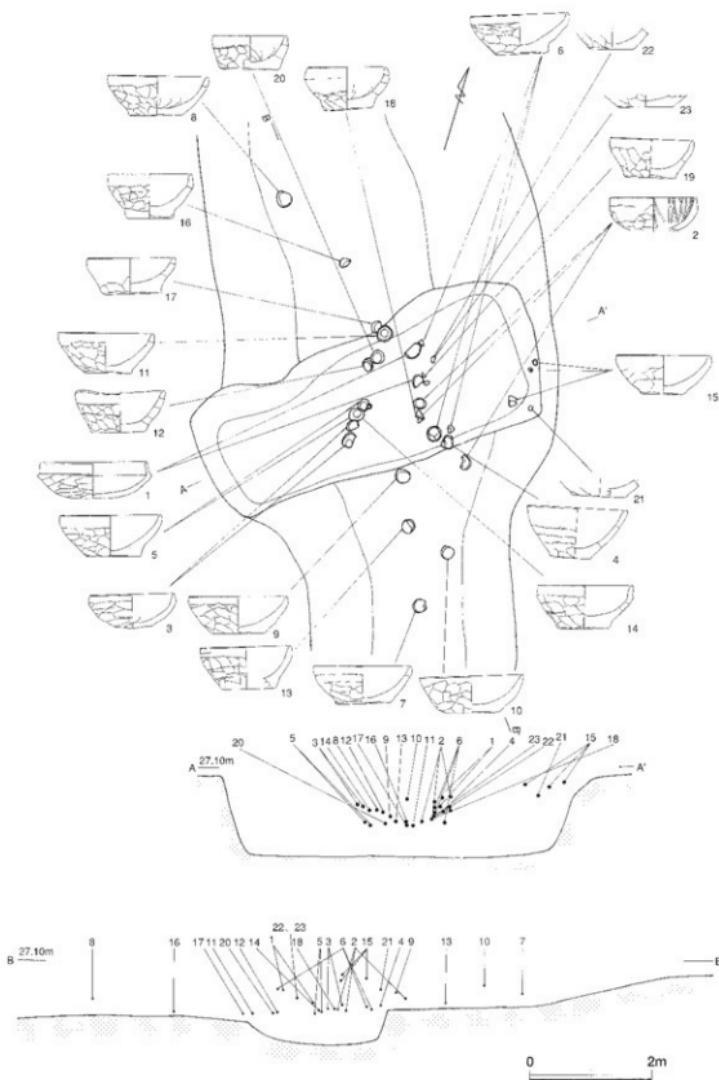
2号埋葬施設（第41～43図、PL. 14・15・39・40）

2号埋葬施設は北東周溝付近で、周溝に直交するように構築されており、主軸方位はN-45°-Eを指す。規模は長軸144cm、短軸57cm、深さ55cmを測る長方形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、とくに踏み固められた個所はない。壁は外傾して立ち上がる。本址は墓坑内に木棺を直葬した埋葬施設と考えられる。出土遺物としては土師器壺3点および粗製小型鉢20点が遺構外を含め纏まって検出された。明らかに祭祀行為が執行されたもので、大半の遺物は埋葬施設である棺上に置かれていたものと想定される。遺物の個別説明については第9表に示したとおりである。

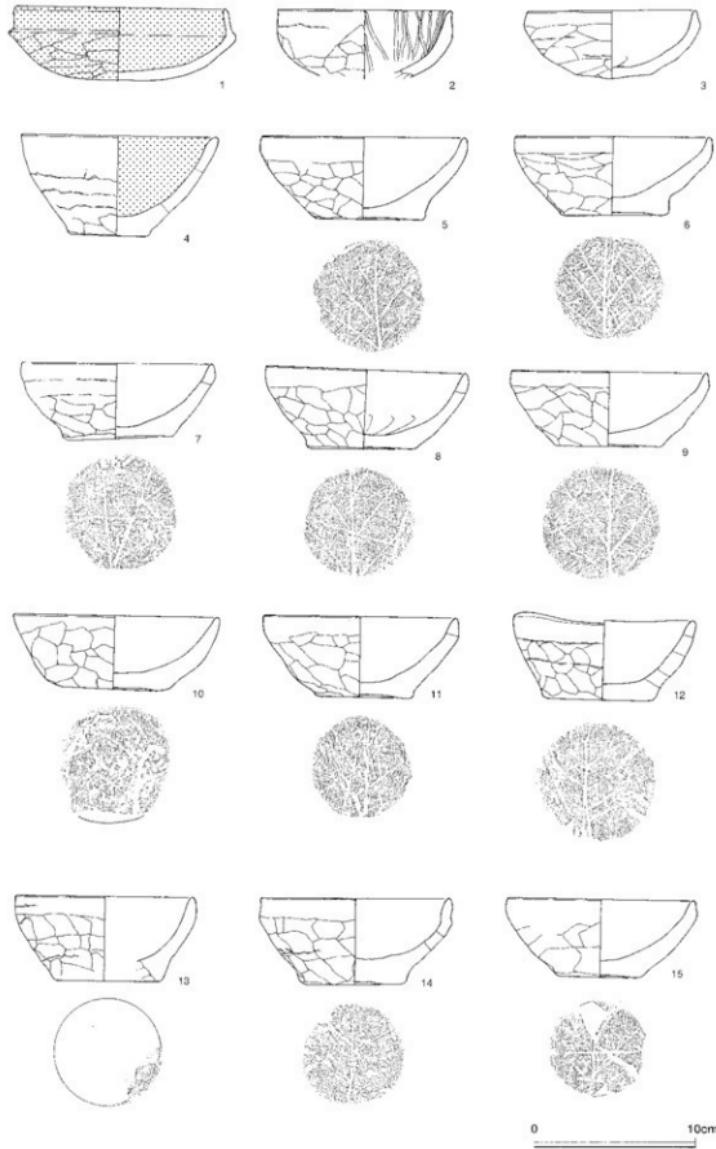
第9表 3号墳（2号埋葬施設）出土遺物観察表

団版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土、色調、焼成	備考
第42図 1	土 壷 壺 环	口径 13.40 底径 6.00 器高 4.50	須恵器模倣の環で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外側口縁部ヨコナデ、体部ヘラケスリ。内面ナデ。	石英・良石継を含む黒色 (7.5YR2/1) 良好	口縁部1/6 欠損 内外面黒色 処理
第42図 2	土 壷 壺 环	口径 10.60 底径 - 器高 [4.10]	須恵器模倣の環で、器受け部が張り出し、口縁部は直立する。	外側口縁部ヨコナデ、体部ヘラケスリ。内面ナデのちミガキ。	石英・良石継を含む黒褐色 (7.5YR2/1) 浅黄褐色 (10YR8/3) 良好	底部欠損
第42図 3	土 壷 壺 环	口径 10.40 底径 5.00 器高 5.20	須恵器模倣の環で、器受け部が張り出し、口縁部は直立する。	外側口縁部ヨコナデ、体部ヘラケスリ・輪組み模。内面ナデ。	石英・良石継を含む灰白色 (2.5Y8/1) にぶい黄褐色 (10YR7/3) 黒灰色 (10YR4/1) 良好	1/2残存

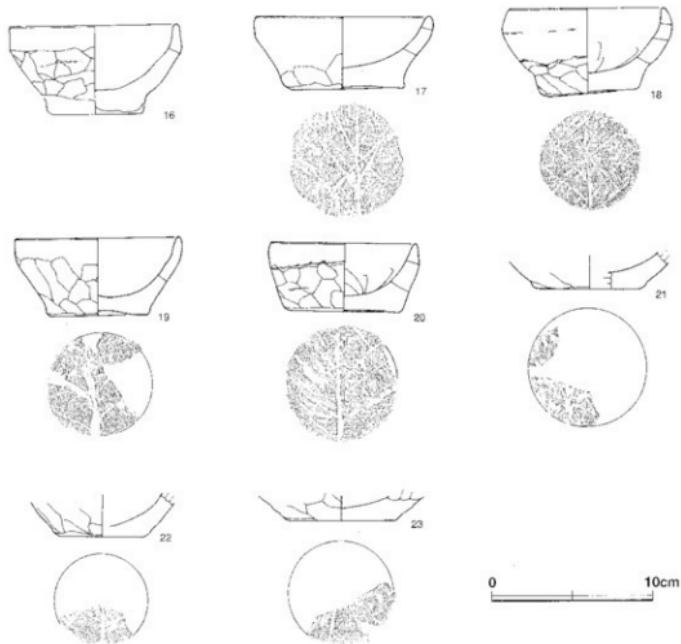
國版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42回 4	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.00 底径 5.00 器高 6.20	平底の底部から、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部へラクエリ・輪積痕。内面へラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/3) 内面 黒色 良好	口縁部1/3 欠損 内面黒色処理
第42回 5	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.60 底径 5.10 器高 6.80	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 灰黄褐色 (10YR5/2) 黒褐色 (10YR3/1) 良好	口縁部1/4 欠損 スス付着
第42回 6	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.00 底径 6.70 器高 4.90	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部へラクエリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 良好	ほぼ完存 スス付着
第42回 7	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.90 底径 6.80 器高 4.80	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部へラクエリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 良好	口縁部1/6 欠損 スス付着
第42回 8	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.40 底径 6.60 器高 5.00	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 良好	ほぼ完存 スス付着
第42回 9	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.00 底径 6.80 器高 4.60	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 良好	口縁部1/2 欠損 スス付着
第42回 10	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.70 底径 7.00 器高 4.60	平底の底部から、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部はわずかに直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/3) 良好	ほぼ完存 スス付着
第42回 11	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 12.00 底径 6.20 器高 5.00	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5YR7/4) 良好	口縁部1/4 欠損 スス付着
第42回 12	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.20 底径 6.50 器高 5.30	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5YR6/4) 良好	ほぼ完存 スス付着
第42回 13	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.20 底径 6.80 器高 5.20	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/3) 灰黄褐色 (10YR5/2) 良好	底部3/4欠損 スス付着
第42回 14	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.70 底径 6.50 器高 5.40	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、唇受け部が張り出し、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 似朱褐色 (5YR5/6) 灰褐色 (7.5YR4/2) 良好	ほぼ完存 スス付着
第42回 15	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.60 底径 5.80 器高 4.40	平底の底部から、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/3) 良好	口縁部一部 残存 底部残存
第43回 16	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 10.40 底径 6.00 器高 5.40	平底の底部から、体部は外傾し、L型部との間に稜を有し、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/2) 黑色 (7.5YR1/1) 良好	口縁部一部 欠損 底部欠損
第43回 17	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 10.70 底径 7.50 器高 4.40	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/3) 良好	体部一部 欠損 スス付着
第43回 18	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 9.60 底径 6.40 器高 5.40	平底の底部が突出し、体部は外傾し、口縁部との間に棱を有し、口縁部は内傾する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰黄褐色 (10YR5/2) 良好	完存品 スス付着
第43回 19	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 10.20 底径 6.50 器高 4.80	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰黄褐色 (10YR5/2) 良好	口縁部1/6 残存 底部1/3欠損
第43回 20	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 9.00 底径 7.40 器高 4.20	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	外面口縁部ココナデ、体部指頭によるナデ、ヘラケズリ・輪積痕。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (10YR8/4) 良好	口縁部2/3 欠損 スス付着
第43回 21	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 - 底径 7.00 器高 (2.30)	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がる。	外面全体指頭によるナデ、ヘラケズリ。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む 浅黄褐色 (2.5Y7/3) 良好	底部1/3残存
第43回 22	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.10 底径 6.00 器高 (2.70)	平底の底部が突出し、体部は内湧気味に立ち上がる。	外面全体指頭によるナデ、ヘラケズリ。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/4) 良好	底部1/3残存
第43回 23	土 師 器 粗製小型 鉢	口径 11.00 底径 6.40 器高 (1.50)	平底の底部から、体部は内湧気味に立ち上がる。	外面全体指頭によるナデ、ヘラケズリ。内面へラナデ。底部本業痕。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/4) 良好	底部1/3残存



第41図 3号墳2号埋葬施設遺物出土状況



第42図 3号墳2号埋葬施設出土遺物(1)



第43図 3号墳2号埋葬施設出土遺物（2）

### 3号埋葬施設（第40図、PL. 14）

3号埋葬施設は南側周溝に直交するように構築されており、主軸方位はN-35°-Eを指す。規模は長軸198cm、短軸80cm、深さ78cmを測る楕円形を呈し、ほぼ中央に26×46cm、深さ8cmの円形ピットが穿ってある。床面は中央ピットに向かって緩傾斜し、平坦面はない。壁は外傾しながら立ち上がる。ここでは埋葬施設と間違づけられるような遺物は出土していないが、底面が平坦ではないが、比較的深い二段掘りを呈しており、壁面等が崩落したと推定されることから木棺の使用があったものと考えられる。

### 4号埋葬施設（第40図、PL. 14）

4号埋葬施設は西側括れ部内側に位置し、周溝に沿って構築されている。主軸方位はN-17°-Wを指す。規模は長軸138cm、短軸60cm、深さ51cmを測る楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、とくに踏み固められた個所はない。壁は外傾して立ち上がる。埋葬施設と間違づけられるような遺物は出土していないが、周溝の壁際にほぼ垂直に掘削していることから判断して、小形の木棺使用が可能と考える。

### 5号埋葬施設（第40図）

5号埋葬施設は4号の西側に隣接しており、西側括れ部に位置し、周溝に沿って構築されている。主軸方位はN-8°-Wを指す。規模は長軸267cm、短軸73cm、深さ31cmを測る楕円形を呈するかなり大きな墓坑である。底面は横断面が船底状を呈し、とくに踏み固められた個所はない。また壁面は外傾して立ち上がり、成人の伸展した埋葬施設であるが、底面の状況からみて木棺の使用はないものと推定され、布等にくるまれて埋葬された可能性が推定される。なお、埋葬施設と間違づけられるような遺物は出土していない。

### 6号埋葬施設（第44図）

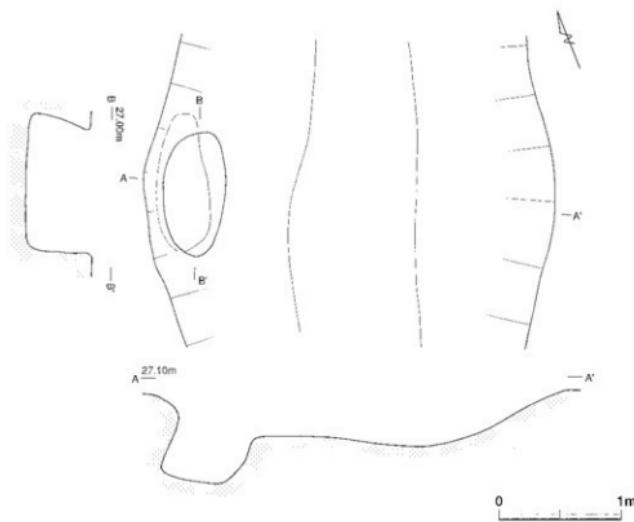
6号埋葬施設は西側周溝外縁に位置し、周溝に沿って構築されており、西側の周溝壁際に喰い込むようにオーバーハングする有天井土坑である。底面はほぼ平坦であるが、とくに踏み固められた個所はない。主軸方位はN-29°-Eを指す。規模は長軸100cm、短軸48cm、深さ52cmを測る楕円形を呈する。1号埋葬施設のように周溝からほぼ垂直に掘削していないことから、木棺の使用は不可能と思われる。おそらく布等にくるまれて埋葬された可能性が推定される。埋葬施設と間違づけられるような遺物は出土していない。

### 周溝内出土遺物（第45図4・5、PL. 38）

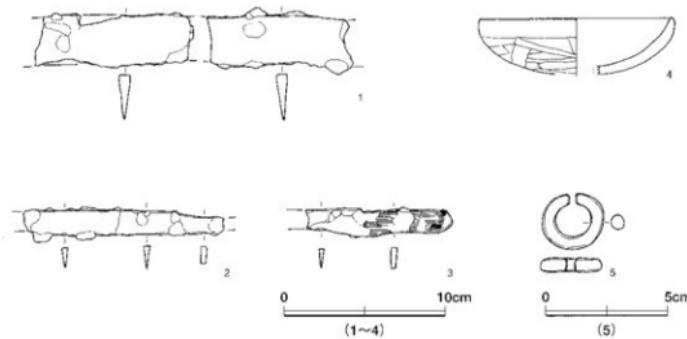
埋葬施設以外の周溝内から遺物が出土している。第45図4は土師器の坏である。推定口径12cm、器高3.6cmを測る。口縁端部下に稜を有し、口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。口縁部ヨコナデ、外面体部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。胎土に石英・長石粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。5は銅製の耳環である。断面は円形を呈する。大きさは外径25.3mm、内径10.1mm、環径5.20mm、重量9.90gを測る。

第10表 3号墳 出土遺物観察表

国版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 4	土 師 器 坏	口径 [12.00] 底径 — 器高 (3.6)	丸底の底板から体部内側気味に 開き、口縁部で短く垂直に立ち 上がる。	外面口縁部ヨコナデ。体部横位の ヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む 明赤褐色 (5YR5/6) 良好	



第44図 3号墳6号埋葬施設実測図



第45図 3号墳出土遺物

・ 8号墳（第46～52図、PL. 16・17・38）

調査区の南端で台地平坦部に位置し、今回の調査で明確にされた古墳のひとつである。二年次にわたる確認調査の際にある程度存在が予想されていたものであるが、規模の大きさに翻弄され、認識までに時間を要した古墳である。平成13年度では南側の周溝の一部、さらに昨年度では西側の周溝の一部が確認トレンドで把握していた。確認調査時でも古墳の周溝であることは判っていても、これがひとつの大きな古墳であることは本調査になって初めて判明したものである。第47図で示したとおり、確認調査結果と併せて南北軸外辺38mを測る大形方墳と推定される。なお調査区内の3号墳とは北東わずか2m隔たっているだけである。また墳丘は規模の割りに全く遺存しておらず、南側の未調査区域でも耕作による削平のため高まりすら確認できない状態である。

発掘調査の結果、周溝のみであるが、北側の約1・2弱が判明した。主軸方位を北東側（あるいは北西）N-32°-Eに向く方墳である。検出できた周溝の規模は最大計測できる北側の東西外輪37m、東西内輪22m、周溝の最大幅は北東辺中央の8m、最小幅は北西辺中央の7mを測り、深さは70～80cmで北溝、北西辺中央、南東辺北側がやや深く、北東辺が僅かに浅い。なお、南側が現況道路となっており、ここの土層観測の結果でも、耕作等による擾乱が激しく、旧表土はまったくみられず、したがって、明確な歴史を把握するまでにはいたっていない。周溝の覆土はほぼ一律でレンズ状に単純に堆積している。上層は黒褐色土で覆われ、中層から下層にかけては暗褐色土および褐色土が堆積している。いずれもしまりがあり、粘性にとむ。

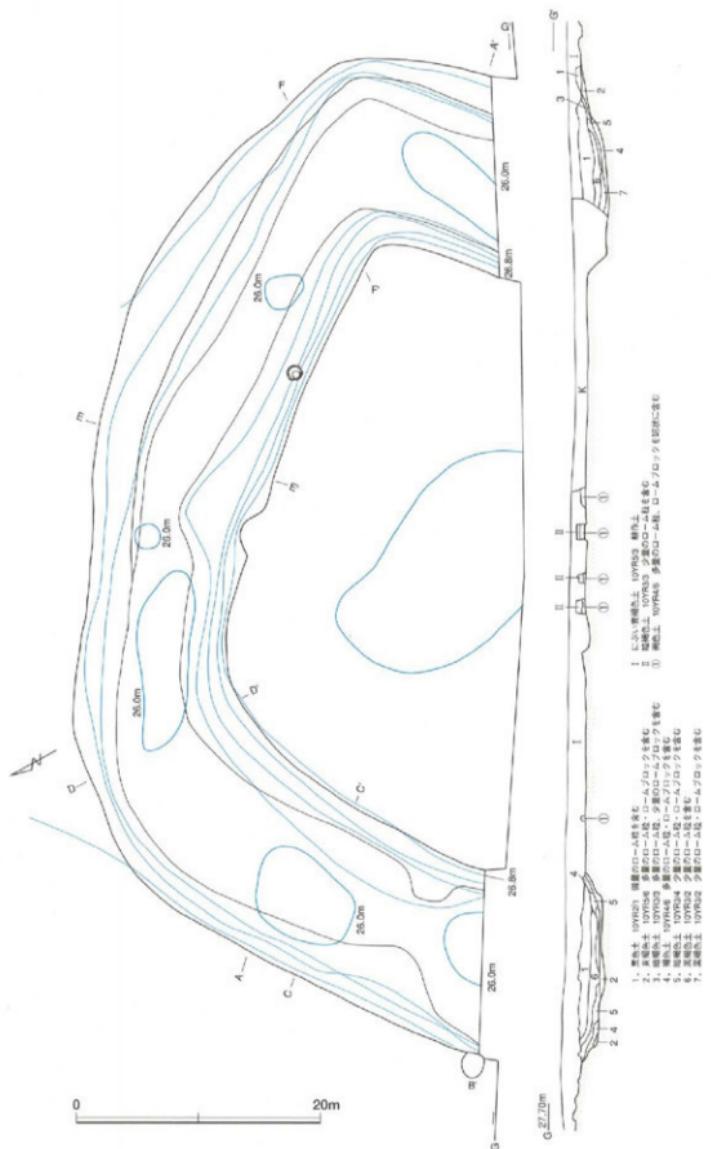
また埋葬施設としての埋葬土坑は周溝内で検出されなかつたが、北東辺や中央南側の周溝内側斜面部上位に「壺棺」が埋納されていた。壺棺は正位の状態で出土し、壺底部を切断し蓋とし使用していたものと推定される。壺内には骨や副葬品等は出土していないが、蓋を伴うということで壺棺と判断した。それ以外には埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土しておらず、本来の主体部とされる埋葬施設は削平された墳丘部に所在したか、もしくは未調査区域の古墳南半分の周溝と旧表土下の部分に所在する可能性を考えられる。なお、西側周溝内南方の覆土中から土器壺（第52図3）が出土している。

出土遺物（第51図1、第52図2・3、PL. 38）

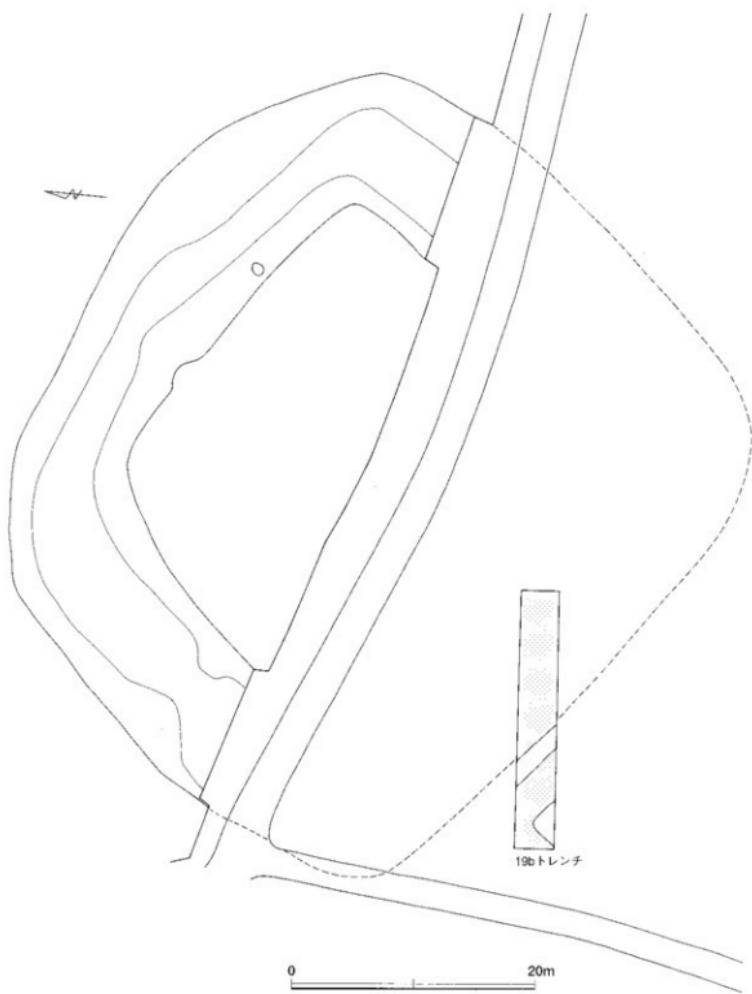
1は壺棺の蓋として再利用されたと思われる壺底部である。底径7.2cm、現存器高11.4cmを測る。ほぼ球形を呈する胴部と推定される。底部は胴部下方に突出し、周縁が輪状に高まり、中央が窪む。外面胴部は入念な縦方向のヘラミガキ。内面はヘラナデ。外面にスヌ状の付着がある。胎土に石英・スコリア・長石粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。

2は壺棺本体である。口縁部を欠損しているが、行為的に破損させたものである。頭部から比較的丁寧に打欠させている。現存器高33.0cm、最大径は胴部中位に位置し、35.2cmを測り、底径10.6cmである。ほぼ球形の胴部をもち、頭部との境に断面三角形の隆帯が巡られている。底部は平底で僅かに下方へ突出する。外面は全面横方向のハケ目調整、内面頭部はハケ目調整で、胴部はヘラナデで整形されている。外面全面赤彩が施されている。

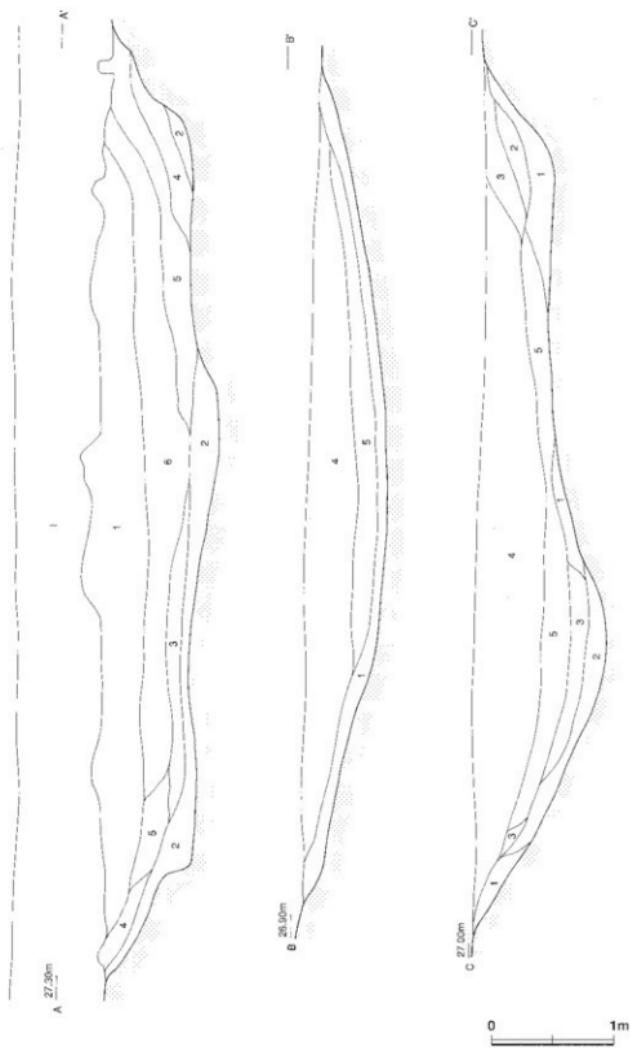
3は壺である。接合はしないが、口縁部から底部まで復元できた。口径18.8cm、底径5.4cm、器高24.5cm、最大径が胴部中央にあり26.0cmを測る。小さめの底部から胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部はヨコナデ。胴部上位はハケ目調整後、ヘラケズリしている。また下半部は縦方向、底部付近は横方向のヘラケズリである。内面は口縁部が横方向のハケ目調整、胴部はヘラケズリに近いナデ。胎土に雲母片、石英・長石粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。



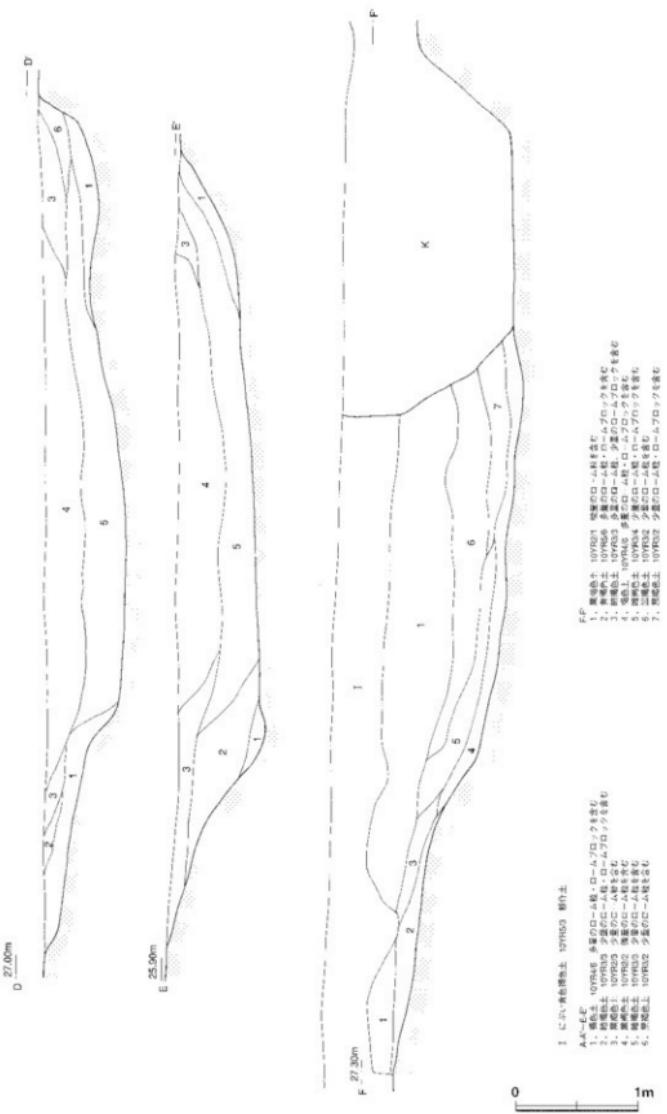
第46図 8号填実測図



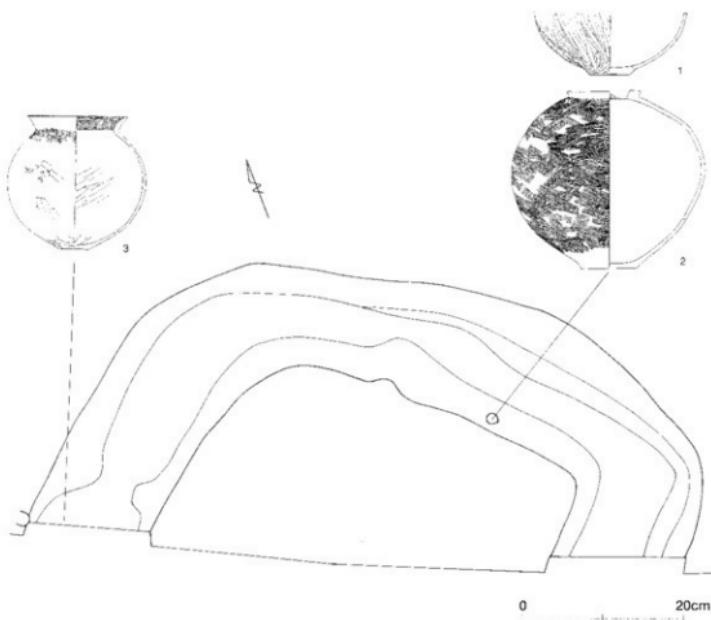
第47図 8号墳確認トレンチ部分と想定図



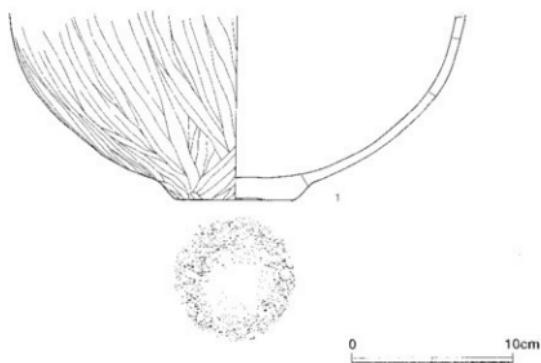
第48図 8号墳周溝土層断面図（1）



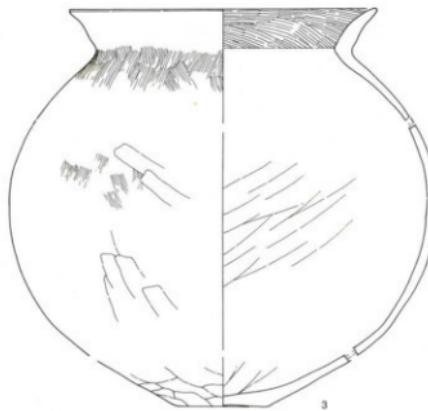
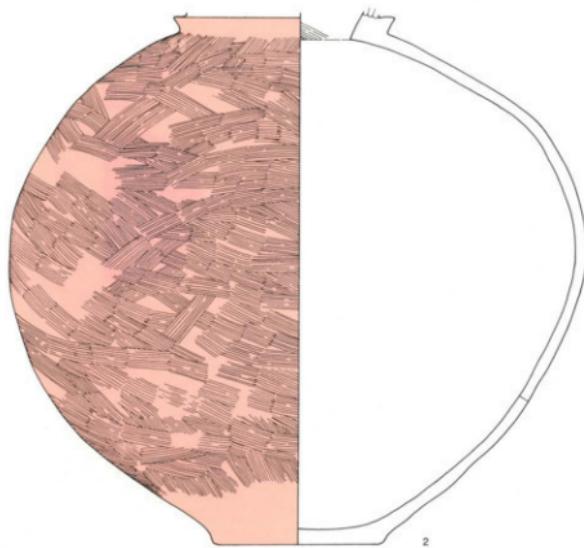
第49図 8号填土斜面断面図 (2)



第50図 8号填出土遺物出土状況



第51図 8号填出土遺物（1）



0 10cm

第52図 8号墳出土遺物（2）

第11表 8号墳 出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	土器 壺	口径 - 底径 7.20 高さ (11.4)	肩部下平部の破片。口は球形を呈する割部。底部は割部方に突出し、周縁が輪状に高まり、中央部が窪む。	外表面は竪方向の入念なハラミガキ。内面はラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む に赤い黄褐色 (10YR7/4) 良好	外面上にスス付着・並粘の糸として再利用 蓋底・外面赤茶
第52図 2	土器 壺	口径 - 底径 10.60 高さ (33.0)	口縁部を欠損する。球形の肩部に割部との境に断面三角形の產生が進る。底部は平底で腹から下方へ突出する。	外表面は竪方向のハケ目調整。内面は横部ハケ目調整。割部はラナデ。	石英・長石粒を含む に赤い黄褐色 (10YR7/3) 良好	蓋底・外面赤茶
第52図 3	土器 壺	口径 18.80 底径 5.40 高さ (24.50)	小さな底部から肩部は球形を呈り、口縁部は「く」の字状に外反する。	外表面は口縁部コロナデ。肩部上位ハケ目調整のちハラケズリ。下半部竪方向、底部付近横方向のハラケズリ。内面口縁部ハケ目調整。底部はラナデ。	玄母・石英・長石粒を含む に赤い黄褐色 (10YR6/3) 良好	

## ・ 9号墳 (第53~58図、PL. 18~20・41)

調査区の東端で台地の縁辺に近い部分に位置する古墳である。本墳も今回の調査で明らかにされたものであるが、昨年の確認調査では南側周溝の一部と北端で10号墳と重複する周溝部分を検出している。なお3号墳の北側約2.5m隔たっているだけである。ここも墳丘は全く遺存しておらず、表土層除去後に周溝が確認され、古墳であることが判明した。なお、主体部の半分と周溝の一部が東側の未調査区域外にまたがり、調査是不可能であった。また北側は10号墳と重複しており、周溝の切り合い関係は本墳が新しく10号墳を切って構築している。さらに未調査区域を含め墳丘は全く遺存していない。確認された周溝は南前方部内側が括れをもつ前方後方墳状を呈している。したがって外線は長方形を呈し、主軸方位はN-12°-Eを示す。主体部は括れ部中央に位置し、墳丘主軸方位と同じ南北方向に構築されている。確認面での周溝の規模は全長外縁部23m、内縁部20m、前方部外縁幅16.3m、内縁幅11mを測る。前方部が短く内縁南北長で7.5m、後方部南北長12.7mである。周溝確認面での比高差は殆んど無く僅かに南側の前方部が高くなっている。

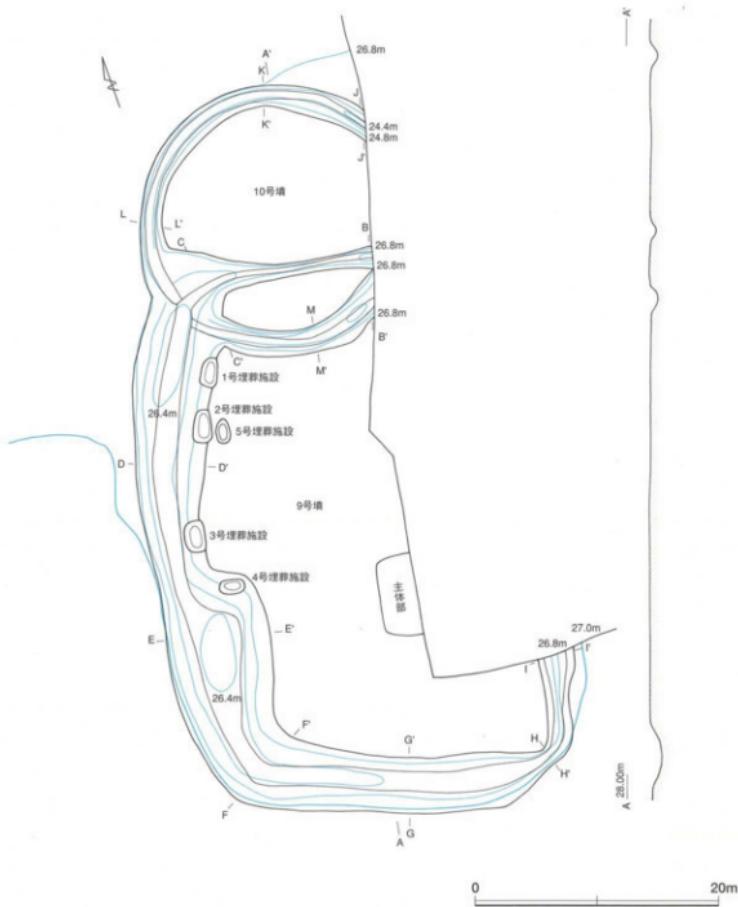
調査は、ちょうど主軸方位に未調査区域がかかり、現表土層からの墳丘観察が可能であった。しかし周溝検出後に周溝と墳丘との通しの土層断面を観察したものの、墳丘の形跡は全く確認できず、旧表土層も耕作等により擾乱を受けて削平されていた。しかも主体部の南北軸の中心部にあたり、表土層からの観察が可能であった。あいにく主体部の構築材である石棺はすべてが抜き去られ、わずかに石棺材の残片が5点ほど出土したに過ぎない。周溝内の覆土はレンズ状の自然堆積層で、上層が黒褐色土、中層から下層が暗褐色土もしくは褐色土が堆積しており、いずれもしまりがあり、粘性にとむ。

## 内部主体部 (第55図、PL. 18・19)

墳丘内埋葬施設の主体部は前方部の北端にあたる括れ部中央に位置し、墳丘主軸方位と一致する。なお、東側半分は未調査区域に広がる。ただ抜き去られた掘形とくに石棺材の埋設溝から判断して棺部は箱式石棺と推定されるが、すべて盗掘され長方形土坑の掘形のみが残存している。掘形の平面形は長方形で、長軸3.25m、現存短軸1.59m、深さ0.85mを測る。主軸方位はN-19°-Eを指す。底面はローム面まで達し、壁はほぼ垂直気味に立ち上がっている。底面には石棺の埋置位置に溝状の掘り込みが認められ西側壁部と南北小口部で、溝の幅は20~25cm、深さ7~17cmを測る。石棺材は雲母片岩と推定される。覆土は擾乱層で覆われている。遺物の出土ではなく、石棺材の破片が検出されるのみである。

## 周溝内埋葬施設 (第56図、PL. 19・20・41)

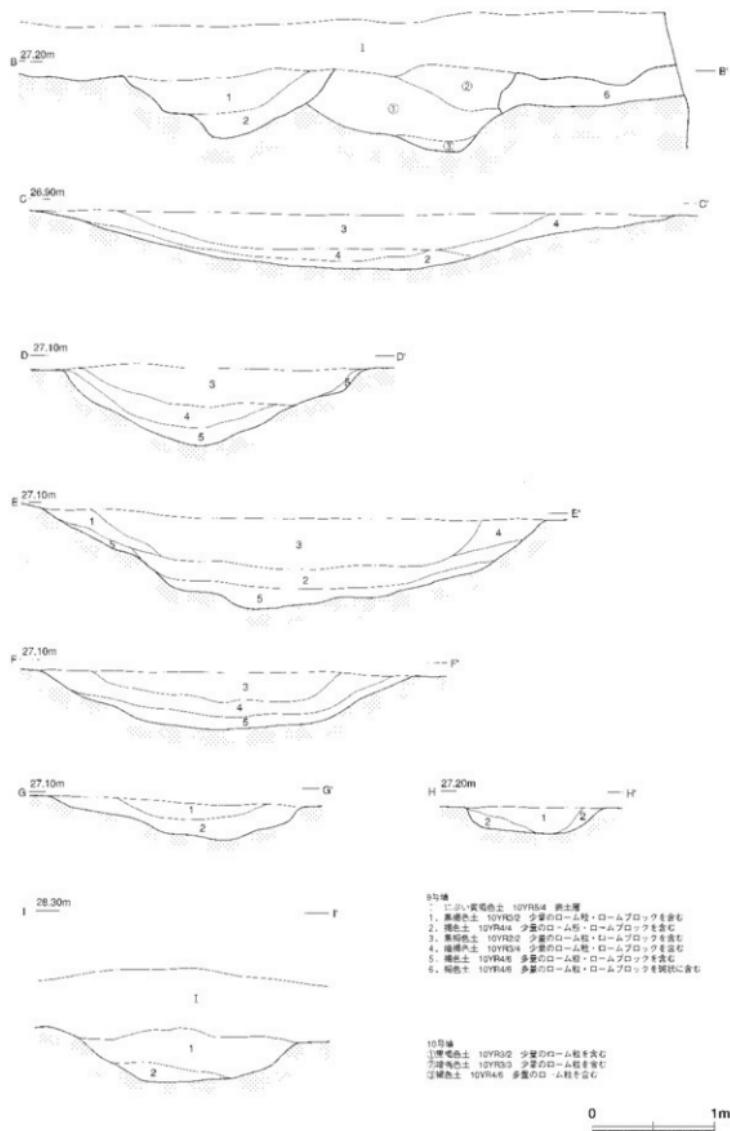
その他の施設として周溝内から4基および周溝内側から1基の合計5基の埋葬施設と推定される土坑状の掘り込みが検出されている。ここで埋葬施設の計測について触れておく。



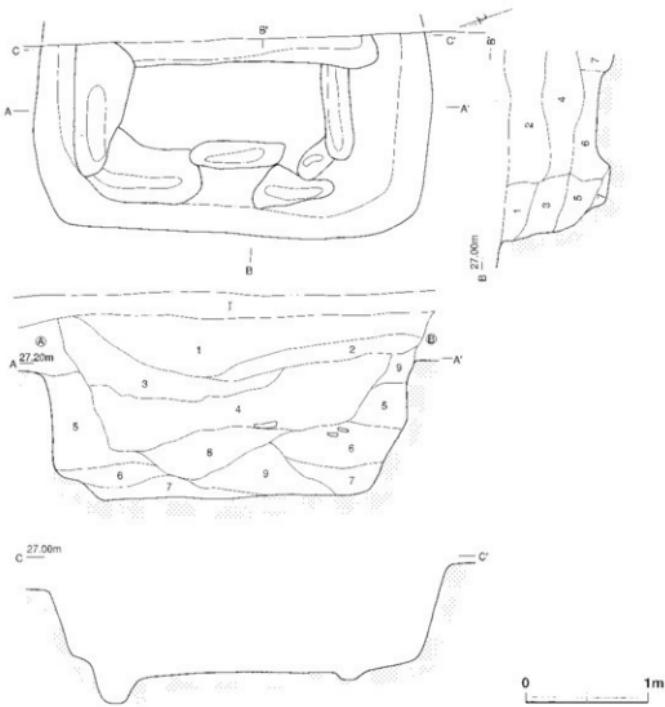
第53図 9・10号墳実測図

#### 1号埋葬施設（第56図、PL. 20）

1号埋葬施設は後方部北西隅寄り周溝の内側に沿って構築されており、周溝壁際に吸い込むようにオーバーハンプする有天井土坑である。形状は長楕円形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、とくに踏み固められた箇所はない。外側壁面は外傾して立ち上がり、覆土は3層に分層され、3層暗褐色土が大半を覆っている。主軸方位はN-36°-Eを指す。規模は長軸125cm、短軸78cm、深さ38cmを測る。ここでは埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。本施設は周溝内側を掘り込んだ半地下式の土坑であり、木棺を使用せずに布等にくるまれて埋葬されたものと推定する。



第54図 9号填周溝土層断面図



A-A'

：表土層

1. にじいろ黄褐色土 10YR6/4 少量のローム層を含む。しまりがなく粘性がない。
2. にじいろ黄褐色土 10YR6/4 多量のローム層・ロームブロックを含む。しまりがなく粘性がない。
3. にじいろ黄褐色土 10YR5/4 少量のローム層を含む。しまりがなく粘性がない。
4. にじいろ黄褐色土 10YR5/4 少量のローム層・白色粘土層・石棺材片を含む。しまりがなく粘性がない。
5. 黄褐色土 10YR6/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。しまりがなく粘性がない。
6. 細砂土 30YR4/4 多量のローム層を含む。しまりがなく粘性がない。
7. 黄褐色土 10YR6/6 多量のローム層を含む。しまりがなく粘性がない。
8. 黄褐色土 10YR6/6 多量のローム層・ロームブロック、少量の白色粘土層を含む。しまりがなく粘性がない。
9. 塗泥土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロック、少量の白色粘土層を含む。しまりがなく粘性がない。
- (内) 黄褐色土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。しまりがなく粘性がない。
- (外) 黄褐色土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。しまりがなく粘性がない。

B-B'

1. 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。
2. 河床堆积土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。
3. 黄褐色土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。
4. 黄褐色土 10YR4/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。
5. 黄褐色土 10YR6/6 多量のローム層・ロームブロックを含む。
6. にじいろ黄褐色土 10YR4/4 多量のローム層・ロームブロックを含む。
7. 黄褐色土 10YR4/4 多量のローム層・ロームブロックを含む。

第55図 9号墳主体部実測図

## 2号埋葬施設（第56図、PL. 20）

2号埋葬施設は1号埋葬施設の南側に位置し、やはり西側周溝内側に位置し、周溝に沿って構築されている。1号と同様に周溝内側壁際に突き込むようにオーバーハングする有天井土坑である。形状は長楕円形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、とくに踏み固められた個所はない。外側壁面は外傾して立ち上がり、覆土は4層に分層され、底面に堆積している2層褐色土はローム粒・ロームブロックを含む。主軸方位はN-12°-Eを指す。規模は長軸144cm、短軸98cm、深さ53cmを測る。埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。本址も木棺を使用せずに布等にくるまれて埋葬されたものと推定する。

## 3号埋葬施設（第56図、PL. 20）

3号埋葬施設は後方部南側の括れ部北側に位置し、周溝に沿って構築されている。1・2号と同様に周溝内側壁際に突き込むようにオーバーハングする有天井土坑である。形状は長楕円形を呈し、底面はやや船底状で中央が深くなっている。またとくに踏み固められた個所はない。外側壁面は外傾して立ち上がり、覆土は4層に分層され、底面に堆積している2層褐色土はローム粒・ロームブロックを含む。主軸方位はN-56°-Wを指す。規模は長軸129cm、短軸99cm、深さ73cmを測る。楕円形を呈する。埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

## 4号埋葬施設（第56図、PL. 19・20・41）

4号埋葬施設は西側周溝括れ部内縁に位置し、括れ部周溝に沿って構築されている。やはり周溝内側壁際に突き込むようにオーバーハングする有天井土坑である。形状は長楕円形を呈し、底面はやや船底状を呈している。またとくに踏み固められた個所ではなく、外側壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-56°-Wを指す。規模は長軸116cm、短軸79cm、深さ80cmを測る。埋葬施設東側縁辺上に底部を故意に穿孔されたフラスコ形長頸瓶の完形品が出土した。おそらく埋葬行為に関連するものと考えられる。なお本址も木棺を使用せずに布等にくるまれて埋葬されたものと推定する。

## 出土遺物（第58図1、PL. 41）

1は完形の須恵器フラスコ形長頸瓶である。器高24.8cm、口径9.0cm、長軸最大径18.5cm、短軸17.1cmを測る。体部は長軸が楕円形、短軸が球形を呈し、頭部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外傾し、端部で断面三角形状に突出する。頭部から口縁部はロクロナデ。体部はロクロナデにハケナデで仕上げ、口縁部から体部上面に自然釉が掛かる。なお底部ほぼ中央に1.7×2.8cmの略長方形を呈し、外面より内面に穿孔した小孔部が認められる。狼投系で7世紀後半に比定される。

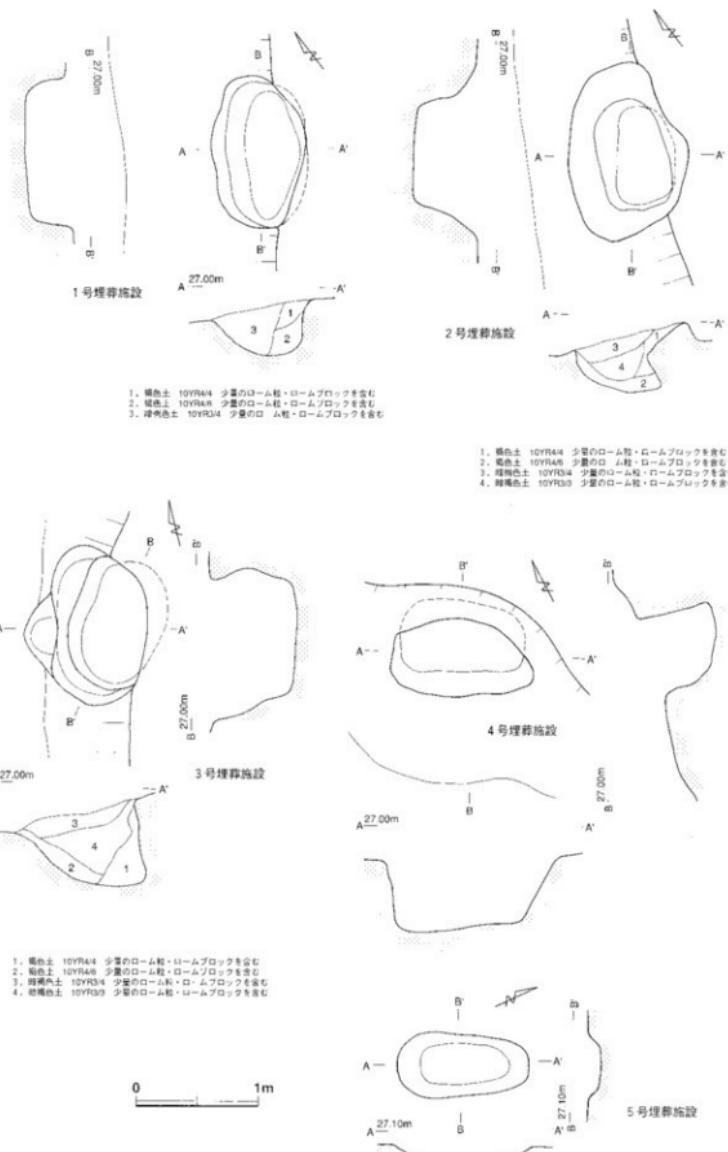
## 5号埋葬施設（第56図）

5号埋葬施設は西側周溝の内側に構築された墳丘下埋葬施設である。形状は長楕円形を呈し、主軸方位はN-38°-Eを指す。規模は長軸107cm、短軸53cm、深さ11cmを測る。底面はほぼ平坦で、表面は緩やかに外傾して立ち上がる。ここでは埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していないが、深度は浅いものの椭形は整っており、下場の長さが短いため小児を伸展した木棺の使用が推定される。

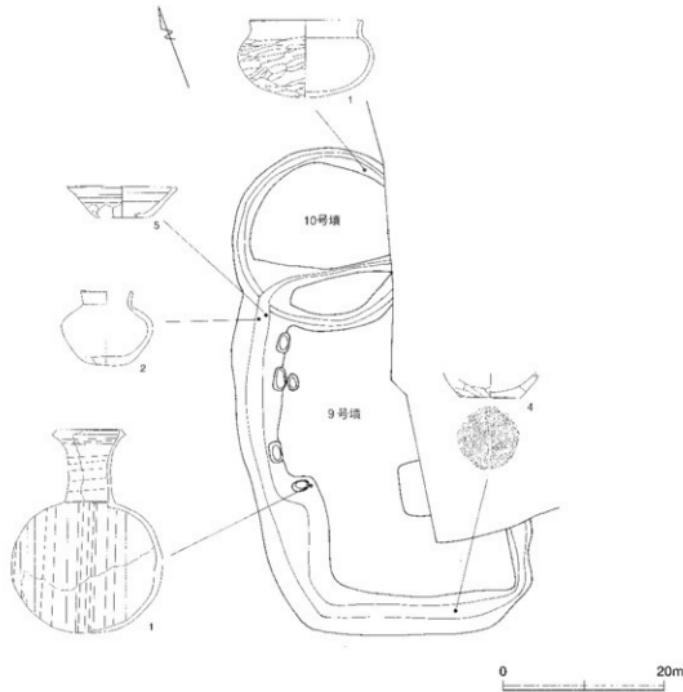
## 周溝内出土遺物（第58図2~5、PL. 41）

先の4号埋葬施設縁辺部から出土した須恵器フラスコ形長頸瓶以外にも周溝よりいくつかの纏まりある遺物が出土している。

2は後方部周溝北側コーナー付近の中央覆土中から出土したもので、完形の須恵器短頸瓶である。口径6.4cm、器高9.1cm、最大径11.1cmを測る。やや小さめの底部から胴部上位で屈曲する算盤玉状を呈し、口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。ロクロ成形。口縁部から胴部下半は平滑な回転ナデ仕上げされる。底部に



第56図 9号墳1～5号埋葬施設実測図

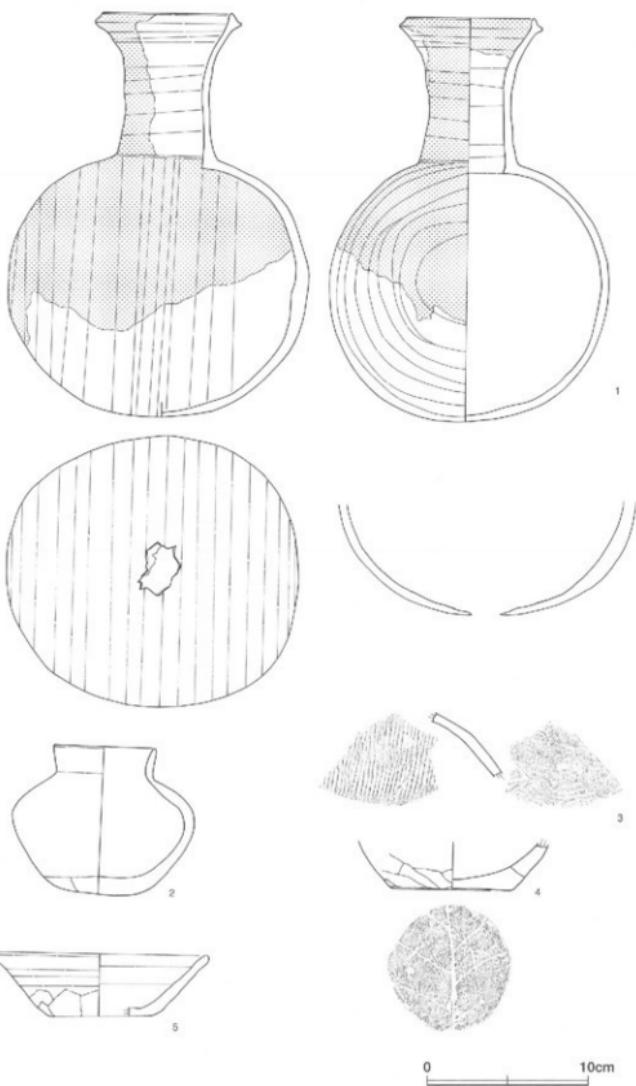


第57図 9・10号埴遺物出土状況

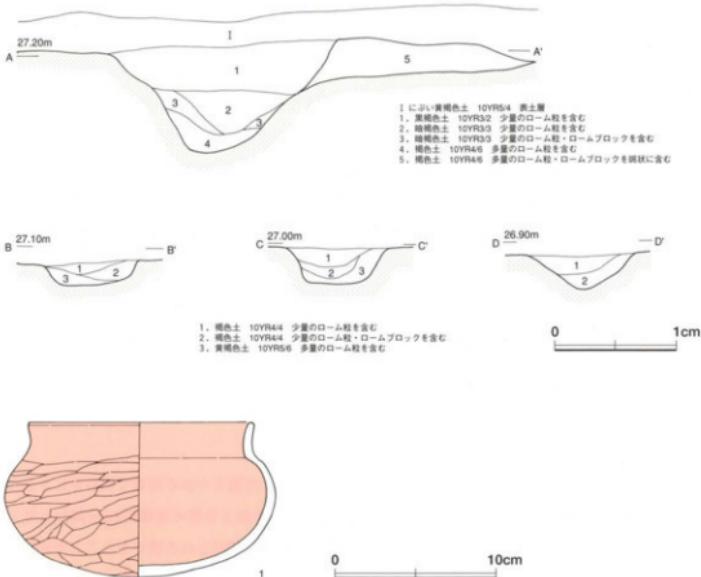
は右回転ヘラケズリ。胎土に石英、長石粒を含む。色調は灰色を呈する。3は須恵器壺肩部破片で、外面平行タキで成形され、内面は青海波紋が施されている。外面には自然釉が掛かっている。4は土師器粗製小型鉢の底部破片。底部のみ残存する。平底の底部から体部は外傾して聞く。外面体部は指頭によるナデ。内面ヘラナデ。底部木葉痕を残置する。胎土に石英、長石粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。5も2に接して出土している。15cmほど上層に位置する須恵器壺である。ロクロ成形で、体部1/2程を残存している。法量は口径13.4cm、器高3.9cm、底径7.0cmを測る。平底の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。胎土に雲母、石英、長石粒を含む。色調は黒色を呈する。

#### ・10号埴（第53・57・59図、PL. 18・21・41）

調査区東端で台地の縁辺に近い部分に位置する古墳である。11号墳とは南側で重複する。切り合い関係は本墳が古く、11号墳によって切られている。本墳も今回の調査で明らかにされたものであるが、昨年の確認調査では南端で11号墳と重複する周溝部分を検出している。ここでも墳丘は全く遺存しておらず、表土層除去後に周溝が確認され古墳であることが確認された。なお、周溝の一部が東側の未調査区域外にまたがり、調査は不可能であった。なお未調査区域を含め墳丘は全く遺存していない。確認された周溝はほぼ円形を呈



第58図 9号墳4号埋葬施設・周溝内出土遺物



第59図 10号墳周溝土層断面図・出土遺物

第12表 9号墳 出土遺物観察表

図版図	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	須恵器 プラスコ形頭瓶	口径 9.00 胴径 長軸35 短軸17 器高 24.80	完形品である。体部は長軸が楕円形、短軸が蝶形を呈し、頭部には垂直気味に立ち上がり、口縁部で外傾し、瓶部で断面三角形に突出する。	頭部から口縁部はロクロナデ。体部はロクロナデにハケナデで仕上げ、口縁部から体部上半に自然輪郭がある。	石英・黒色粒子・長石粒を含む オリーブ灰褐色 (10Y4/2) 良好	底部穿孔
第58図 2	須恵器 短頭壺	口径 6.40 最大径 11.10 器高 9.10	完形品である。丸底気味の底部から胴部は内済し算盤目状に屈曲する。口縁部は短く僅かに外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。口縁部から体部はロクロナデ。外面部端部から底部右回転へラケズリ。	石英・長石粒を含む 灰色 (7.5YR4/1) 良好	
第58図 3	須恵器	口径 - 底径 - 器高 -	肩部付近の小破片である。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 淡黄色 (2.5Y8/3) 良好	
第58図 4	土師器 粗製小型鉢	口径 7.60 底径 7.00 器高 (2.9)	底部破片である。平底の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	外面部は指頭によるナデ。内部はヘラナデ。底部木素痕を残す。	石英・スコリア・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/4) 良好	
第58図 5	須恵器	口径 13.40 底径 7.00 器高 3.90	体部1/2を遺存する。平底の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	ロクロ成形。外面部下端手持ちヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒色 (5YR2/1) 良好	

する円錐状を呈している。したがって、確認面での周溝の規模は全長南北軸外縁部112m、内縁9.3mを測る。周溝確認面での比高差は殆んど無くほぼ平坦である。なお調査は、周溝の一部が東側未調査区域にかかり、現表土層からの埴丘観察が可能であった。しかし周溝検出後に周溝と埴丘との通しの土層断面を観察したものの、埴丘の形跡は全く確認できず、11号墳と同じく旧表土層も耕作等により搅乱を受けて削平されていた。

周溝は最大幅1.8m、最小幅0.8mで、深さ25~35cmで、南側が深く、北側が若干浅くなる。底面は皿状を呈し、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。覆土はレンズ状に単純に堆積している。上層が黒褐色土、中層から下層が暗褐色土もしくは褐色土が堆積しており、いずれもしまりがあり、粘性にとむ。

埋葬施設として主体部および周溝中埋葬土坑は検出されなかつた。出土遺物として口縁部が約1/3ほど欠損した土師器塊が出土している。口径13.8cm、器高9.5cm、胴部最大径16.5cmを測る。丸底の底部から胴部は大きく内済し、口縁部はほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリの後、ヘラミガキ。内面ヘラナデ。内外面赤彩が施されている。胎土に雲母、石英、長石粒を含む。埋葬施設は削平された墳丘の墳頂部近くに所在したか、もしくは古墳東側の周溝と旧表土下の部分に所在する可能性が考えられる。

第13表 10号墳 出土遺物観察表

調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59回 1	土 師 墓 墳	口径 13.80 最大径 16.50 器高 9.50	口縁部1/3程度欠損する。丸底の底部から胴部は大きく内済し、口縁部はほぼ垂直気味に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリの後、ヘラミガキ。内外面とも赤彩。	雲母・石英・長石粒を含む 赤色(10YR4/6) 良好	口縁部1/3 欠損

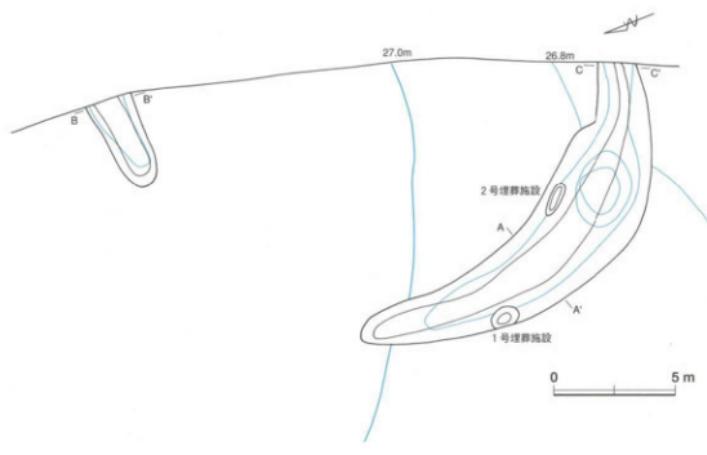
#### ・11号墳 (第60・61図、PL. 22・41)

調査区南東端の台地の縁辺に近い部分に位置する古墳である。本墳も今回の調査で明らかにされたものであるが、昨年の確認調査では西側周溝の一部を検出している。なお3号墳の東側約2.5m隔たっているだけである。ここも墳丘は全く遺存しておらず、表土除去後に周溝が確認され古墳であることが判明した。なお、東側周溝が未調査区域外にまたがり、調査は不可能であった。なお未調査区域を含め墳丘は全く遺存していない。確認された周溝は南側から西側にかけ、一旦途切れながら北側に至って再び出現する。全体の1/3程度を検出したのみである。全長は25m前後の円墳と推定される。周溝は最大幅3.9m、最小幅1.8mで、深さ25~35cmで、南側が深く、北側が若干浅くなる。底面は皿状を呈し、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。覆土はレンズ状に単純に堆積している。上層が黒褐色土、中層から下層が暗褐色土もしくは褐色土が堆積しており、いずれもしまりがあり、粘性にとむ。

埋葬施設として周溝中に埋葬土坑が2基検出された。1号埋葬施設は南西側周溝内側に沿って構築されており、主軸方位はN-10°-Wを指す。規模は長軸120cm、短軸53cm、深さ51cmを測る楕円形を呈する。ここでは埋葬施設と間違づけられるような遺物は出土していない。2号埋葬施設は西側周溝外側に位置し、周溝に沿って構築されている。主軸方位はN-45°-Wを指す。規模は長軸135cm、短軸48cm、深さ29cmを測る楕円形を呈する。直接埋葬施設と間違づけられるような遺物の出土はないものの、周溝内から須恵器壺の小破片が出土している。

#### 出土遺物 (第61図1~3、PL. 41)

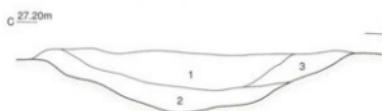
1は土師器粗製小型鉢である。ロクロ成形で、約1/2を欠損している。法量は口径12.0cm、器高4.5cm、底径6.8cmで平底の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部で短く直立する。外面口縁部ロクロナデ。体部指頭によるナツケ。内面ロクロナデ。底部木葉痕を残置する。胎土に石英・長石粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。2も土師器粗製小型鉢の底部破片。底部1/4程度残存する。平底の底部は肥厚し、体部は外傾して開く。外面体部は指頭によるナデ。内面ヘラナデ。底部木葉痕を残置する。胎土に石英・長石粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。3は須恵器壺胴部破片で、外面平行タタキで成形され、内面は青海波紋が施されている。外面には自然釉が掛かっている。



1. 暗褐色土 10YR4/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む  
 2. 暗褐色土 10YR4/4 少量のローム粒・ロームブロックを含む  
 3. 黒褐色土 10YR2/3 少量のローム粒を含む  
 4. 黄褐色土 10YR6/8 多量のローム粒・ロームブロックを含む



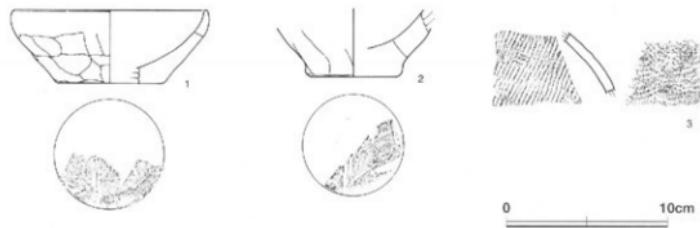
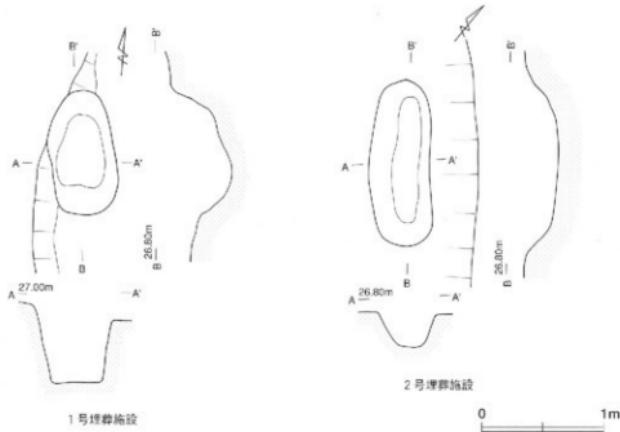
1. 暗褐色土 10YR2/4 少量のローム粒を含む  
 2. 暗褐色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む



1. 暗褐色土 10YR2/4 少量のローム粒を含む  
 2. 暗褐色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む  
 3. 黑褐色土 10YR2/3 少量のローム粒を含む

0 2 m

第60図 11号填実測図



第61図 11号墳1・2号埋葬施設実測図・出土遺物

第14表 11号墳 出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第61図 1	土 加 葵	口径 底径 身高	12.00 6.80 4.50	体部1/2を欠損する。平底の底 部から全体は外側して丸き、口 縁部は鋭く直立する。	クロマ底形。外面白線品ロクヨナ デ。体部指洞によるナデ。内面ロ クヨナデ。底部に木葉模を残置す る。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR7/3) 良好	
第61図 2	土 加 葵	口径 底径 身高	- 6.00 (4.2)	底部1/4を遺存する。平底の底 部は肥厚し、体部は外輪して開 く。	外面体部指洞によるナデ。内面ヘ タナデ。底部に木葉模を残置す る。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR8/4) 良好	
第61図 3	埴 惣 葵	口径 底径 身高	- - -	胴部破片。	外面平行タキ。内面青海波紋。 外面に自然模が掛かっている。	石英・長石粒を含む 灰オーリーブ色 (5Y5/2) 普通	

#### (4) 中世・近世以降の遺構と遺物

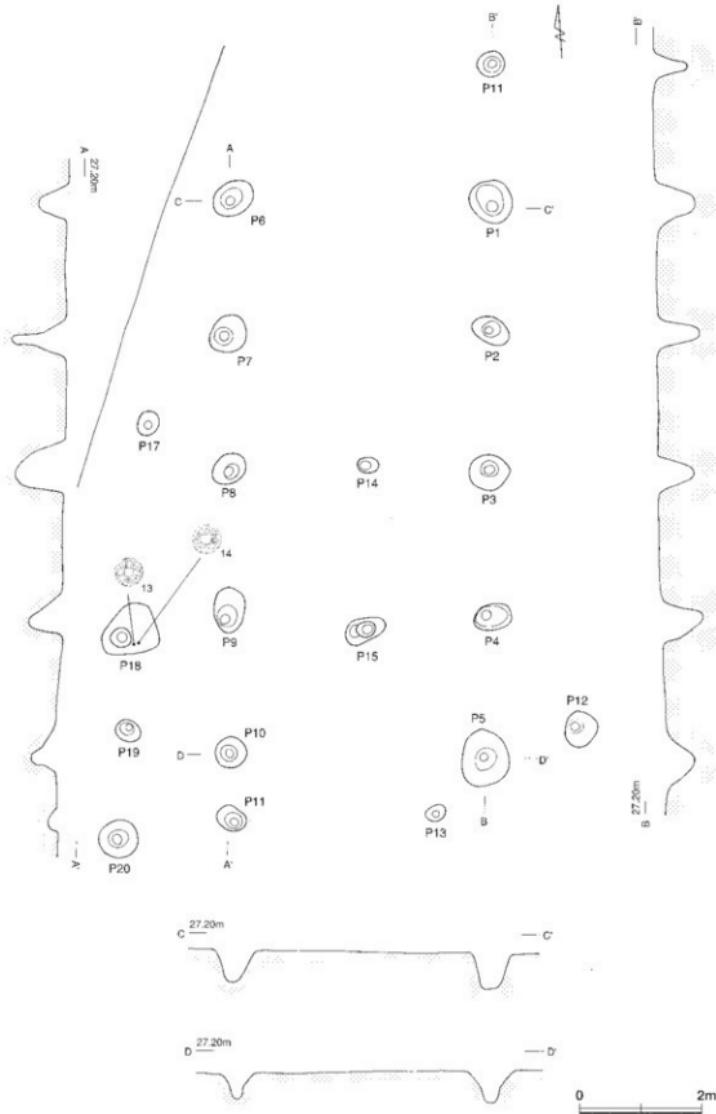
今回の調査成果のなかで、古墳群に次いで注目されているのが中世である。すでに船堀として認識されて、その方向性について問題視されていた6号墳跡（SD06）が調査区北側中央付近から直角に曲がり南方に延びて行くことが確認されることである。これによって墳丘面の東限が明確となり、改めて当時の性格について論議される段階となった。またその他に中世に比定される遺構として掘立柱建物跡や土坑、柱穴状遺構がある。なお、遺構に比較すると全体量は少ないものの、出土遺物として陶器・土師質土器や錢貨、砾石が検出された。

##### 1. 掘立柱建物跡（第62図、PL. 23・42）

掘立柱建物跡は8号墳の西側の狭い範囲で検出された。昨年調査した西側では建物跡をはじめ多数の柱穴状遺構が確認されており、その延長としての広がりが予想された。したがって、8号墳周溝上面でも柱穴跡の存在を確認すべく精査を繰り返したが、周溝覆土と柱穴内覆土が酷似していることもあって柱痕であるか、どうかの判断を非常に困難にさせた。そのため正確さが欠けることが懸念され、周溝内で確定なもの以外は除外することとしたが、結果的には柱穴は確認できなかった。

なお、周溝西側においても建物を構成する柱穴を明確に把握できない箇所がいくつもあり、このことは柱穴と同様のピット群の存在がある。図面上において建物柱穴配置を検討することとなったが、現場において柱痕を確実に捉えられたもの以外には建物跡を想定することができなかった。したがって、西側既調査区域の柱穴群と本調査区城内で検出した柱穴群を照らし合わせながら今後の検討資料として提起していきたい。

今回確実に掘立柱建物跡として確認できたのは、第62図で図示したとおり、P1～P10の10本柱を中心とする建物跡が想定できる。この10本柱はほぼ南北方向に主軸をもつもので、桁行4間、梁行1間の南北棟である。規模は桁行総長9.0m、梁行総長4.2mを測る。柱間寸法は桁行2.0～2.2mを有する。柱穴の形状は円形を基本に梢円形に近いものが多い。上端径33～102cm、深さ22～91cmを計測する。検出された10本すべてに柱当り痕である硬化面が確認された。ほぼ円形で径15cm前後である。また本棟西側に沿って柱列が検出された。P17・18・19・20である。西側桁行から1.3～1.5mとほぼ並行する。また南梁行に沿ってP13・P16の2本検出されており、いずれも本棟から1m前後であることから庇柱穴と推定される。なお、本棟南側中央にもP15・P16の2本の柱穴が検出されている。



第62図 堀立柱建物跡実測図

第15表 挖立柱建物跡柱穴計測表

(単位: cm)

番号	形状	長径	短径	深さ	番号	形状	長径	短径	深さ
P 1	円形	7.5	6.7	6.2	P 2	楕円形	6.0	4.2	6.4
P 3	円形	6.5	5.9	5.8	P 4	楕円形	6.3	4.0	2.9
P 5	円形	9.3	7.4	5.0	P 6	楕円形	7.0	5.4	4.7
P 7	円形	6.6	5.6	9.1	P 8	楕円形	6.0	4.4	8.3
P 9	楕円形	7.6	4.8	5.7	P 10	円形	5.2	4.8	3.8
P 11	円形	4.4	4.0	5.0	P 12	円形	5.7	5.2	2.2
P 13	楕円形	3.3	2.2	2.4	P 14	楕円形	3.4	2.4	2.5
P 15	楕円形	6.9	4.0	3.8	P 16	楕円形	4.8	3.5	5.3
P 17	円形	6.9	5.4	3.8	P 18	円形	1.02	8.0	8.2
P 19	楕円形	4.1	3.5	2.3	P 20	円形	6.4	6.2	3.4

## 出土遺物（第66図13・14、PL. 42）

出土遺物として西側庇柱穴P18に接して錢貨2枚が出土している。13は「黑寧元寶」である。北宋錢（1068年初鋤）で完存している。径2.36cmを測る。14は銅化が著しく判読困難である。明晰ではないが、「至和元寶」であろう。北宋錢（1054年初鋤）で、径は2.46cmを測る。

## 2. 堀跡・道状遺構・溝跡（第63～67図、PL. 24～27・42）

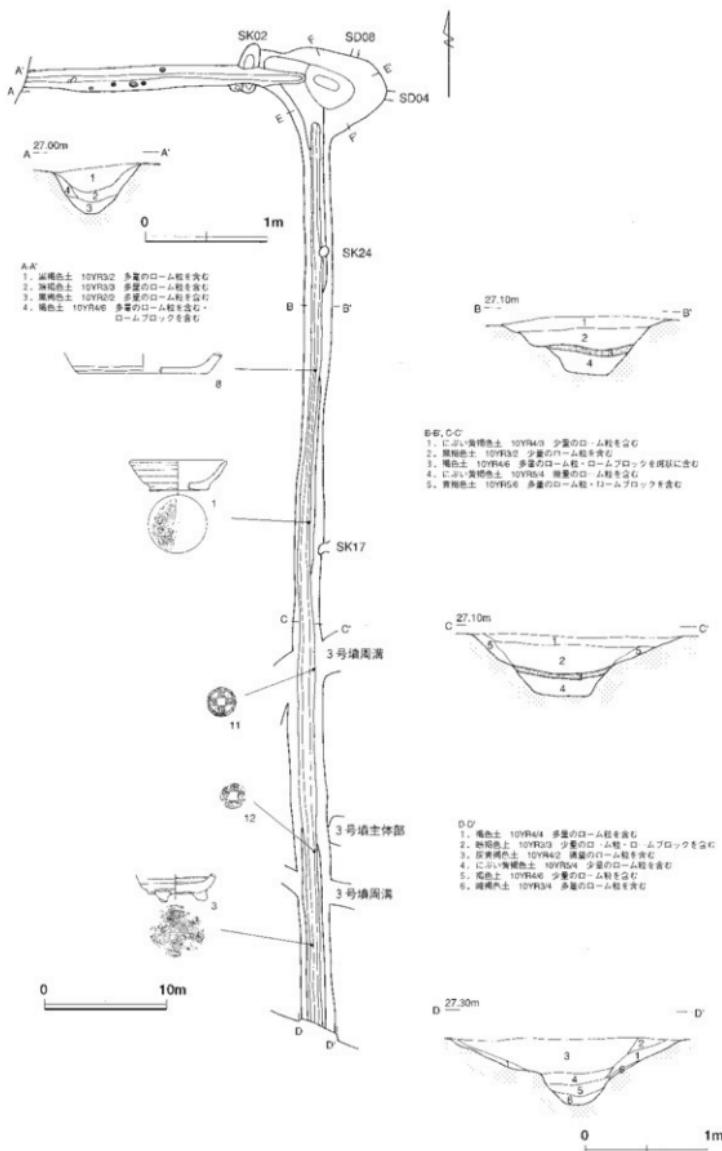
本遺跡から既に記した堀跡（SD06）以外に溝状遺構が9条と堀跡SD06が埋没地上に踏み固められた硬化面が検出された道状遺構が確認されている。したがってここでは堀跡をSD06Aとし古期であり、道状遺構が新期となりSD06Bと呼称する。それぞれ活用時期が明確に異なり、各独立した遺構と判断し別扱いとした。

## 堀跡（SD06A）（第63・66図、PL. 24・25・42）

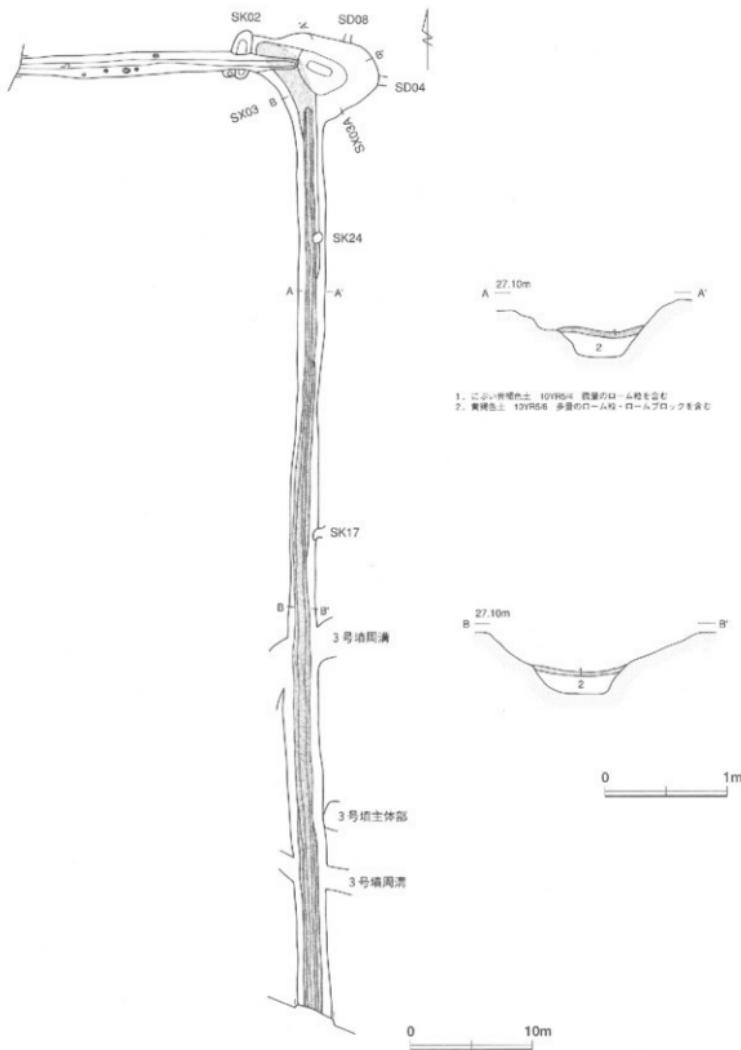
本跡は過去3カ年の調査により、漸く本体の半分以上が明らかにされた遺構である。今回東縁辺部が検出されたことによって、南縁辺が不明で完全ではないものの、その性格や規模の予想が可能となった。まず調査区北側の緩傾斜上縁部で、昨年度検出された東西に走る「北堀」と接続する掘り込みが確認された。今回検出された北堀は調査区の東端にあたり、西縁確認面から東縁まで25mである。ここから南へ90°振られ、調査区をほぼ二分しながら南下し、さらに南側未調査区域に延びていく。これが「東堀」でその長さは77.0mを測る。したがって東西方向に走る北堀と併せて確認面における総延長は101.8mとなる。また堀幅は北堀が狭く130～198cmを測るが、東堀はほぼ真中付近が幅170cmと狭くなるものの、平均200cmを越え、南下すればするほど広くなり堀幅最大290cmとなる。深さも北堀はやや浅く50cm前後に對し、東堀は65～96cmと深く、幅と同様南下につれて深度が深まる。底面がほぼ平坦で、幅40～55cmを測り、その断面形は逆台形の箱型を呈する。覆土は自然埋没で、途中道として利用されており硬化面下のみが往時に堆積した上層で、4層に亘る黄褐色土の單一層である。ここからは9世紀代の須恵器の破片が出土している。

## 道状遺構（SD06B）（第64・66図、PL. 24～26・42）

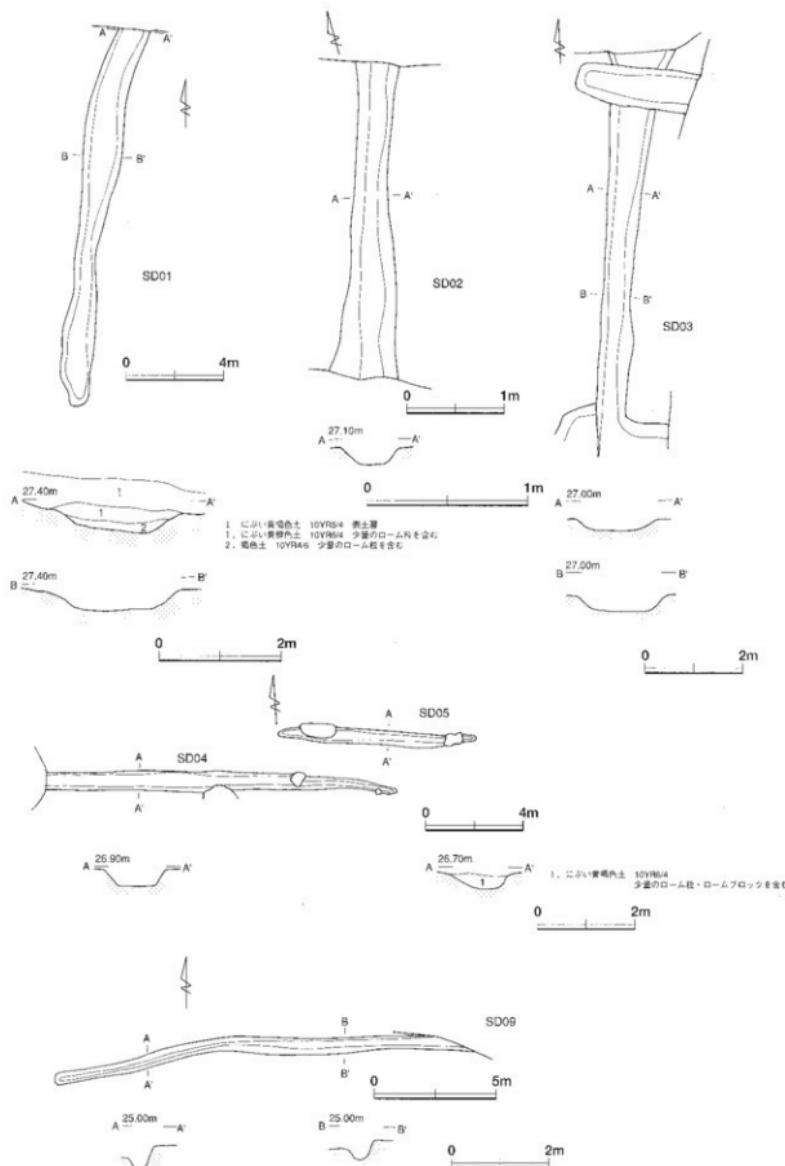
堀跡SD06Aの南北に延びる東堀で、底面から40cm上層に明らかな人為的で狭く踏み固めた硬化面が確認された。硬化面の厚さは5～14cm前後でローム粒・ロームブロックを含む褐色土である。中世の鶯甌をそのまま道として利用したものと推定され、堀を掘削するなど大きな改変が行なわれていたとは考えられず、堀機能を変えずそのまま利用したもので、40cm前後堀が埋没した後に道としていることからある程度の時間差



第63図 堆跡SD06A実測図



第64図 道状構造（トーン部が硬化面）SD06B実測図



第65図 1～5・9号溝実測図

が読み取れる。なお、この硬化面上の覆土より上師質土器である小皿・内耳鉢や常滑系壺破片、瀬戸系陶器破片、錢貨等が出土している。

#### 出土遺物（第66図）～9・11・12、PL. 42)

1は土師質土器小皿である。ロクロ成形で、残存率1/4。法量は口径11.6cm、器高3.8cm、底径7.0cmを測る。上げ底の底部から下方に突出し、体部は外傾して立ち上がる。内外面ともロクロナデ。底部回転糸切り痕をそのまま残置する。胎土に雲母、石英、長石粒を含み、色調は淡橙色を呈する。2も土師質土器小皿である。非ロクロ成形で、残存率1/5。法量は口径8.8cm、器高2.0cmを測る。やや丸底の底部から口縁部は短く開き気味に立ち上がる。外面口縁部はヨコナデ。体部ナデ。胎土に石英・長石粒を含み、色調は橙色を呈する。3は土師質土器香炉の底部破片である。法量は底径6.4cm、現存器高3.1cm、足部は高さ0.9cmを測る。ロクロ成形で、三足は貼付けである。体部は内済気味に立ち上がる。右回転ロクロで、底部は回転糸切り痕。胎土に金雲母、石英、長石粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。4～8も土師質土器鉢と鍋類の破片である。いずれも破片のため大きさや形状は不明であるが、口縁部と底部破片のみ図示した。4は口縁部が外傾して立ち上がる鉢類である。口縁部との境に沈線を一条巡らす。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。5は耳部の部分が残存している内耳土鉢である。口唇部は肥厚し、内面口縁部直下から耳部を貼り付けている。胎土に雲母、石英、長石粒を含む。色調は外面黒色、内面橙色を呈する。6は口縁部破片で、体部は外傾して開き、口唇部が肥厚する。外面口縁部はヨコナデ、体部は継位のヘラケズリ。内面はヘラナデによって仕上げられている。胎土に雲母、石英、長石粒を含む。色調は外面黒色、内面にぶい褐色を呈する。7・8は上鉢の底部破片である。7は底部約1/5程を残存する。法量は底径14.0cm、現存器高3.5cmを測る。平底の底部から体部は内済気味に立ち上がる。内外面ともナデで仕上げられている。胎土に雲母、石英、長石粒を含み、色調は外面黒色、内面赤橙色を呈する。8は底部約1/10程度の残存率。法量は底径16.0cm、現存器高2.4cmを測る。平底の底部から体部は内済気味に立ち上がる。胎土に雲母、石英、長石粒を含む。色調は外面黒色、内面橙色を呈する。4～8は15世紀後半から16世紀前半に比定される。

9は凝灰岩製の砥石破片である。長さ4.48cm、幅2.97cm、厚さ2.17cm、重量3.85gを測る。表面に刃研磨による擦痕状の磨部が観察され、また側面にも磨耗面をみることができる。

錢貨は2点出土している。11は「元祐通寶」で、北宋（1086年初鋤）錢で元存品である。徑2.39cmを測る。12は被損が甚しく判読不可能である。僅かに「元」「寶」のみ読み取れる。徑2.04cmを測る。

#### 溝状遺構（第65・67図、PL. 26・27）

堀跡および道状遺構以外にも溝状遺構とするものが9条検出されている。いずれも幅は狭く、しかも深度も浅いため畑地の区画溝としての機能を有していたものと推定する。現在の地境、畑境と重なる場合が多い。記載については箇条書きとする。

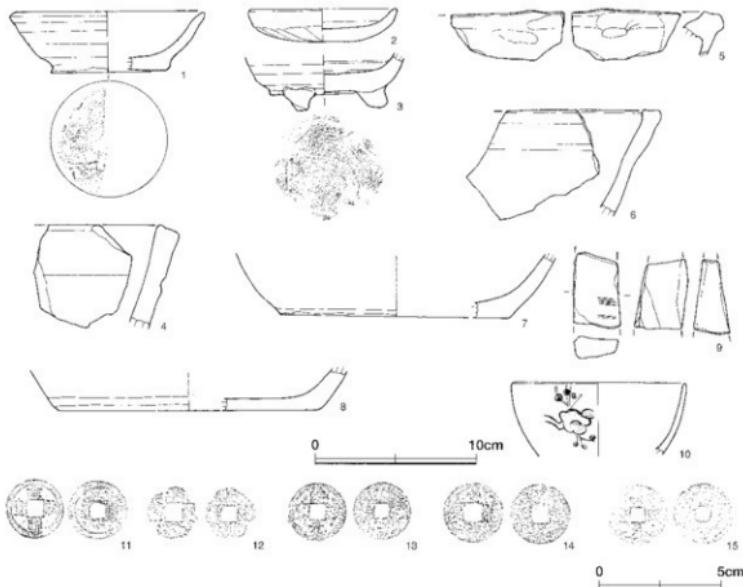
#### 1号溝（SD01）（第65図、PL. 26）

位置 調査区の東端側、標高26.98～27.05m付近、11号墳丘下層で検出。

規模・構造 現存長15.65m、幅80～160cm、深さ8～16cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

主軸方位 N-8°-E



第66図 SD06A・B・その他中近世遺構出土遺物

遺物 出土していない。

所見 11号墳丘下層で検出されたものであるが、既に墳丘削平された後に構築されたもので、近世以降の烟焼溝と推定される。

#### 2号溝 (SD02) (第65図、PL. 26)

位置 調査区の東端側、標高26.87~27.04mに位置し、9号墳丘下層で検出した。

規模・構造 現存長3.23m、幅32~72cm、深さ7cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

主軸方位 N-21°-E

遺物 出土しなかった。

所見 9号墳丘下層で検出されたものであるが、既に墳丘削平された後に構築されたもので、近世以降の烟焼溝と推定される。地境と一致する。

#### 3号溝 (SD03) (第65図、PL. 26)

位置 調査区の東端側、標高26.72~26.87mに位置し、9号墳丘下層で検出した。

規模・構造 現存長7.65m、幅53~91cm、深さ9~15cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦、壁

は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

**主軸方位** 南北にはほほ直線的に走る。N-11°-E

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 9号墳丘下層で検出されたものであるが、既に墳丘削平された後に構築されたもので、近世以降の畠境溝と推定される。地境と一致する。

#### 4号溝（SD04）（第65図、PL. 26）

**位置** 調査区の北東側、標高26.84～26.88mに位置し、堀跡SD06の北堀と方向が一致する。

**規模・構造** 現存長14.30m、幅26～85cm、深さ3～13cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

**主軸方位** N-87°-E

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 堀跡SD06の北堀と方向が一致し、さらに東側へ延びている。堀跡も畠境と共に通しており、近世以降の畠境溝と推定される。やはり地境と一致する。

#### 5号溝（SD05）（第65・66図、PL. 26）

**位置** 調査区の北東側、標高26.72～26.84mに位置し、4号溝とほぼ並行して走る。

**規模・構造** 現存長8.05m、幅30～70cm、深さ7～12cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

**主軸方位** N-80°-E

**遺物** 覆土中より染付磁器の小破片が1点出土した。第66図10は18世紀代波佐見系磁器で、いわゆる「くらわんか茶碗」である。草花文が描かれている。

**所見** 堀跡SD06の北堀と方向が一致する。堀跡も畠境と共に通しており、近世以降の畠境溝と推定される。

#### 7号溝（SD07）（第67図、PL. 27）

**位置** 調査区の北側、標高25.88～26.56mで緩傾斜部の縁辺部に並行して走る。

**規模・構造** 現存長49.20m、幅42～110cm、深さ6～38cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

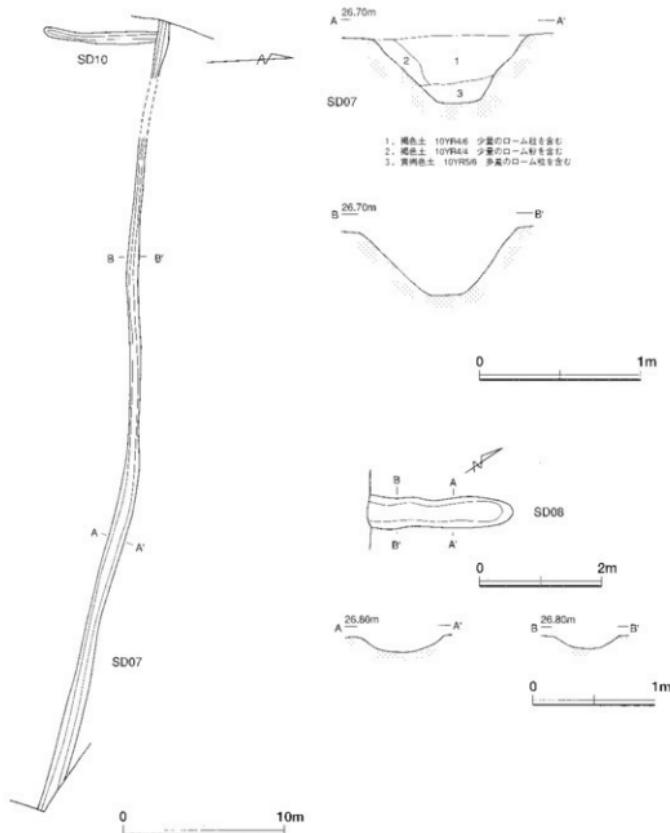
**主軸方位** N-87°-E

**遺物** 出土していない。

**所見** 堀跡SD06の北堀に並行する溝で、堀跡が畠境と共に通することから近世以降の畠境溝と推定される。

#### 8号溝（SD08）（第67図、PL. 27）

**位置** 調査区の北側、標高26.78～26.83mで堀跡SD06の東堀と方向が一致する。



第67図 7・8・10号溝実測図

**規模・構造** 現存長2.37m、幅42~49cm、深さ8~9cmを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

**主軸方位** N-10°-E

**遺物** 出土していない。

**所見** 堀跡SD06の東端の北側に延長する溝で、堀跡が畑境と共通することから近世以降の畑境溝と推定される。

#### 9号溝（SD09）（第65図、PL. 27）

位置 調査区の北縁、標高24.12～24.68mの緩傾斜面に位置する。

規模・構造 現存長16.70m、幅21～53cm、深さ22～32cmを測る。横断面形はU字状を呈する。壁は外傾して立ち上がる。

覆土 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

主軸方位 N-73°-E

遺物 出土していない。

所見 調査区の北縁に位置し、傾斜部に並行して走る。地境と一致し、近世以降の烟境溝と推定される。

#### 10号溝（SD10）（第67図、PL. 10）

位置 調査区の北西側、標高25.97～26.36mに位置し、南北方向に走り、北側で7号溝と接続する。

規模・構造 現存長6.80m、幅40～80cm、深さ12～14cmを測る。横断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 黒褐色土の單一層である。自然堆積。

主軸方位 N-2°-E

遺物 出土していない。

所見 地境と一致し、近世以降の烟境溝と推定される。

### 3. 土塙墓（第68・69図、PL. 28）

ここで土塙墓として分類したのは、坑底面に施設が施されている特殊な土坑を一括した。3基検出されており、木棺墓と推定される。

#### 1号土塙墓（SX01）（第68図、PL. 28）

位置 調査区の北東側。標高26.84～26.89mに位置する。

規模・構造 長軸1.14m、短軸0.94mで長方形をなす。中央部の深さ24cmを測る。底面は長軸両壁際に平行して幅14～18cmの溝を掘り込み、やはり長軸辺に平行する中央に幅67cm、長さ43cm、深さ5cmの溝を設ける。壁は外傾して立ち上がる。

覆土 5層に分層される。上層は黒色土層、下層は暗褐色上で覆われているが、人為的な堆積状態を呈している。

主軸方位 N-12°-W

遺物 埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

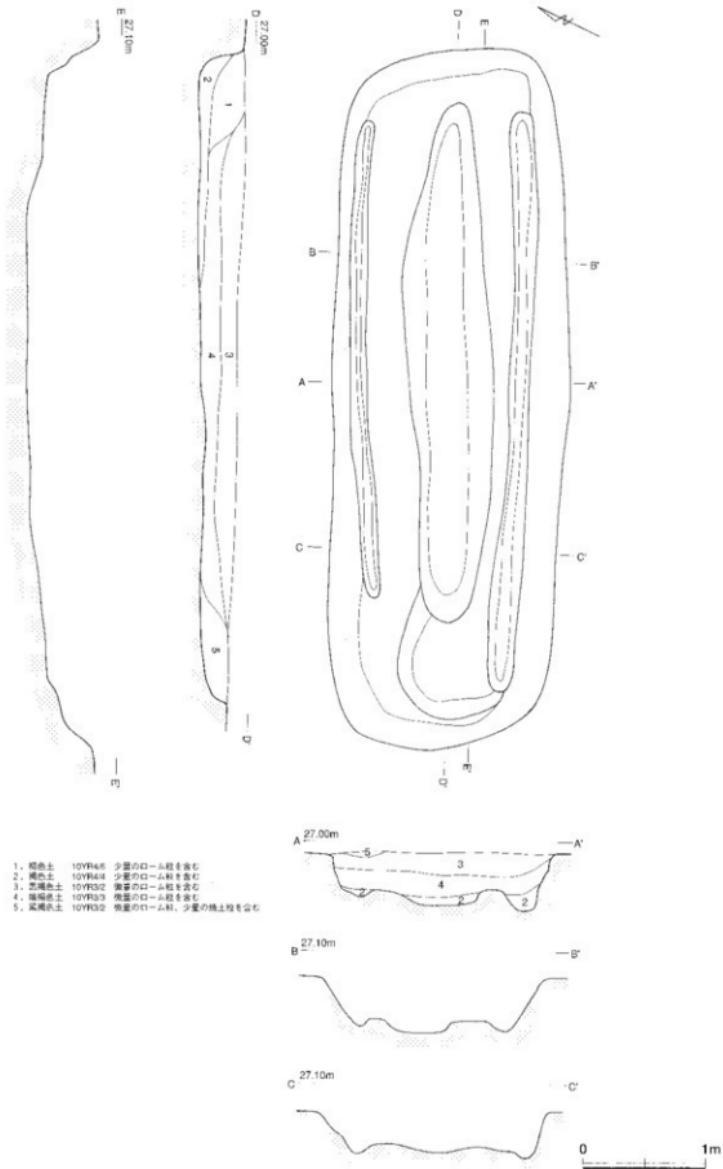
所見 長軸に平行して3条の溝を掘り込む縦溝型の木棺墓と推定される。出土遺物の確認はできなかった。

#### 2号土塙墓（SX02）（第69図、PL. 28）

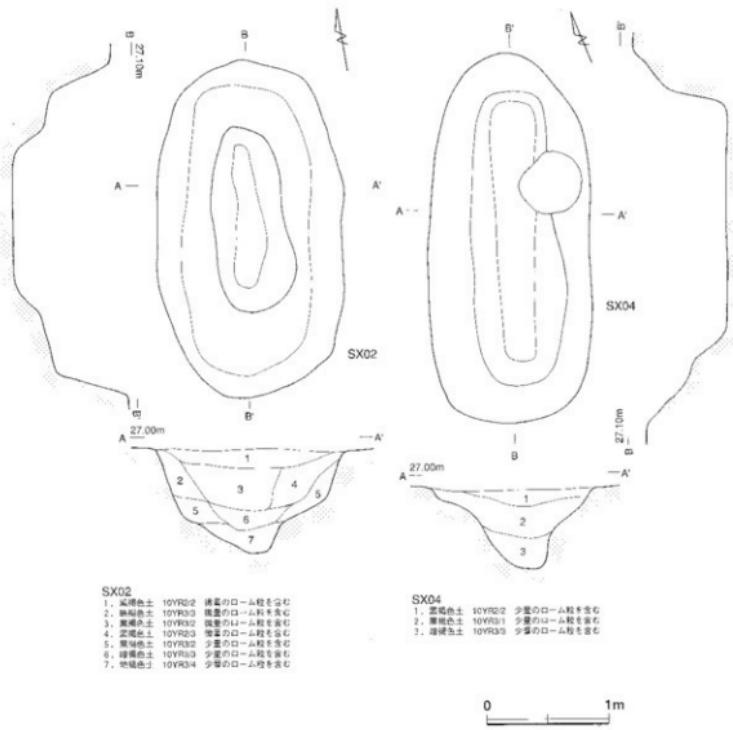
位置 調査区の標高26.93～26.98mに位置する。

規模・構造 長軸2.76m、短軸1.50mで長梢円形をなす。深さ91cmを測る。底面は二段に掘り込まれており、下段の規模は長軸1.50m、短軸0.59m、深さ20cmで底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 7層からなる。上層から中層にかけて黒褐色土、下層は暗褐色土、下段も暗褐色土で覆われている。



第68図 1号土壤墓 (SX01) 実測図



第69図 2・4号土塚墓 (SX02・04) 実測図

人為的な埋没状況を呈している。

主軸方位 N-11°-E

遺物 墓葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

所見 底面が二段構造で、いわゆる二段地下式型の木棺墓と推定される。出土遺物の確認はできなかった。

#### 4号土塚墓 (SX04) (第69図、PL. 28)

位置 調査区の標高26.91~26.98mに位置する。

規模・構造 長軸3.03m、短軸1.31mで長辺円形をなす。深さ65cmを測る。底面は二段に掘り込まれており、下段の規模は長軸2.40m、短軸0.77m、深さ42cmで底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなる。上層および中層は黒褐色土。下層は暗褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。

主軸方位 N-24°-E

遺物 墓葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

**所見** 底面が二段構造で、いわゆる二段地下式型の木棺墓と推定される。出土遺物の確認はできなかった。

#### 4. 集石遺構（第70・71図、PL. 29・31・32）

自然礫がまとめて遺棄されている土坑が2基確認された。当初縄文時代の集石遺構と理解していたが、覆土の状況から判断して比較的新しい時期のものとした。なお、2基の土坑から出土した自然礫はすべてを計測し、図表に示した（第71図）。

##### 土坑（SK09）（第70・71図、PL. 29・31）

**位置** 調査区の標高26.78～26.83mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.04m、短軸0.81mで梢円形をなす。深さ45cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層に分層できる。上層である1層は礫を多量に包含するもので、最下層である3層から礫の出土がないことから、2層黒褐色土と3層にぶい黄褐色土が堆積した後に、多量の礫を遺棄したものである。礫包含層は繪りがなく、全体的にバサバサしている。

**主軸方位** N-17°-E

**遺物** 自然礫（総個体数491個）

**所見** 土坑内からは礫以外遺物の出土はない。また礫の包含状態からみて、比較的新期の所産と推定する。少なくとも中・近世以降であろう。

##### 土坑（SK23）（第70・71図、PL. 29・32）

**位置** 調査区の標高26.98～27.02mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.21m、短軸1.10mで円形をなす。深さ75cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。

**覆土** 下層から礫を含む褐色土が確認された。

**主軸方位** N-12°-E

**遺物** 自然礫および石棺構築材が検出された。（総個体数285個）

**所見** 土坑最下層からは石棺材を含む礫が多量に出土した以外、時期を決定付ける遺物の出土はない。また礫の包含状態からみて、比較的新期の所産と推定する。少なくとも中・近世以降であろう。

#### 5. 土坑（第72～77図、PL. 30～33）

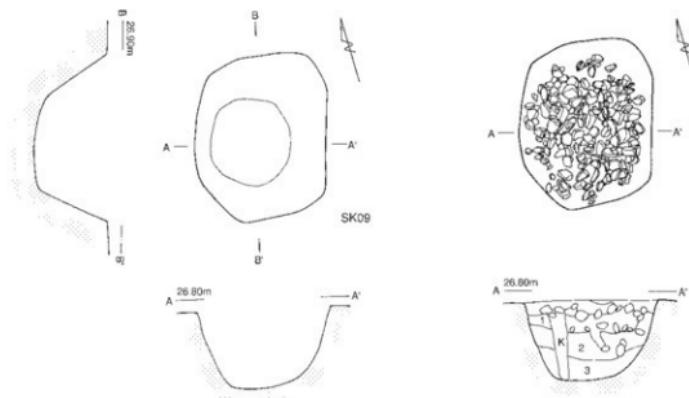
縄文時代以外の土坑について触れる。検出される遺物も殆んどなく、時期を確定できないものが大半を占める。ここでも箇条書きで各土坑の形状を記載する。

##### 1号土坑（SK01）（第72図、PL. 30）

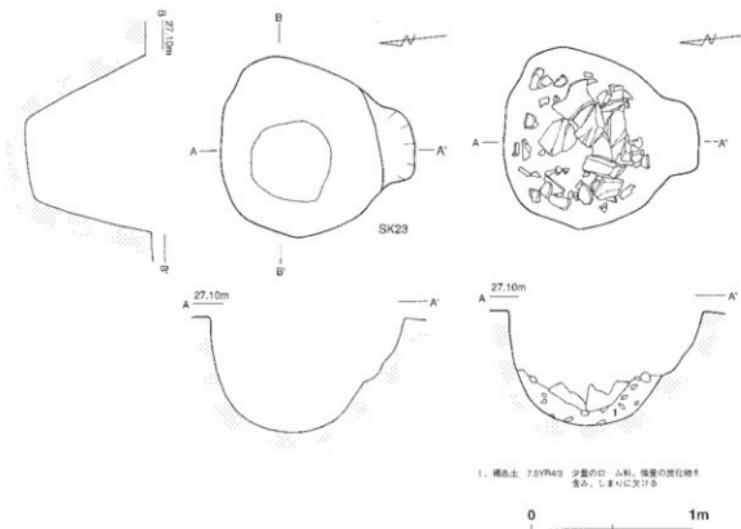
**位置** 調査区の南東隅、11号墳内で半分以上は未調査区域に広がる。標高26.90～27.06mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.51m、現存短軸0.78mで梢円形をなす。深さ70cmを測る。底面は起伏をもち、壁は外傾して立ち上がる。

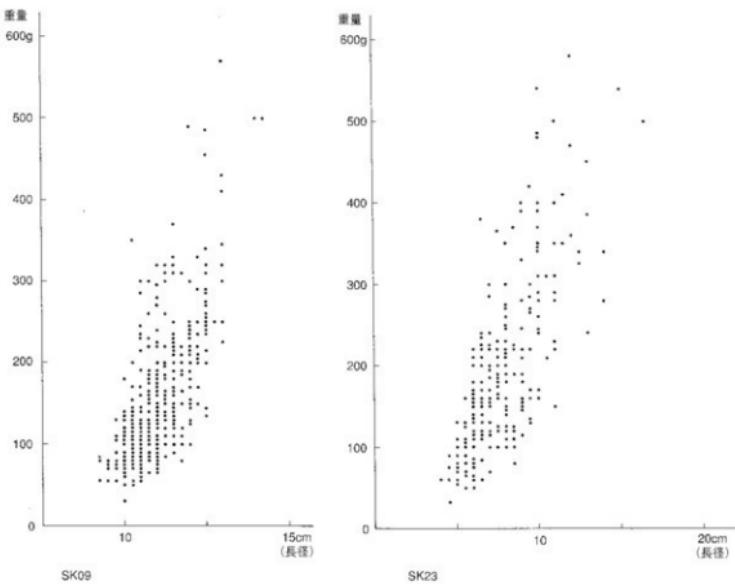
**主軸方位** N-10°-E



1. 黒褐色土 SYR02 少量のローム粒を含み、しまりに欠ける  
2. 黄褐色土 SYR1.71 少量のローム粒を含み、しまりに欠ける  
3. にじい青褐土 10YR5/4 多量のローム粒を含む



第70図 土坑 SK09・23実測図



第71図 土坑SK09・SK23出土物の長径・重量の相関図

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 2号土坑（SK02）（第72図、PL. 30）

**位置** 調査区の北側、堀跡SD06を切って構築している。標高26.68~26.71mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.22m、短軸1.48mで横円形をなす。深さ19cmを測る。底面は崩底状を呈し、壁は緩傾斜して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。

**主軸方位** N-20°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

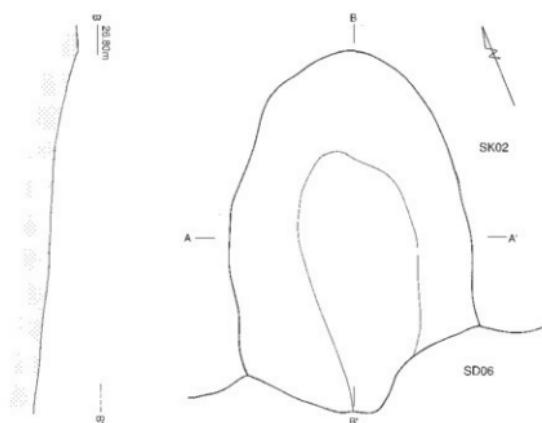
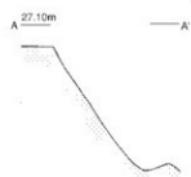
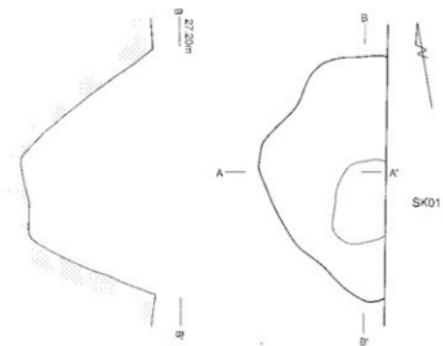
**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 5号土坑（SK05）（第73図、PL. 30）

**位置** 調査区の北側、5号溝と重複している。標高26.71~26.88mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.53m、短軸1.27mで不正円形をなす。深さ43cmを測る。底面は起伏をもち、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 黒褐色土の單一層である。



0 1m

第72図 1・2号土坑実測図

**主軸方位** N-63°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 6号土坑（SK06）（第73図、PL. 30）

**位置** 調査区の北西側、標高26.58~28.19mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.17m、短軸0.53mで長楕円形をなす。深さ10cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 2層からなる。多量のローム粒を含み、埋め戻し上層である。

**主軸方位** N-24°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 7号土坑（SK07）（第73図、PL. 30）

**位置** 調査区の北側、標高26.24~28.20mに位置する。

**規模・構造** 長軸0.80m、短軸0.72mで円形をなす。深さ20cmを測る。底面はやや鍋底状を呈する。壁面は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、多量のローム粒を含む埋め戻し層である。

**主軸方位** N-60°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 8号土坑（SK08）（第73図、PL. 30）

**位置** 調査区の標高26.01~27.20mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.10m、短軸0.88mで長楕円形をなす。深さ24cmを測る。底面は起伏にとむ。壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、多量のローム粒を含む埋め戻し層である。

**主軸方位** N-77°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 10号土坑（SK10）（第74図）

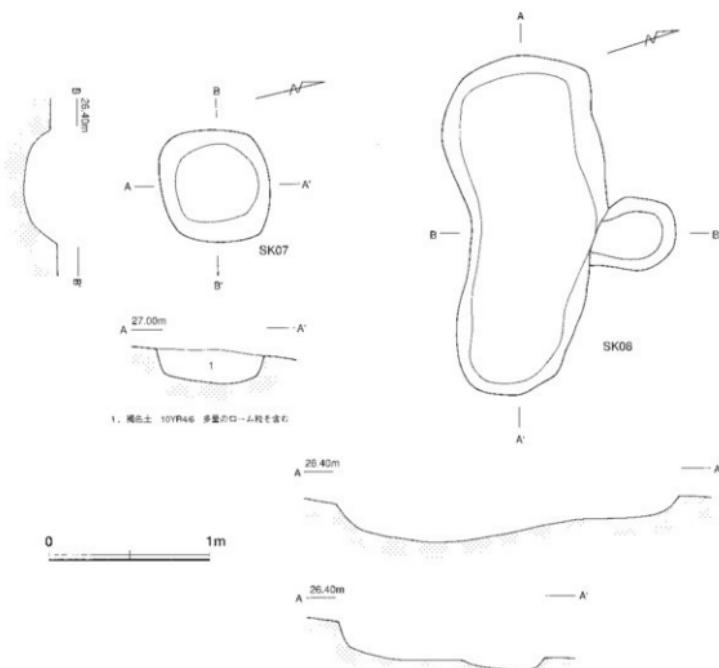
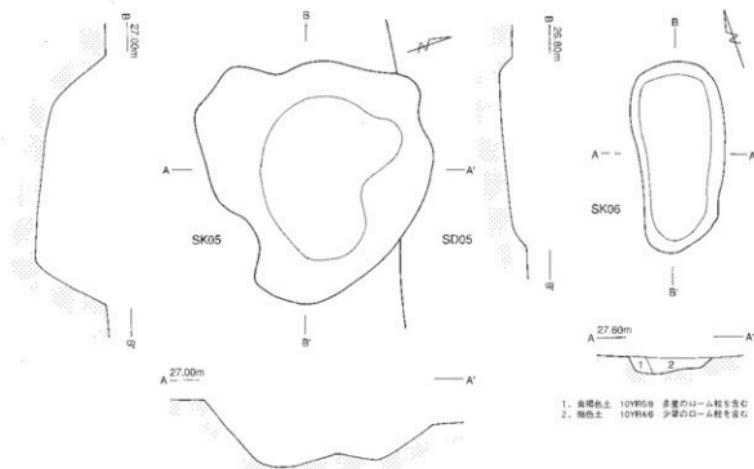
**位置** 調査区の西側、標高26.72~26.77mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.55m、短軸0.86mで楕円形をなす。深さ30cmを測る。底面は起伏し、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層からなる。各層ともローム粒子を含む埋め戻し上層である。

**主軸方位** N-14°-E

**遺物** 遺物は出土していない。



第73図 5～8号土坑実測図

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

**11号土坑（SK11）（第74図、PL. 31）**

**位置** 調査区の南西隅で標高26.89～26.93mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.19m、短軸0.95mで梢円形をなす。深さ21cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 2層からなる。埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-79°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

**12号土坑（SK12）（第74図、PL. 31）**

**位置** 調査区の南西隅で標高26.93～26.95mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.23m、短軸0.84mで円形土坑の重複で南北方向に主軸をもつ楕円形をなす。深さ32cmを測る。底面は鍋底状を呈し、壁は緩傾斜して立ち上がる。

**覆土** 2層からなる。埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-43°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

**13号土坑（SK13）（第74図、PL. 31）**

**位置** 調査区の南西隅で標高26.67～26.96mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.37m、短軸1.27mで円形をなす。深さ38cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-54°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。

**14号土坑（SK14）（第75図、PL. 31）**

**位置** 調査区の中央南側、標高26.88～26.89mに位置する。

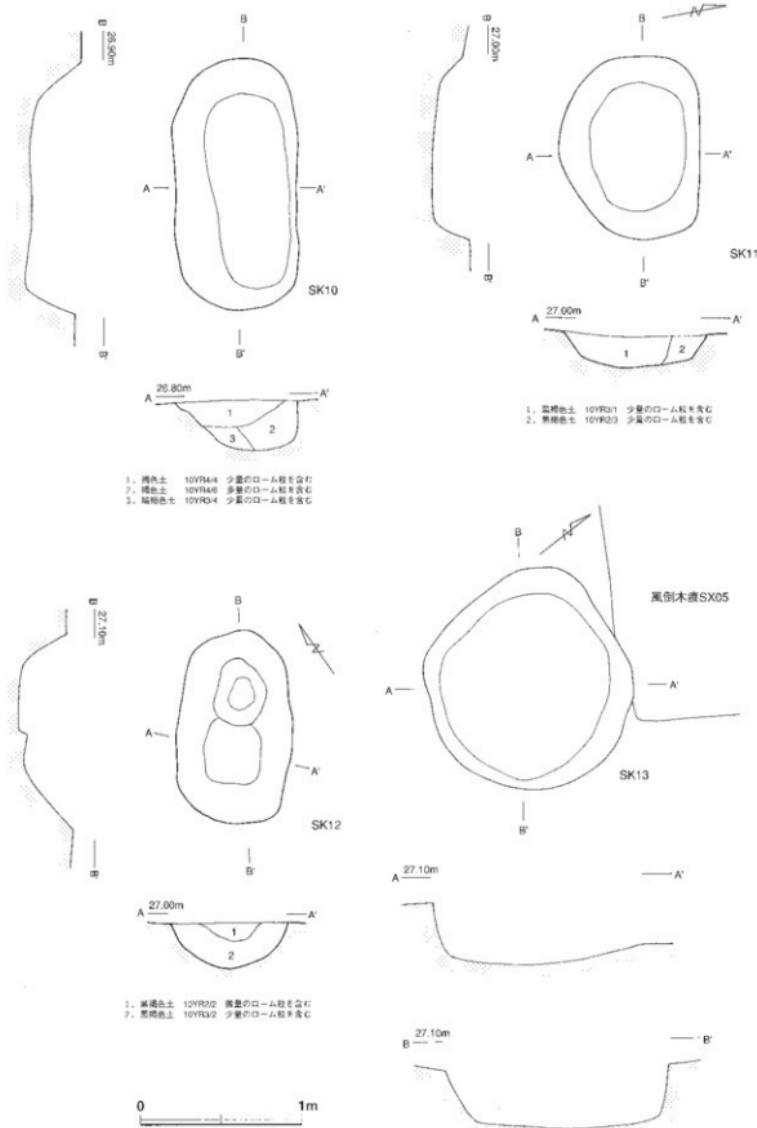
**規模・構造** 長軸1.29m、短軸0.56mで梢円形をなす。深さ24cmを測る。底面は起伏にとみ、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-77°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 煙耕作で構築された近世以降と推定される。



第74図 10~13号土坑実測図

**15号土坑（SK15）（第75図、PL. 31）**

**位置** 調査区の中央北側で、標高26.91～26.94mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.13m、短軸1.03mで円形をなす。深さ39cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-69°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

**16号土坑（SK16）（第75図、PL. 32）**

**位置** 調査区ほぼ中央、標高26.93～26.96mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.25m、短軸0.56mで梢円形をなす。深さ14cmを測る。底面は起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-35°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

**17号土坑（SK17）（第75図、PL. 32）**

**位置** 調査区の中央東側、堀跡SD06に接している。標高26.71～27.04mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.32m、短軸1.00mで梢円形をなす。深さ39cmを測る。底面はやや鍋底状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層からなる。各層中ともローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-17°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

**18号土坑（SK18）（第76図、PL. 32）**

**位置** 調査区の東側、標高26.99～27.03mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.12m、短軸1.12mで梢円形をなす。深さ41cmを測る。底面は起伏にとみ、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層からなる。各層中ともローム粒子を含む埋め戻し土層である。

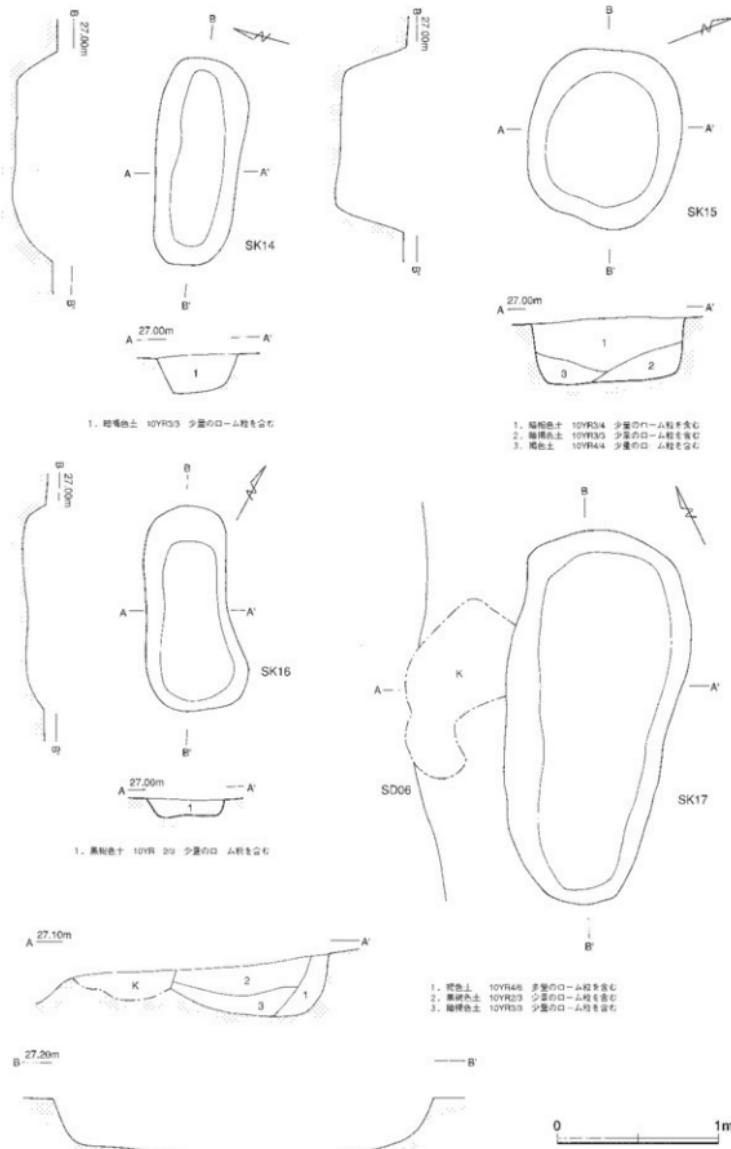
**主軸方位** N-31°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

**19号土坑（SK19）（第76図、PL. 32）**

**位置** 調査区の北側、標高25.94～26.08mに位置する。



第75図 14~17号土坑実測図

**規模・構造** 長軸1.13m、短軸1.05mで円形をなす。深さ150cmを測り、井戸状を呈する。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-76°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 井戸状に深く、遺物の出土はないが、中世と推定される。

#### 20号土坑（SK20）（第77図、PL. 31）

**位置** 調査区の中央。標高26.86～26.71mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.99m、短軸0.60mで長方形をなす。深さ29cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-64°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築されたいわゆる「芋穴」で近世以降と推定される。

#### 22号土坑（SK22）（第77図）

**位置** 調査区の中央、標高26.91～26.95mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.16m、短軸0.54mで横円形をなす。深さ40cmを測る。底面は鍋底状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-13°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築されたいわゆる「芋穴」で近世以降と推定される。

#### 24号土坑（SK24）（第77図、PL. 32）

**位置** 調査区の中央、堀跡SD06中で検出。標高26.47～26.51mに位置する。

**規模・構造** 長軸0.93m、短軸0.81mで円形をなす。深さ8cmを測る。底面は起伏にとも。壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 単一層で、ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-7°-E

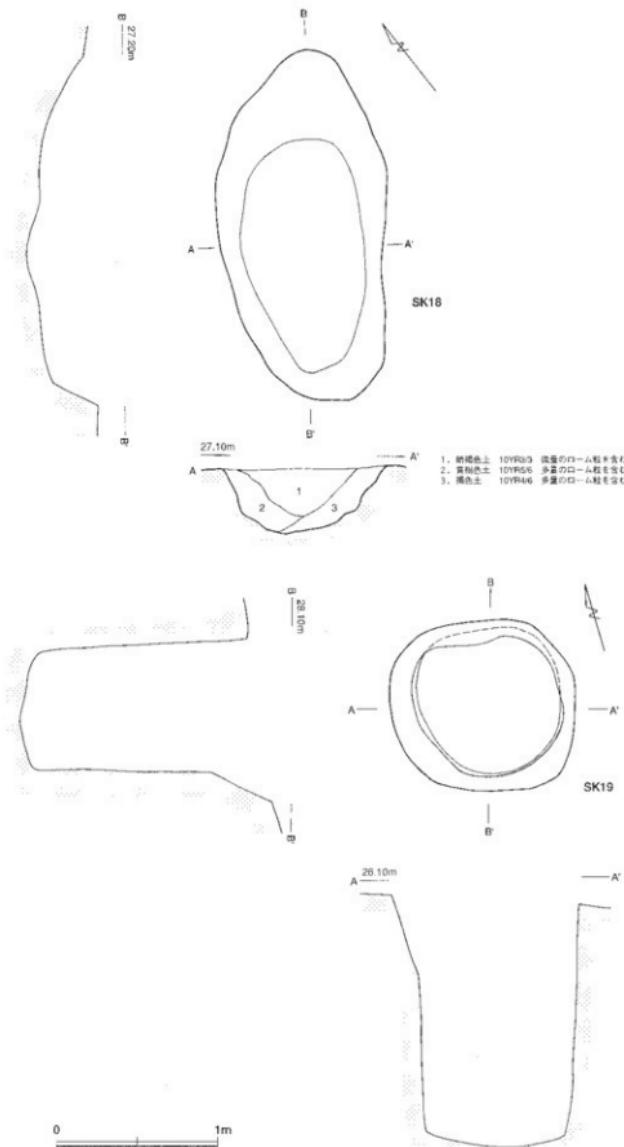
**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 堀跡SD06を切って構築しており、畑耕作で構築された近世以降と推定される。

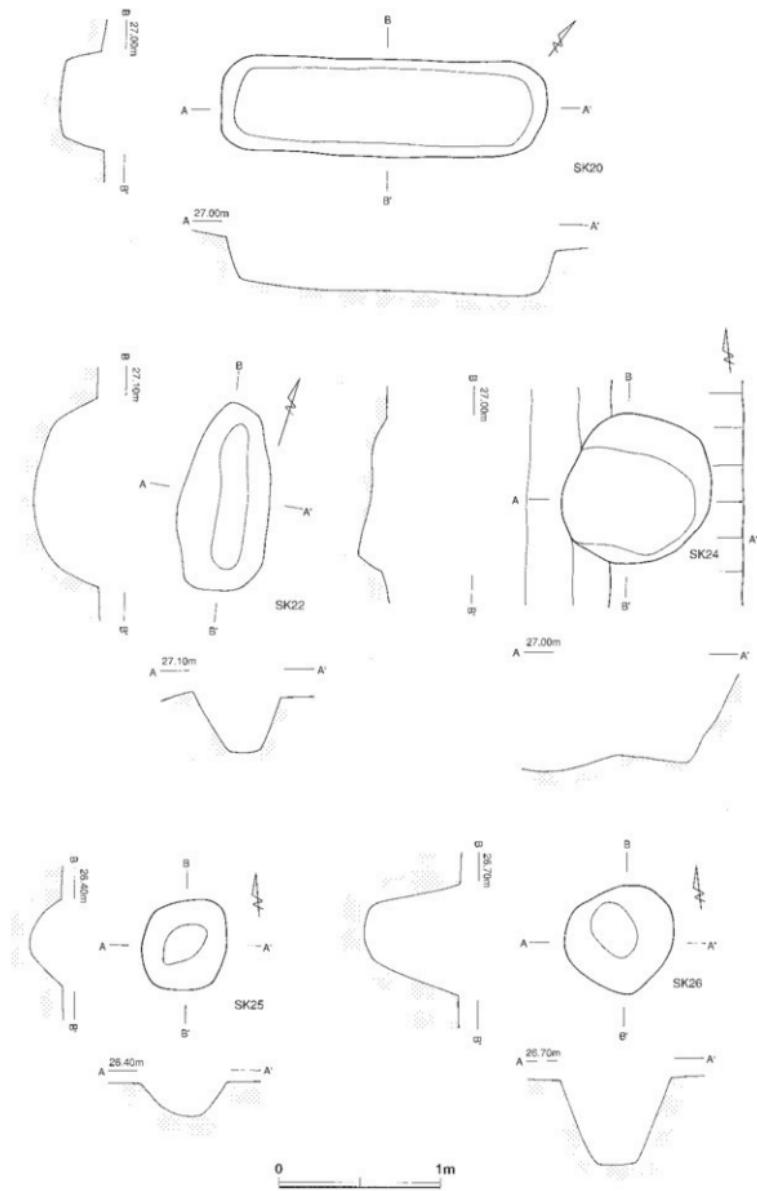
#### 25号土坑（SK25）（第77図）

**位置** 調査区の北東側。標高26.32～26.33mに位置する。

**規模・構造** 長軸0.55m、短軸0.32mで円形をなす。深さ20cmを測る。底面は鍋底状を呈する。壁は外傾して立ち上がる。



第76図 18・19号土坑実測図



第77図 20・22・24~26号土坑実測図

**覆土** 3層に分層できるものの、いずれもローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-0°

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 26号土坑（SK26）（第77図）

**位置** 調査区の中央北側。標高26.59～26.60mに位置する。

**規模・構造** 長軸0.68m、短軸0.67mで円形をなす。深さ59cmを測る。底面は鍋底状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層からなる。ローム粒子を含む埋め戻し土層である。

**主軸方位** N-0°

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 畑耕作で構築された近世以降と推定される。

#### 6. 性格不明造構（SX03）（第78図、PL. 25）

**位置** 調査区の北側。標高26.78mで、堀跡SD06の北東コーナーに構築された竪穴状造構である。堀跡SD06Aを切り、道状造構SD06Bによって切られている。

**規模・構造** 長軸9.0m、短軸7.0mで東西に長い楕円形をなす。深さ68cmを測り、道状造構に切られている。底面はほぼ中央に現代の芋穴が掘削されているものの、平坦である。また壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**覆土** 8層に分層されているが、大きく上層の1層灰黄褐色土と中層の3層暗褐色土が覆い、底面に接して4層黒褐色土が堆積している。なお、6・7層が道状造構であるSD06Bの底面となる。6・7層以外は自然堆積層である。

**主軸方位** N-78°-Wを示し、東西軸を主軸とすると堀跡の延長となり、農作業との関連等について今後の課題とする。

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 堀跡SD06を意識して掘削されたものか不明であるが、その後に道状造構が構築されていることから、やはり畑耕作に係わる造構として理解したい。

#### 7. 風倒木痕

##### 1号風倒木痕（SX05）（第79図、PL. 27）

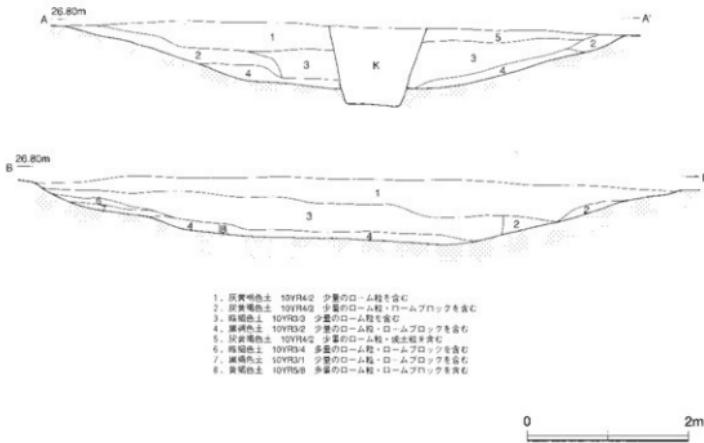
**位置** 調査区の中央北側。標高26.73～26.97mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.50m、短軸1.22mで長方形をなす。深さ92cmを測る。底面は起伏にとみ、壁は外傾して立ち上がる。

**主軸方位** N-76°-W

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 覆土および底面や壁面の状況から判断して風倒木痕と推定される。時期は不明。



1. 黄褐色粘土 10YR4/2 少量のローム粒・ロームブロックを含む
2. 黄褐色粘土 10YR4/2 少量のローム粒・ロームブロックを含む
3. 黄褐色粘土 10YR3/3 少量のローム粒を含む
4. 黄褐色粘土 10YR5/2 ラボのローム粒・ロームブロックを含む
5. 黄褐色粘土 10YR4/2 少量のローム粒を含む
6. 黄褐色粘土 10YR5/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む
7. 黄褐色粘土 10YR5/1 少量のローム粒・ロームブロックを含む
8. 黄褐色粘土 10YR5/0 多量のローム粒・ロームブロックを含む

## 2号風倒木痕 (SX06) (第79図、PL. 27)

**位置** 調査区の中央北側。標高26.85~26.92mに位置する。

**規模・構造** 長軸4.90m、短軸3.64mで不正長方形をなす。深さ105cmを測る。底面は起伏にとみ、壁は外傾して立ち上がる。

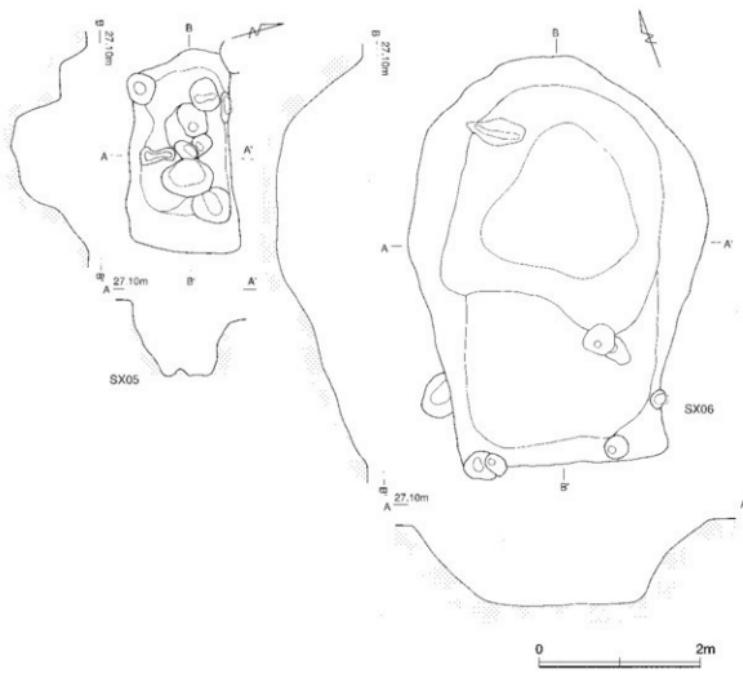
**主軸方位** N-14°-E

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 覆土および底面や壁面の状況から判断して風倒木痕と推定される。時期は不明。

## 8. 表探資料 (第66図15、PL. 42)

北宋錢の景德元寶 (1004年初鑄) が1枚、調査区において表探されている。径24.73mmを測る。



第79図 風倒木痕 (SX05・06) 実測図

## 第7節 まとめ

今回の山川古墳群の調査は、確認調査を継続的に2回実施している。いずれもトレンチ調査で、確認できる遺構は限られ、遺漏が多いものと想定されていた。しかし、昨年および一昨年の確認調査の成果はそのまま本調査における検出遺構数とほぼ一致していたことである。成果の大半は古墳群の存在であるが、多数の溝が確認され、いずれも古墳の周溝であることが判明した。さらに昨年本調査した神明遺跡の東側に隣接することからその関連遺構の解明も期待された。まず小規模であったが、確実にIII石器時代の生活面が残されていたことからその広がりを確認することができたこと、さらに中世墓跡の東側限界を確実に把握できたことは市内に限らず中世研究に大きな進歩をもたらした。ここでは今回の山川古墳群第2次調査で得られた調査成果を時代ごとにまとめていきたい。

### 旧石器時代

本発掘調査前の課題のひとつに、昨年隣接する神明遺跡で検出された旧石器文化層がここ山川古墳群においてどのような広がりをもつものかであった。とくに調査区北側の緩傾斜縁辺部を中心とする重点個所を設定し、ここに集中的にローム層中の調査を実施した。その結果、市内でも有数のまとまった資料を得ることができただけではなく、旧石器時代の時間的範囲を大幅に遡上させることとなった。とくにIX層段階に相当する台形様石器、楔形石器の出土および炉跡遺構の検出は特筆される。さらに炉跡はAMS法による放射性炭素年代測定の結果BP. 31,500年頃との数値を得ている。またⅧ層段階とV層～IV層下部段階の石器プロフクも検出している。

### 縄文時代

広範囲におよぶ常名台遺跡群において縄文時代の遺跡は必ず存在し、その拠点的な集落は確認調査段階であるが、まず北西原遺跡の中期集落をあげることができる。しかし、その周縁部においてもその前後の時期の集落等を検出している。今回確定な集落遺跡ではないが、前期および後期の遺構を検出できた。まず前期は前半・黒浜式期の土坑がある。土器以外に磨製石斧や石皿がまとまって出土したものの、炉や柱穴を伴わないため竪穴状遺構とした。なお本址は緩傾斜面に構築されていることから遺存状況はけっして良いとはいえないことから、本来住居機能を有した住居跡と理解している。また後期は前半・堀之内1式に比定される土坑が確認された。全体的な遺物量は少ないとはいえ、確実に遺構を作うことで近接する後期集落の存在を示唆している。大集落を予想させる北西原遺跡をとりまく縄文景観は確実に資料の増加を提供している。

### 古墳時代

当該地は調査前の分布調査や確認調査の段階でも比較的規模の大きな古墳群であることは周知されていた。しかし、いずれも部分的な把握であり、とくに後期古墳を中心としたものに集中していた。今回周知されていた2基に加え新たに4基の古墳が確認された。いずれも丘陵は遺存しておらず、ローム上面まで掘削した結果周溝のみの検出されたもので、その中で3号墳とした帆立貝式前方後円墳のみが完掘できた。また他の5基は部分的な周溝のみの検出であったが、それぞれ特徴ある古墳であることが改めて認識された。まず8号墳は二度にわたる確認調査でもその存在が知られていたにもかかわらず、その実態が今ひとつ把握できなかった古墳のひとつである。今回北側約半分の調査であったが、一辺34mを越える大形の方墳であることが確認され、しかも、明確な主体部は確認できなかったものの、周溝内側に壺棺が埋納されており、前期古墳であることも判明した。また昭和46年に発掘調査された3号墳は、當時箱式石棺の主体部のみの調査であ

ったが、今回周溝を含めその全体像が明らかにされた。主体部の位置が明確になっただけではなく、周溝内に埋葬施設が6基確認されたことである。とくに2号埋葬施設と命名した上坑には土師器粗製小型鉢がまとまって出土していた。6世紀末から7世紀初頭に比定される土器群で、本体の箱式石棺を埋納した主体者は確実に前段階の6世紀後半に位置付けが可能となった。また隣接する9号墳は小規模な前方後方墳である。主体部は抜かれているが、箱式石棺である。ここでも周溝内埋葬施設が5基検出されている。うち括れ部に構築された埋葬施設に接してフラスコ形長頸瓶が出土している。完存品で底部に人為的な穿孔行為が何えるもので、7世紀後半に比定されている。また同じ周溝内には須恵器短頸壺とともに9世紀代の須恵器杯が伴出しており、大きな幅がみられる。周辺に当該期の集落が検出されていないことから、単なる流れ込みとは考えがたい。周溝埋土の状況を含め今後の問題としたい。またこの前方後方墳に重複して円形の周溝が確認された。切り合い関係は土層観察から判断して円形周溝が古期である。径10m前後の小規模といえ円墳であろう。時期は5世紀代に比定される。また他の2基は円墳である。主体部は明確ではないが周溝内から須恵器の破片等が出土しており7世紀代と推定され、ここで各段階連続して古墳築造の変遷を追うことが可能となった。

#### 中世

本遺跡において古代までは高塚としての古墳以外集落はまったく形成されていない。しかし、中世からは飛躍的に拡大するようである。とくに昨年の調査で明らかにされた館堀が今回より明確になったことである。北堀の東側延長部がここへきてどれだけ延びていくものか期待されていたものであるが、想定していたとおり、調査区の半分に達した段階で、南方へ直角に曲がり東堀の限界が明らかにされた。残るは南堀区画だけであるが、少なくとも北堀の規模が判明していることで、今後の調査はより確認し易くなってきた。全体的に遺物の出土量は少ないものの、中世の館堀が把握されたことによって、本地域が城跡、砦跡以外の中世遺構を分析する際に重要な拠点となることは確実である。

## 第4章 考察

### 山川古墳群を中心とした常名台の古墳の展開について

今回までの調査の結果、常名台に存在している古墳は立地から見ると3つのグループに大別することができる。まず最も南側の小舌状台地状には常名天神山古墳・瓢箪塚古墳からなる第1グループが、台地南縁には山川古墳群である第2グループが、そして台地中央部には北西原古墳群である第3グループが存在している。1993年から始まった常名台の発掘調査以前においては第3グループの北西原古墳群は存在が確認されておらず、また第2グループである山川古墳群も箱式石棺の存在などが知られていたことから後期古墳を中心とする古墳群と考えられていた。しかし1993~1995・2002年の北西原遺跡の第1次~第3次・第6次調査で新たに北西原古墳群が発見され、1995年の山川古墳群第1次調査でも4世紀の方形周溝墓と5世紀の円墳が確認されたほか、今回の山川古墳群第2次調査では4世紀~7世紀の古墳が新たに確認されたことから、従来考えられていた常名台の古墳の在り方について再検討する必要が生じてきた。そこで今回調査を行った山川古墳群を中心に、常名台の古墳についていくつか考えてみたい。

#### (1) 常名天神山古墳・瓢箪塚古墳と山川古墳群の関係について

常名天神山古墳・瓢箪塚古墳とも主体部や出土品が明らかでないため年代などには不明な点も残されているが、古墳の規模、形状などから推測して常名天神山古墳は5世紀初頭頃、瓢箪塚古墳は常名天神山古墳に後出する5世紀代の築造と考えられている。どちらの古墳も桜川低地を見渡す立地にあり、首長墓の立地としては申し分なく、この時期に常名地区を治めていた豪族の優位性を感じさせる古墳である。それに対し山川古墳群の立地は一段北に入った台地の南縁部にあたり、直接的には桜川低地は見渡すことが出来ないが、Y字状に貫入する谷津を中心に考えるのには都合が良い環境である。

山川古墳群からは4~5世紀の遺構として、1995年の調査で方形周溝墓3基・古墳4基が、今年度の調査では古墳2基が発見・調査されている。これらのうち、まず4世紀の遺構と考えられるのが1995年調査の1~3号方形周溝墓と本年度調査の8号墳で、いずれも方形の埴輪である。規模については1~3号方形周溝墓が一辺(内側)8.5~12mなのに対し、8号墳は30mと大きな違いがある。本文にもあるとおり調査の結果8号墳には明確な盛土は確認できず、また中世には方形溝を巡らせた遺構(館跡?)内に取り込まれていたことから考えても、もともと本墳には明確な埴丘が存在しなかった可能性が高い。その点においては8号墳も方形周溝墓であると考えた方が良いのかも知れないが、確認されている他の周溝墓に比べて非常に大型で、特に周溝の掘削土量などは周囲の古墳以上のものであり、本墳が所謂弥生の墓制を継承した均一規模の方形周溝墓群の方形周溝墓とは一線を画す存在であった可能性も想定されることから、今回あえて古墳として扱ってみた。そこで問題となるのが8号墳と常名天神山古墳の関係である。常名天神山古墳は出土品が確認されておらず、また8号墳から出土した上器器蓋も口縁部を欠くことから詳細な年代決定には難しい点もあるが、いずれにしても前期古墳の範疇に収まる年代ではないかと思われる。この両墳の先後関係については今後検討の余地が残されているが、とりあえず8号墳が先行すると考えた場合には、常名台で方形周溝墓を築造していた集団の中から大型周溝墓である8号墳が生まれ、常名天神山古墳の出現に驚がっていたのではないかと考えられる。ちなみに2000年度に行った確認調査と1995年及び今年度の調査を併せて考えてみると、8号墳以南にはまだ方形周溝墓が存在する可能性が考えられるが、8号墳以北には周溝墓の存在は確認できず、8号墳は周溝墓群の北縁部に位置していることがわかる。

次に5世紀の造喰について考えてみると、1995年の調査で4基、本年度の調査で1基の古墳が確認されている。いずれの古墳も周溝が確認されたのみで埴丘は確認されておらず、また主体部も不明である。埴形については、7号墳は円形に近い方形？それ以外は円形である。規模は10m以下が3基（5・7・10号墳）、15m前後が2基（4・6号墳）で小型の古墳が多い。これらのうち10m以下の3基は周溝幅も狭く、当初から埴丘が存在した可能性が低いと考えられることから、どちらかといえば円形周溝墓と考えた方が良いのではないかと思われる。これらの古墳は規模的にも1~3号形周溝墓と大差なく、いわば4世紀に周溝墓を築造していた層の人たちが5世紀に造った古墳ではないかとも思われる。常名天神山古墳から鷺草塚古墳へと続く首長墓が築造されていた頃、山川古墳群では小規模な古墳（周溝墓）を造ることができた層の人たちが、引き続き自分たちの墓を造っていたのではないだろうか。

## （2）北西原古墳群と山川古墳群の関係について

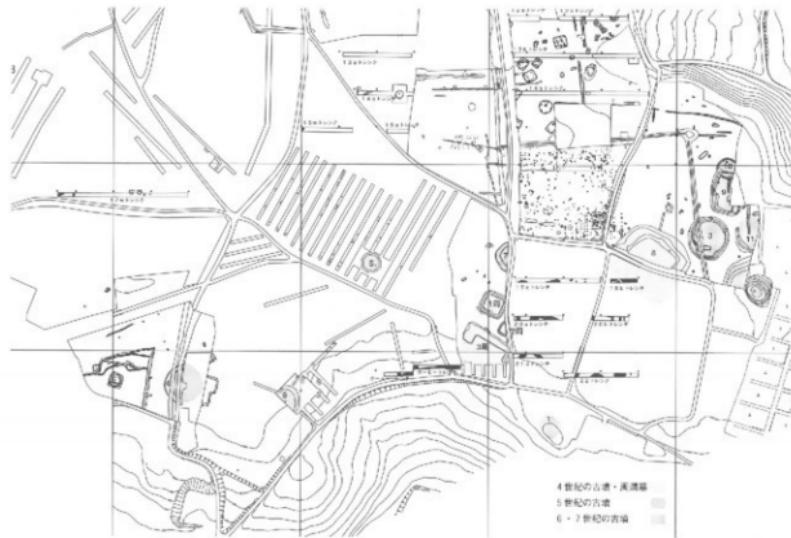
山川古墳群の北方の台地中央部からは、現在までに4基の古墳が発見されたことから新たに北西原古墳群として遺跡登録がされている。ここから発見された古墳はいずれも方墳で、中央部に長い墓道を有する地下式の石棺系横穴式石室を有する、所謂終末期方墳である。規模については1号墳が最も大きく一辯（内側）約25mを測るが、その他のものは約12~15m前後である。出土品については3号墳からは7世紀末頃の須恵器が、4号墳から7世紀末~8世紀初頭の土師器・須恵器が確認されている。

今回の山川古墳群第2次調査で発見された古墳のうち、2号墳・3号墳・9号墳・11号墳は出土品より7世紀頃の古墳であると考えられる。2号墳・11号墳については部分的な調査であるため不明な点も多く位置付けは難しいが、主体部の箱式石棺に大きめの石材を使用し、周溝内埋葬施設から土師器の一括資料が出土した帆立貝式前方後円墳である3号墳は6世紀末から7世紀頃、周溝内埋葬施設から須恵器フラスコ瓶が出土した9号墳は7世紀中葉頃の古墳ではないかと考えられる。特に9号墳については破壊された主体部が括れ部中央より検出されたことから、市内では木田余台の東台古墳群などで発見されている終末期の小型前方後円（形）墳との共通点が想定される。ただしこのタイプの古墳で、墳形が「前方後方」形となるものは今までに確認された事例がなく<sup>(10)</sup>、また終末期の前方後円（形）墳は括れ部の意識が希薄で、周溝などもいわば盾形に近いものであるに対し、9号墳の括れ部が非常に明確に造られていることも相違点である。

さてこの終末期の古墳群は、①終末期前方後円（形）墳は存在するが、終末期方墳は含まない古墳群（大塚古墳群：千代田町など）、②終末期前方後円（形）墳を主体とし、終末期方墳も含む古墳群（東台古墳群：土浦市木田余など）、③終末期方墳を主体とし、終末期前方後円（形）墳も含む古墳群（石倉山古墳群：上浦市島山など）、④終末期方墳のみで構成される古墳群（寺家ノ後古墳群：土浦市水国など）に大別することができる。今回の山川古墳群には終末期方墳は含まれていないので、どちらかといえば①の古墳群に近い古墳群であると思われるが、①に該当する他の古墳群では古墳の築造自身が終末期方墳盛行以前に終了しているように感じられるのに対し、山川古墳群の場合はすぐ近隣に終末期方墳のみで構成される北西原古墳群が別に存在している点が少し特異である。木田余台や島山で見られるような、終末期前方後円（形）墳から終末期方墳に移行した古墳群とは一線を画する何らかの理由が、常名台には存在したのであろうか。

常名台の3グループの古墳からは現在のところ埴輪を持つ古墳が確認されておらず、6世紀頃の古墳群の状況についてはやや不明な点が残されているが、上記のとおり常名台には4世紀から7・8世紀に至る長い期間古墳が築造されていたことが確認された。このように一地域の古墳群の中で初期から終末期までの古墳が確認されたのは非常に珍しい事例であろう。

〔註〕 古墳時代終末期の前方後方墳としては千葉県の六条平原古墳や日立精良1号墳がある。これらの主体部は横穴式石室で、前方後円墳の古墳として位置付けられている。（移山2000）



第80図 山川古墳群古墳分布図

第16表 2003年現在確認されている山川古墳群の周溝墓・古墳

調査年	周溝墓・古墳名	形 状	規 模	出土遺物	築造年代	備 考
-	1号墳	円	(径18)	-	?	開発地外のため未調査。
2003	2号墳	円?	径30	須恵器	7C	約1/4検出。主体部未確認。
2003	3号墳	帆立	長18.3	直刀・刀子・耳環・土師器	6C末~7C	箱形石棺。周溝内埋葬施設から土師器出土。
1995	4号墳	円	径16	土師器・須恵器	5C後半~末	約1/2検出。主体部不明。
1995	5号墳	円	径8	なし	5C?	主体部不明。円形周溝墓?
1995	6号墳	円	径16	土師器	4C末~5C	1/3検出。主体部不明。
1995	7号墳	方?	辺10	石製焼造品	5C	1/2検出。主体部不明。円形周溝墓?
1995	1号周溝墓	方	辺8.5	土師器	4C	周溝内より土師器出土。
1995	2号周溝墓	方	辺5以上	なし	4C?	1/2検出。主体部不明。
1995	3号周溝墓	方	辺12	土師器	4C	約1/2検出。主体部不明。
2003	8号墳	方	辺30	土師器	4C	約1/2検出。周溝肩から壺棺出土。
2003	9号墳	前方後方形	長20	須恵器	7C中葉	約3/4検出。主体部は箱形石棺か。周溝内埋葬施設から須恵器出土。
2003	10号墳	円	径9	土師器	5C	9号墳と重複。主体部不明。円形周溝墓?
2003	11号墳	円	径25	土師器・須恵器	7C	約1/3検出。主体部未確認。

\*規模は周溝内面の値。一部推定値を含む。

## 第5章 総括

今回報告した山川古墳群第二次調査では、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中世の遺構および遺物が発見されている。特筆すべきものとしては、まず遺構では旧石器時代の軽跡がある。この軽跡はC14年代測定の結果約31,500年前のものと考えられるもので、市内で発見されている旧石器時代の遺跡の中でも最も古い年代を示すものの1つとなった。また発見された旧石器時代のユニットも31,000～25,000年前と考えられるもので、出土状態も良好であり、今後この地域の旧石器研究の好資料になるものと考えられる。

次に古墳群であるが、山川古墳群は当初後期古墳を中心とする古墳群と考えられていた。しかし1995年の山川古墳群第1次調査で4世紀の方形周溝墓と5世紀の円墳が確認されたことから、後期古墳群ではない可能性が考えられていた。今回の調査では4世紀～7世紀の古墳が新たに確認されたことから、単一の古墳群としては例を見ないほど構築年代幅の広い古墳群であることが確認された。また周辺に類例を見ないほど大型の方形周溝墓である8号墳や、終末期の前方後方（形）墳である9号墳など、発見された古墳自体にも従来の考え方方に再検討を必要とするようなものも含まれている。山川古墳群自体がまだ多数の未調査古墳があると考えられるので全体像は不明であるが、今後の調査の進展によっては茨城県の古墳研究の新たな1ページを飾る資料になる可能性が大きいと考えられる。

最後に中世であるが、今回の調査で東西約100m、南北約80m以上の方形に溝を巡らせた巨大な遺構の存在が確認された。北辺はまだ未検出のため全体規模は未確定ではあるが、今年の調査で溝と主軸方向が合致する掘立柱建物跡が中央部から発見されたことから、この建物跡がこの方形に溝を巡らせた遺構の主建造物となる可能性が想定される。この巨大な遺構の性格については以前より船跡の可能性が指摘されているが、出土遺物が乏しく、また全体の把握が出来ていない現状での判断は難しいと考えている。今後の調査・検討により性格が明らかとなる事を期待したい。

常名台では、1993年以降総合運動公園の建設に伴う発掘調査を都合8回にわたって実施しており、2003年度までに約10.4haの調査が完了している。このような大規模な発掘調査は、土浦市内では本田余台遺跡群（1987～1991年調査）、田村・沖宿遺跡群（1990～1993年調査）及び茨城県教育財団が実施した原田遺跡群（1992～1995年調査）に並ぶものとなったが、まだ神明遺跡の大半や山川古墳群の半数は未調査であり、土地利用計画によっては今後とも発掘調査が必要となるものと考えられる。

最後に、今回の発掘調査及び整理作業について多大なるご協力を頂いた地元及び関係諸氏に厚く御礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 長南倉之助 1928 「常南地方の古墳」『新修』27号 (『郷土研究集録』1994筑波書林再録)
- 樋口清之他 1967 「塙山古墳調査報告」『上代文化』37
- 中村盛吉編 1969 「新治郡純文遺跡地名表」「日本貝塚の研究」 清野謙次著
- 藤田安通志 1972 『故藤田清・中村盛吉遺稿集「常総古文化研究」』 藤田実
- 大塚 博他 1973 「殿里台及び常名台遺跡調査報告書」 土浦市教育委員会
- 土浦市史編さん委員会 1974 『土浦歴史地図』
- 土浦市史編さん委員会 1975 『図説土浦市史』
- 土浦市史編さん委員会 1975 『土浦市史』
- 土浦市史編さん委員会 1980 『土浦市史民俗編』
- 山本貴之他 1980 『常磐自動車道関係埋蔵文化財報告書I』茨城県教育財團
- 早川 唯弘 1982 「I. 地形分類図」「土地分類基本調査 土浦 (国土調査)」茨城県農地部農地計画課
- 前田 潮 1982 「上坂田北部貝塚」「筑波地域古代史の研究」 筑波大学
- 増田精一他 1986 「武者塚古墳」 新治村教育委員会
- 新治村史編纂委員会 1986 「図説新治村史」
- 永山 正 1989 『土浦町内史』 土浦市教育委員会
- 塙谷 修 1990 『第3回特別展図録 常陸の埴輪』 土浦市立博物館
- 茂木雅博他 1991 『土浦市における古墳の測量』『博古研究』創刊号
- 塙谷 修 1992 「終末期古墳の地域相—茨城県桜川河口の事例から—」『土浦市立博物館紀要』第4号
- 前田 潮他 1992 「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究 筑波大学
- 近藤義郎他 1994 「前方後円墳集成 東北・関東編」 山川出版社
- 茂木 雅博 1995 「常陸」『全国古墳縦年集成』雄山閣出版
- 千葉 隆司 1997 「19回特別展 霞ヶ浦の首長—古墳に見る水辺の権力者たち—」霞ヶ浦町郷土資料館
- 石橋 充 1997 「常陸の横穴式石室と前方後円墳」『シンポジウム横穴式石室と前方後円墳』 第2回東北・関東前方後円墳研究大会
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」「シンポジウム前期古墳から中期古墳へ」第3回東北・関東前方後円墳研究大会
- 橋場 君男 1998 「神明遺跡 (第1次・第2次調査)」 土浦市教育委員会
- 寺嶋 誠彦 1999 「土浦史稿考 第1巻総編・神社仏閣編」
- 比毛 君男 1999 「第5回企画展 常名台の古代のむら」 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 稻村 繁 2000 「茨城における前方後円墳の終末とその後」『シンポジウム前方後円墳の終末とその後』第5回東北・関東前方後円墳研究大会
- 莊田 恵一 2001 「第7回企画展 土浦の旧石器」 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 吉澤 悟他 2002 「常名台遺跡群確認調査 神明遺跡 (第3次調査)」 土浦市教育委員会
- 比毛君男他 2003 「山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡 (第6次調査) 神明遺跡 (第4次調査)」 土浦市教育委員会

# 付編1. 山川古墳群出土炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

茨城県土浦市山川古墳群は、標高約28mの通称「常名台」と呼ばれる台地上に立地する。常名台は、新治台地と呼ばれる洪積台地の一部で、筑波山系八溝山塊の南麓から派生し、南東方向に延びる台地の一角にあたり、南関東の段丘区分では成田面(M1面)に相当する台地である。

今回の発掘調査では、全国的に見ても事例の少ない旧石器時代の炉跡が検出されており、その所属時期が注目されている。そこで今回の分析調査では、この炉跡底面から採取された炭化物の加速器による放射性炭素年代測定(AMS法)を実施し、年代資料を得ることにした。

## 1. 試料

試料は、UY 2 炭1~5の5点であり、いずれも立川ローム層第2暗色帶下部(BB2L, IX層)に対比される炉跡炉跡底面から採取された炭化物である。

なお、測定は試料が微量であるため、UY 2 炭1, 2, 4, 5を合わせて1点(試料番号1)、UY 2 炭3(試料番号2)を単独で1点、の計2点で実施した。

## 2. 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、曆年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における曆年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

## 3. 結果

結果を表1に示す。試料の測定年代(補正年代)はUY 2 炭1, 2, 4, 5(試料番号1)が約31650年前、UY 2 炭3(試料番号2)が約31480年前の値を示す。これらの値は、炉跡の検出層準が立川ローム層第2暗色帶下部(BB2L, IX層)に対比されていることと調和的であり、該期遺構の貴重な年代資料を得ることができた。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$	測定年代 BP	Code. No.
1	UY 2 炭1, 2, 4, 5	炭化物	31650 ± 200	-24.45 ± 1.06	31640 ± 200	IAAA-31419
2	UY 2 炭3	炭化物	31480 ± 190	-25.76 ± 1.02	31490 ± 190	IAAA-31420

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 表記した誤差は策定誤差  $\delta$ (測定値の68%に入る範囲)を年代値に換算した値。

なお、炭化物については、実体鏡による木材組織の観察による樹種の同定を行う予定であった。しかし、試料が微量であるため、木材組織観察の過程で試料が汚染し、年代測定結果に影響する可能性が高いと判断されたので、今回木材組織観察は実施していない。

## 付編2. 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

望月明彦

### はじめに

茨城県では旧石器時代における黒曜石製の石器の出土例は少ない。茨城県内では良好な黒曜石の産地は近隣には見当たらず、最も近いところで栃木県の高原山、長野県の産地（和田、源訪、蓼科）、遠くは神津島の黒曜石産地からの搬入の可能性が高い。場合によっては伊豆箱根や東北の産地からの黒曜石の可能性もある。実際の茨城県内における黒曜石利用の実態を知るための第一歩として、土浦市から出土遺物を中心にして产地推定を試みた。ここでは、弁才天遺跡の3試料、神明遺跡の2試料、山川古墳群出土の10試料、計15試料についての結果を報告する。

### 分析法

蛍光X線分析法は、試料にX線を照射することにより発生する蛍光X線から含まれている元素とそれぞれの元素の元素組成を知る分析法である。この分析法の大きな特徴として試料を破壊せずに分析できることがある。試料をまったく損傷せずに測定が可能なので、考古学的に貴重な資料であっても安全に分析できることになる。測定に時間がかかることも特徴といえよう。測定のためのコストも低いことと合わせて、遺跡から出土する膨大な黒曜石製石器の測定のためには非常に有利な分析法と考えられる。

分析に用いた装置はセイコーインスツルメンツ社製エネルギー分散蛍光X線装置SEA-2110Lで、X線管ターゲットはロジウム、検出器はSi (Li) 半導体検出器である。測定条件を次に示す。

電圧：50kV 電流：自動設定

雰囲気：真空 照射径：10mm, 3mm

測定時間：産地原石500sec、遺跡出土試料240sec

測定した元素はアルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、鉄、マンガン、ルビジウム、ストロンチウム、イットリウム、ジルコニウムである。

### 产地推定法

黒曜石の产地推定は、あらかじめ産地原石を測定して原石のデータベースを作っておき、このデータベースを基に行なうが、ここで、筆者の産地という用語に対する考え方を述べておきたい。筆者は「産地」を「原産地」とは別の意味で用いている。原産地をその黒曜石がもともと生成した場所、という意味の印象を与える。しかし、产地推定のデータベース作成のための原石の採取場所は、かなりの確率で露頭ではなく、原石が散布しているだけの場合が多い。また、同じ群の黒曜石が複数の場所で採取可能であることが多い。黒曜石原石が最初に生成した場所から移動していることが多いからである。実際、黒曜石の最初の生成地点を特定できない場合はよくあることである。したがって、筆者は产地という用語を「露頭をも含んで現在原石が採取可能なすべての場所」として用いている。分類された黒曜石の判別群名はその群の黒曜石が採取できる代表的な地点名から命名されている。決してその地点からしか採取できないということではない。

産地原石、遺跡出土試料についての測定データから、以下のような指標を算出した。

A= (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)とした時、

$$\text{Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / A$$

$$\text{Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / A$$

$$\text{Zr分率} = \text{Zr強度} \times 100 / A$$

$$\text{Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$\log (\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

これらの指標には蛍光X線のエネルギー差が小さく、風化に影響されにくい元素をできる限り用いた。



第1図 黒曜石産地・分析資料採取地分布図

### (1) 判別図法

推定のための第1の方法としては上記指標のうちZr分率を除く4つの指標を用いて2つのグラフによる推定法を用いた。以下この方法を判別図法、二つのグラフを判別図と呼ぶことにする。

二つの判別図を巻頭のグラフ1とグラフ2に示した。図中の判別群の記号は第1表を参照されたい。これらの図中緑色の+で示した記号は中部・関東、褐色の×は東北・北陸・隠岐、青色の△は北海道の産地原石のプロットを示している。グラフ1は横軸にRb分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度をプロットしたものである。グラフ2は横軸にSr分率、縦軸にlog (Fe強度/K強度) をプロットしてある。グラフ1とグラフ2どちら、各エリアの判別群の分類が可能となる。

遺跡出土試料についても同様に蛍光X線分析を行い、産地原石と同様のプロットを行って比較することで产地推定を行った。グラフ1、グラフ2には遺跡出土の黒曜石を赤色の◆で示した。

## (2) 判別分析

第2の方法として多変量解析の1つの手法である判別分析を用いた。この方法はすでに分類された群のいずれに未知の試料が帰属するかを求める方法である。変量として上記の指標をすべて用いた。原石の群はあらかじめクラスター分析と主成分分析によって分類し、判別分析によって結果に矛盾がないかを確認した。

判別回図と判別分析との結果は非常に一致度が高いが、和田鷹山群と和田小深沢群など同じエリアの中の元々類似した群の場合には異なる群に分類される場合もある。このような場合は判別分析の結果を採用している。

第1表 産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110L蛍光X線分析装置による)

都道府県	地図No.	エリア	田村群	新記号	旧記号	原石採取地 (分群数)	
北海道	1	白瀬	八号沢群	STHG		ホシタマ山頂 (19)、八号沢露頭 (31)、八号沢 (79)、 黒櫻の沢 (6)、鶴加林道 (4)	
	2	土煙	黒櫻の沢群	STKY		十三ノ沢 (16)	
	3	蟹戸	三段群	KSMM		安住 (25)、清水ノ沢 (9)	
	4	旭川	安住群	ODAZ			
	5	名寄	高砂台群	AKTS		高砂 (6)、爾翁台 (5)、泰光台 (5)	
	6	新十津川	登栄谷群	ARSK			
	7	水谷川	布川群	SYHK		布川 (10)	
	8	帶廣	曲川群	STSD		須田 (6)	
青森	9	木造	桑原群	ADMK		曲川 (25)、土末川 (15)	
	10	深浦	出来島群	TUTI		日系 (16)	
秋田	11	男鹿	八森山群	KDDK		出奥山海岸 (34)	
			金ヶ崎群	JUHM		八森山公園 (8)、六角沢 (8)、岡崎浜 (40)	
山形	12	羽黒	鰐本群	OGKS		今々岬温泉 (37)、鰐本海岸 (98)	
			月山群	OGWM		鰐本海岸 (16)	
新潟	13	糸魚川	今野川群	HOGS		月山丘陵 (30)、朝日町田代沢 (18)、鶴見町中沢 (18)	
	14	新発田	金津群	HGIN		今野川 (9)、大鷲川 (5)	
福井	15	高原山	松山群	NTKT		金津 (29)	
			甘淵沢群	SBLY		松山牧場 (40)	
長野	和田 (WD)	高岡	高岡市1群	THAY	TKH1	甘淵沢 (50)、樅沢 (20)	
			高岡市2群	THNH	TKH2	七尋沢 (9)、自然の家 (9)	
		山ノ内	高田群1群	WDTY	WDT1		
			小迷沢群	WDKB	WDT2		
		上高地北群	和田峰3群	WDTK	WDT3	鷹山 (53)、小沢沢 (54)、寒舎屋 (36)、扶養ライ特 (87)、	
		中高地西群	和田峰4群	WDTN	WDT4	古峰 (50)、土星橋北 (83)、土星橋西 (29)、土星橋南	
		上高地南群	和田峰5群	WDTM	WDT5	和田峰 (18)	
		扶養ライ群		WDHT			
		古峰群		WBD			
		和田 (WO)	男女壹1群	WOBG	OMG1	ブドウ沢 (36)、ブドウ沢右岸 (18)、牧ヶ沢上 (33)、	
			男女壹2群	WOMS	OMG2	牧ヶ沢下 (36)、高松沢 (40)	
			男女壹3群	WOTM	OMG3	星ヶ原第1地区 (36)、星ヶ原第2地区 (36)、星ヶ谷A (36)、星ヶ谷B (11)、水月盤園 (36)、水月公園 (13)、星ヶ原りこし (36)	
神奈川	17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ沢群	SWHD	KTM	星ヶ原第1地区 (36)、星ヶ原第2地区 (36)、星ヶ谷A (36)、星ヶ谷B (11)、水月盤園 (36)、水月公園 (13)、星ヶ原りこし (36)
	18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山 (33)、蓼草時 (36)、蓼草時東 (33)、洪ノ湯 (29)、 美しきの川 (4)、八ヶ岳7 (17)、八ヶ岳9 (18)、茅子池 (34)
			笈子山群	TSHG		笈子池 (26)	
			標跡山群	TSSB		標跡山 (31)、龜甲池 (8)	
	19	丹波	芦ノ湯群	HNAY	ASY	芦ノ湯 (34)	
	20	箱根	雄宿	HNHU	HTJ	雄宿 (71)	
			黒岩宿群	HINKA	HINKA	黒岩宿 (9)	
			箱根系A群	HINKJ	HINKA	箱根宿 (30)	
	21		御治宿群	HNKJ	KJY	御治宿 (18)	
静岡	22	大城	上多賀群	HINKT	KMT	上多賀 (18)	
			柏崎群	AGKT	KSW	柏崎 (80)	
	23	神津島	海津島鳥1群	KZOB	KOZ1	見駒島 (100)、長浜 (43)、沢尻浦 (8)	
鳥取			海津島鳥2群	KZSN	KOZ2	妙義崎 (40)、長浜 (5)	
	24	隨岐	久見島群	OKHM		久見バーライト山 (30)、久見探鉱現場 (18)	
			糸泊群	OKMC		糸泊海岸 (30)、加茂 (19)、岸浜 (35)	
			伊勢群	OKMT		伊勢地区 (16)	
その他		NK群		NK		中ノ島IG、SG (遺跡試料)、原石产地は未発見	

注: いくつかの東北・北陸の产地は判別図には示してあるが上記の表では省かれている。

## 産地推定結果

グラフ 1 の判別図 1 を見てみると、遺跡に最も近い栃木県の高原山甘湯沢群 (THAY)、長野県の諏訪星ヶ台群 (SWHD)、和田十屋橋西群 (WDTN)、さらには伊豆七島の神津島恩馳島群 (KZOB) のクラスター中に赤色の◆が見てとれる。同様にグラフ 2 の判別図 2 をみるとやはりこれら3つの判別群がはっきりと示されている。計算された指標を用いて判別分析をおこなった結果も判別図による推定結果と100%一致した。

それでは、産地推定結果を遺跡ごとに見ていくことにする。

### 1) 弁才天遺跡（第2図2）

研磨尖頭器（分析番号TUK-115）は縄文時代の遺物である。諏訪星ヶ台群 (SWHD) である。残りの2試料のスクレイパー (TUK-116) と尖頭器 (TUK-117) は武藏野編年Ⅶ層からの出土である。ともに高原山甘湯沢群 (THAY) である。

### 2) 神明遺跡（第2図1）

分析したのは2点である。TUK2-01は石錐で武藏野Ⅳ (?) 層とされる。長野県の和田十屋橋西群 (WDTN) である。TUK2-02は石匙で縄文時代の石器である。神津島恩馳島群 (KZOB) であった。

### 3) 山川古墳群（第2図3）

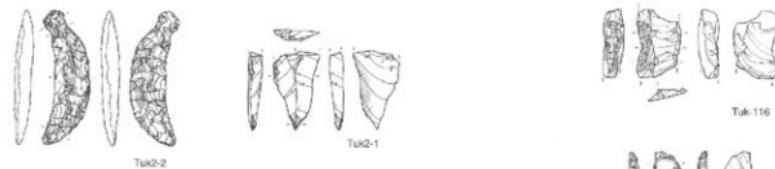
最も多く10点を分析した。TUK2-06がナイフ形石器、TUK2-12が石核である以外はすべて剥片で、武藏野編年ではⅣ～VI層に相当する層位からの出土である。これらのうち、TUK2-05は風化が激しかったため、有効な産地推定は不可能であった。

この分析では試料が少ないこともあって多くのことはいえないが、最も近い産地である高原山を主体としながらも、遠隔産地である長野や神津島の黒曜石が搬入されていることは確認できた。東北の色が濃い遺跡も存在することから分析が進めば東北の黒曜石が検出される可能性もある。

南関東では黒曜石の産地推定はかなりの数がおこなわれてきているが、茨城県を含めて北関東の産地推定数は決して多いとはいえない。もともと、黒曜石の出土数が少ないと重視されていない理由ではある。しかし、石器に使用されている石材のうち、高い信頼性を持って産地推定が可能である石材が黒曜石だけであるといってもいい以上、当時の人の交流を知る上で黒曜石の産地推定は重要であることは間違いない。幸い、窪田恵一氏が茨城県内の黒曜石を積極的に調査し始めている。今回の分析試料も氏のお世話になったものである。分析の数が増えるにしたがって、明らかになることが多くなることを期待する。

第2表 黒曜石資料の最終推定結果

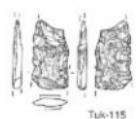
分析番号	遺跡名	推定产地	判別図 判別群	判別分析					
				第1松浦産地			第2筑前産地		
				判別群	距離	確率	判別群		
TUK2-1	神明	和田十屋橋西群	WDTN	WDTN	363	1	WDTK	39.41	0
TUK2-2			KZOB	KZOB	75	1	KZSN	30.1	0
TUK2-3	山川古墳群	高原山甘湯沢群	THAY	THAY	478	1	NYAH	126.9	0
TUK2-4		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	73	1	TUTI	112.89	0
TUK2-5		推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可	推定不可
TUK2-6		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	3.48	1	TUTI	97.22	0
TUK2-7		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	7.49	1	AGKT	128.09	0
TUK2-8		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	9.29	1	AGKT	124.24	0
TUK2-9		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	4.49	1	NYHA	105.33	0
TUK2-10		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	5.23	1	AGKT	152.12	0
TUK2-11		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	9.46	1	NYHA	100.33	0
TUK2-12		高原山甘湯沢群	THAY	THAY	2.35	1	NYHA	96.15	0
TUK2-13	弁才天	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	421	1	SBY	71.57	0
TUK2-14							AKO1	54.06	0
TUK2-15							KKO1	49.03	0
TUK2-16									
TUK2-17									



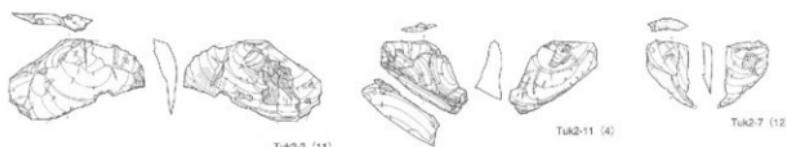
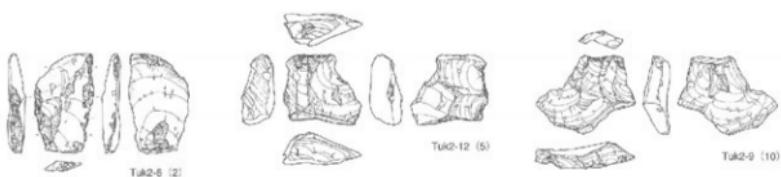
1. 神明遺跡（橋場 1998）



Tuk 117



2. 分才天道跡



3. 山川古墳群（第2次）  
（）の数字は第25回の番号と対応する。



0 6cm

第2図 常名台遺跡群の産地推定に用いた試料図 (S=1/2)

# 写 真 図 版



山川古墳群（第2次調査）全景



調査前風景



調査前風景



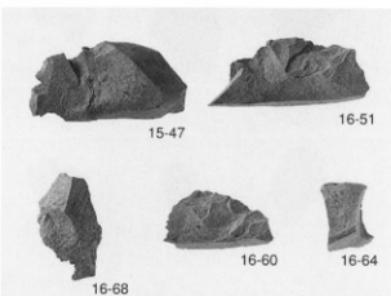
表土層除去後



北側調査区 IX層段階 旧石器検出状況（西から）



10-1



15-47

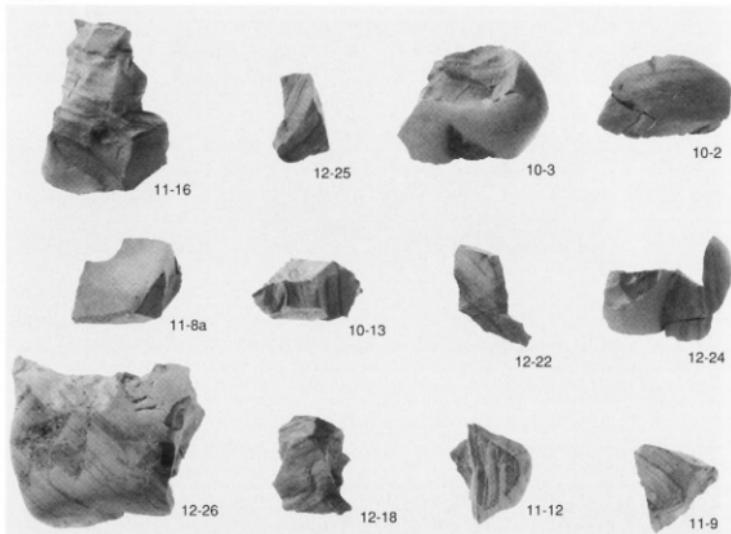
16-51

16-60

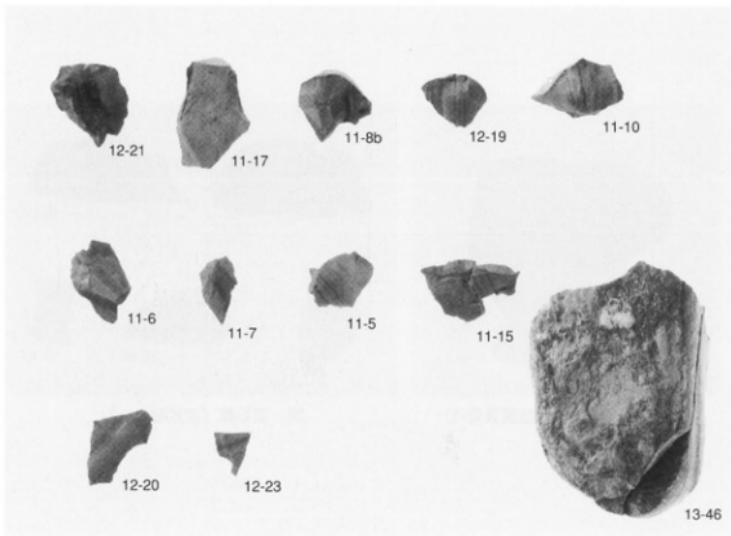
16-64

IX層段階 旧石器（珪質頁岩-1）

同 旧石器（流紋岩-1・2）



IX層段階 旧石器（珪質頁岩-1）



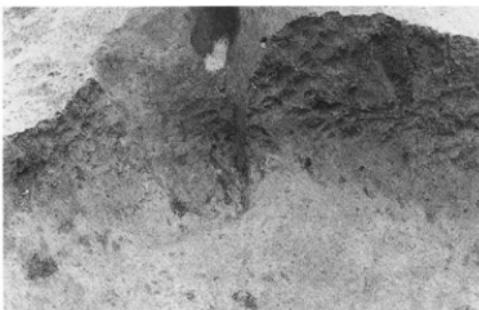
同 旧石器（珪質頁岩-1・ホルンフェルス-1）



IX層段階 炉跡遺構  
(北東から)



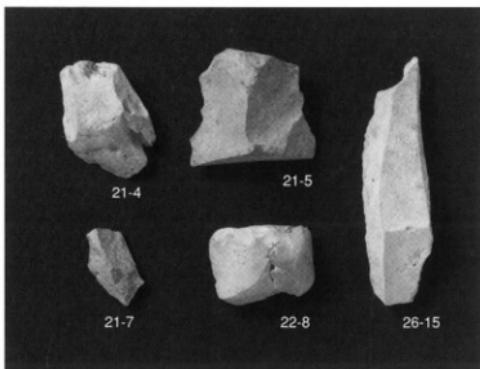
炉跡遺構 土層断面 (北から)



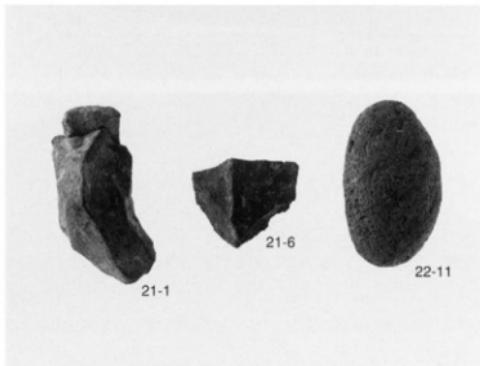
炉跡遺構 炉床面接写 (北東から)



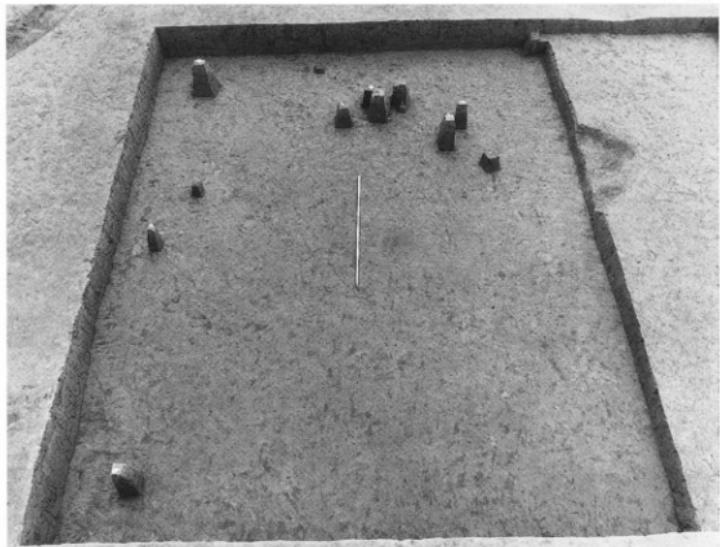
南側調査 2 区 VII 層段階旧石器検出状況  
(南から)



VII 層段階 旧石器 (黒色頁岩・ホルンフェルス・碧玉)



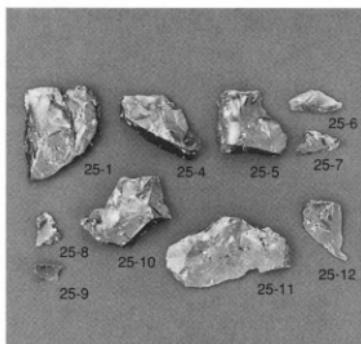
同 旧石器 (黒色頁岩・黑色安山岩)



南側調査1区 V層～IV層下部段階 旧石器検出状況（北から）



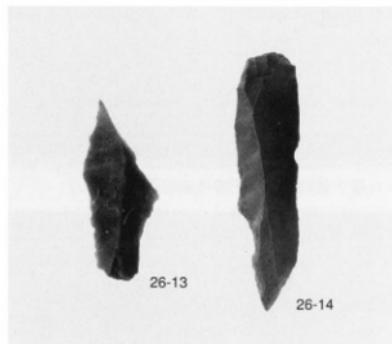
V層～IV層下部段階 旧石器検出状況と土層断面（北西から）



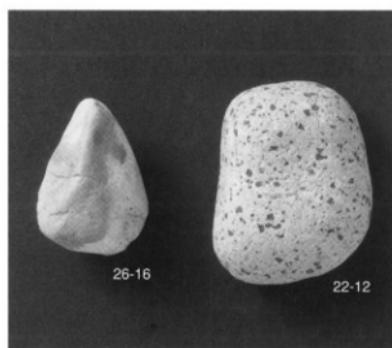
V層～IV層下部段階旧石器 黒曜石（表）



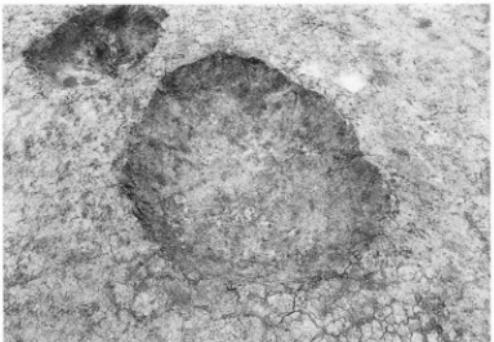
同 黒曜石（裏）



同 旧石器 チャート・硬質頁岩



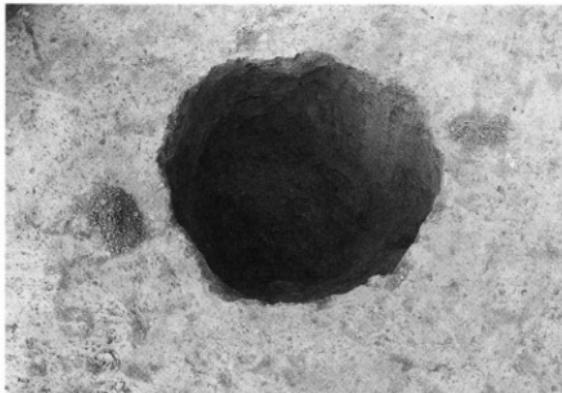
同 旧石器 緑色岩・石英斑岩



土坑SK04  
遺物出土狀況



P L.10



土坑SK27



土坑SK27  
遺物出土狀況



土坑SK27  
遺物出土狀況（拡大）



2号填全景



2号填土層堆積状況



2号填確認状況

P L.12



3号墳全景



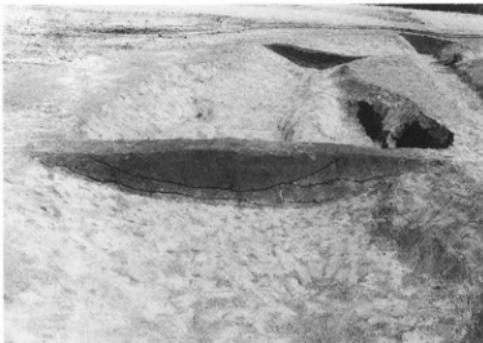
3号墳主体部



3号墳主体部（側面）



3号填主体部



3号填周溝土層堆積狀況



耳環出土狀況



3号墳 主体部



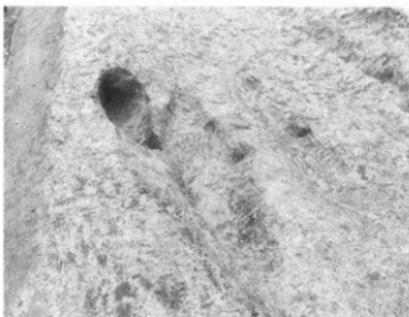
3号墳 1号埋葬施設



3号墳 2号埋葬施設



3号墳 3号埋葬施設



3号墳 4・5号埋葬施設（左4号）



3号墳 6号埋葬施設



3号墳2号埋葬施設  
遺物出土状況



3号墳2号埋葬施設  
遺物出土状況（拡大）



3号墳2号埋葬施設  
遺物出土状況



8号墙全景



8号墙周溝内遺物出土状况



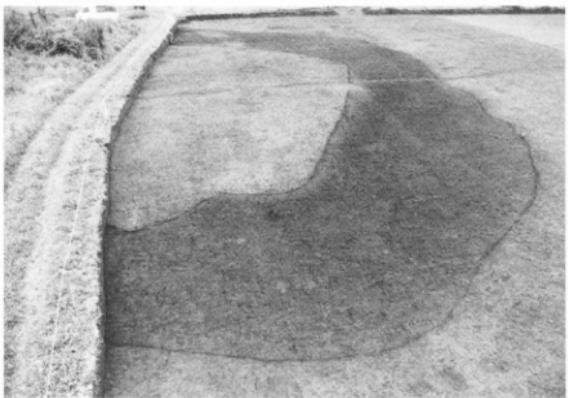
8号墙周溝内遺物出土状况



8号填周溝土層堆積狀況

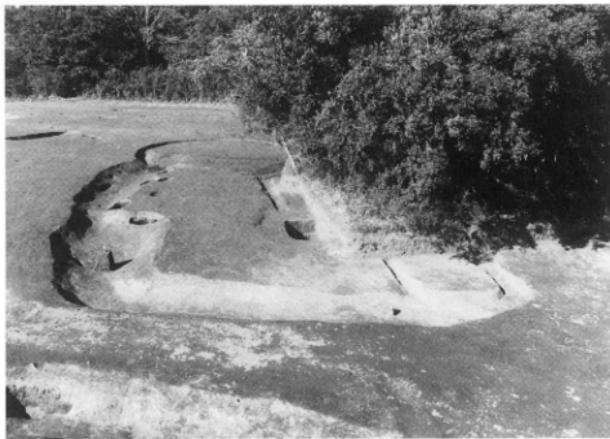


8号填確認狀況



8号填確認狀況

P L.18



9·10号墳全景  
(手前：9号墳)



9·10号墳全景  
(左：10号墳)



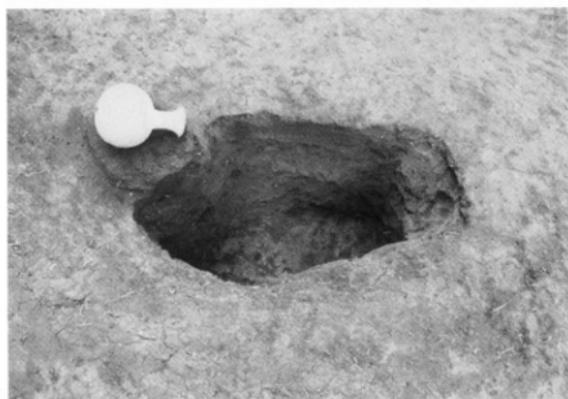
9号墳  
主体部土層堆積狀況



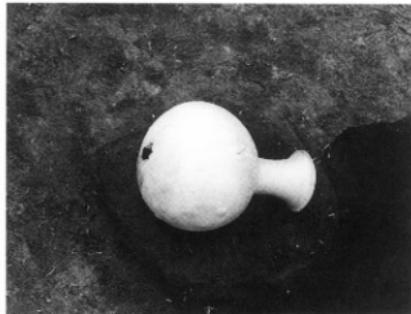
9号墳主体部



9号墳周溝



9号墳4号埋葬施設



9号填 4号埋葬施設遺物出土状況



9号填 周溝内遺物出土状況



9号填 1号埋葬施設



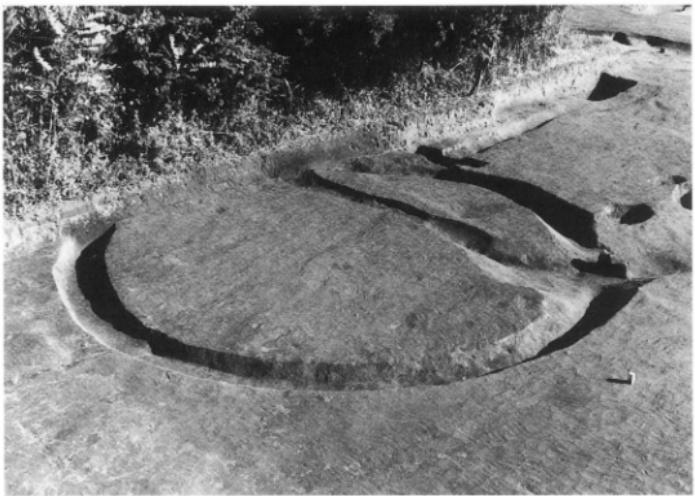
9号填 2・5号埋葬施設（奥2号）



9号填 4号埋葬施設



9号填 周溝内遺物出土状況



10号墳全景



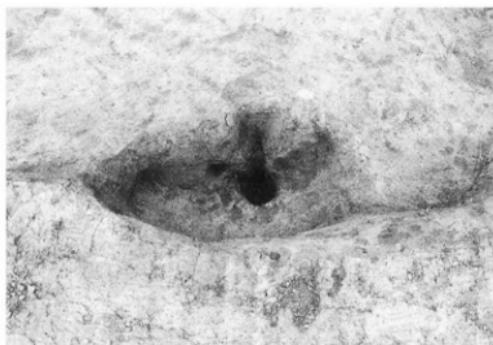
遺物出土狀況



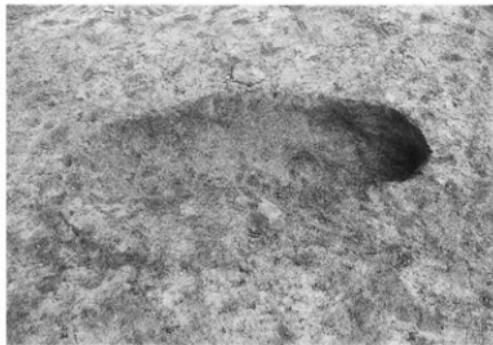
周溝土層堆積狀況



11号墳全景



1号埋葬施設



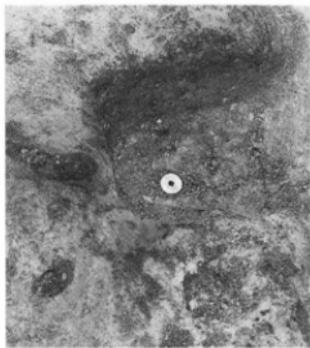
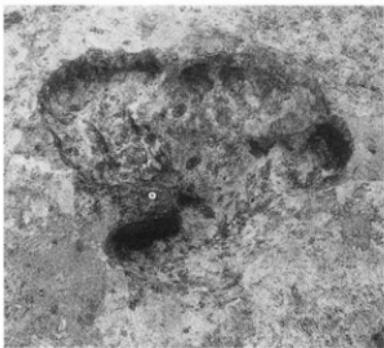
2号埋葬施設



掘立柱建物跡全景



右：掘立柱建物跡遠景  
下：錢貨出土状况





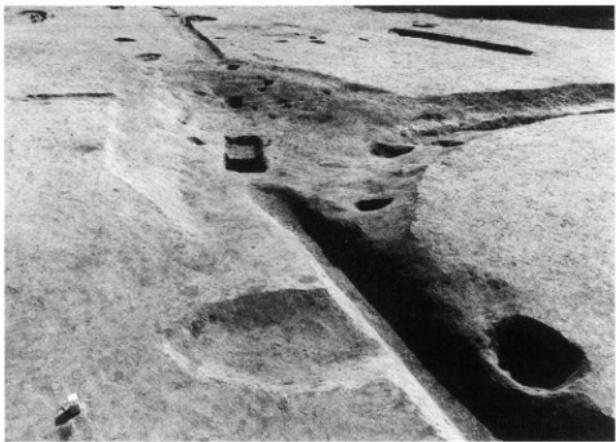
堀跡SD06遠景



堀跡SD06



堀跡SD6



堀跡SD06・性格不明  
遺構SX03（中央）



堀跡SD06



堀跡SD06



溝SD01



溝SD02



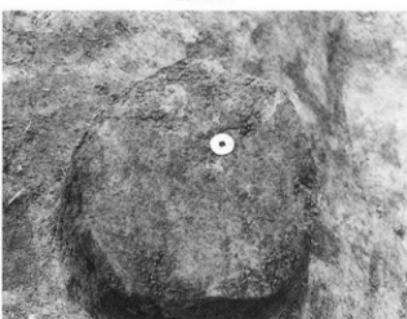
溝SD03



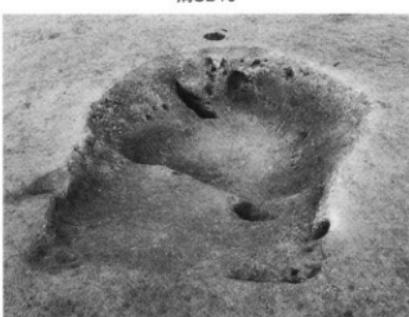
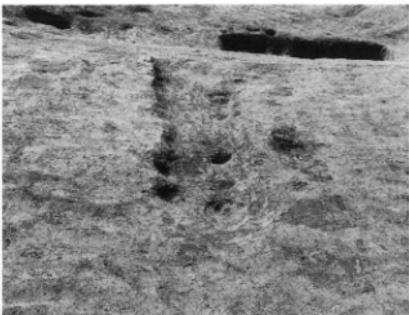
溝SD04



溝SD05



墓跡SD06錢貨出土狀況



P L.28



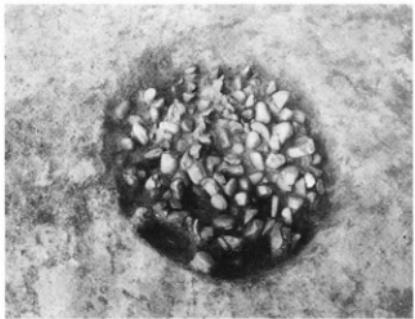
土壤墓SX01



土壤墓SX02



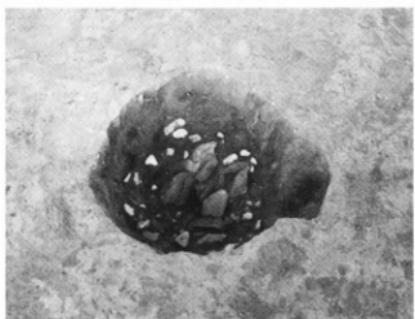
土壤墓SX04



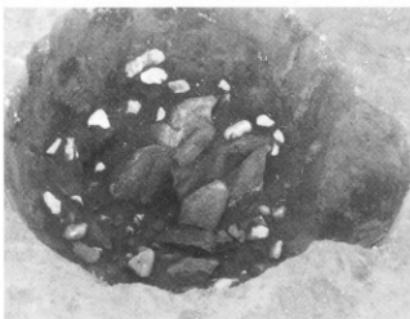
集石遺構 土坑SK09



土坑SK09



集石遺構 土坑SK23



土坑SK23

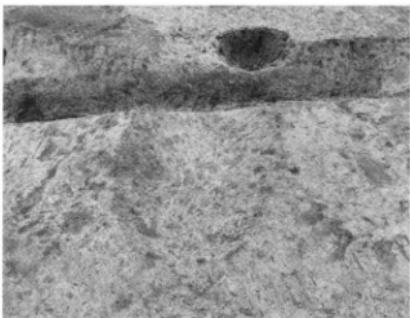


土坑SK23

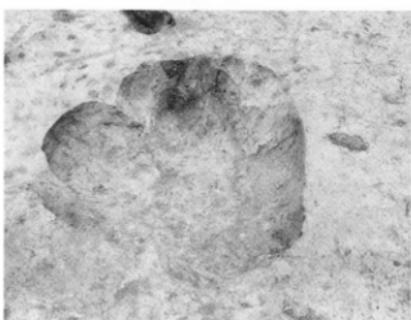
P L 30



土坑SK01



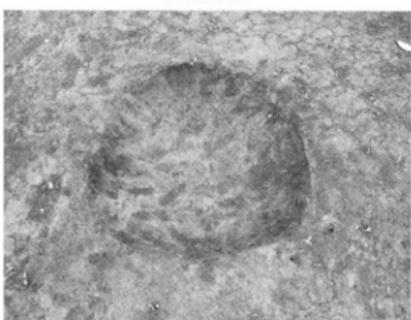
土坑SK02



土坑SK05



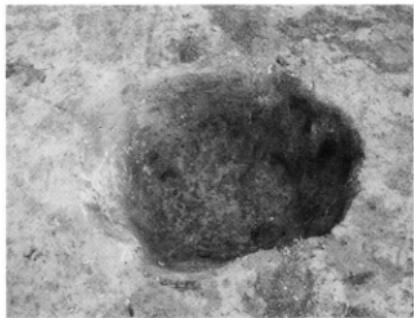
土坑SK06



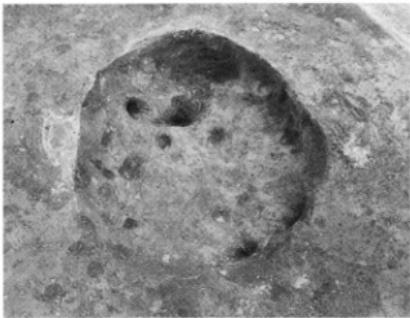
土坑SK07



土坑SK08



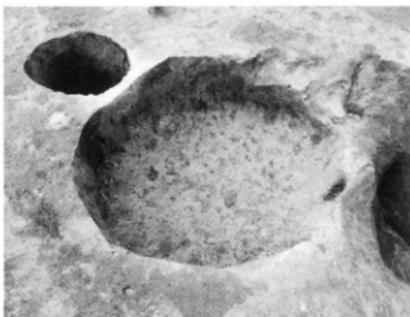
土坑SK09



土坑SK11



土坑SK12



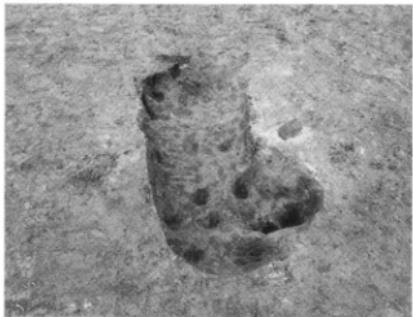
土坑SK13



土坑SK14 • SK20 (左)



土坑SK15



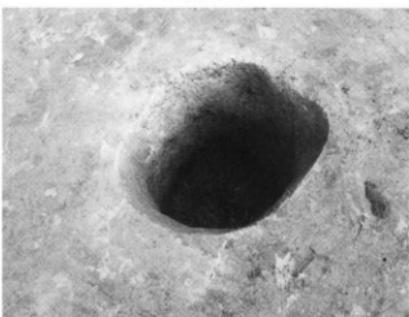
土坑SK16



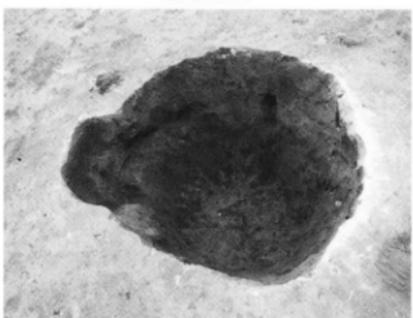
土坑SK17



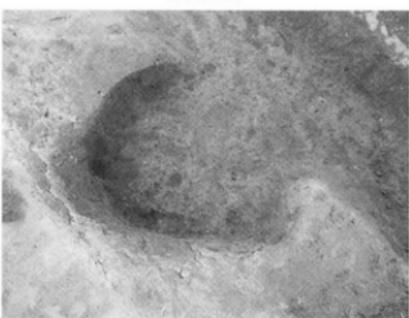
土坑SK18



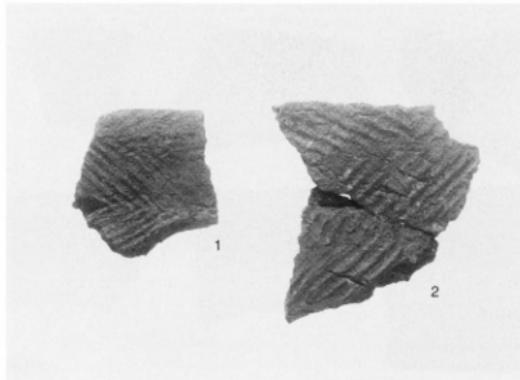
土坑SK19



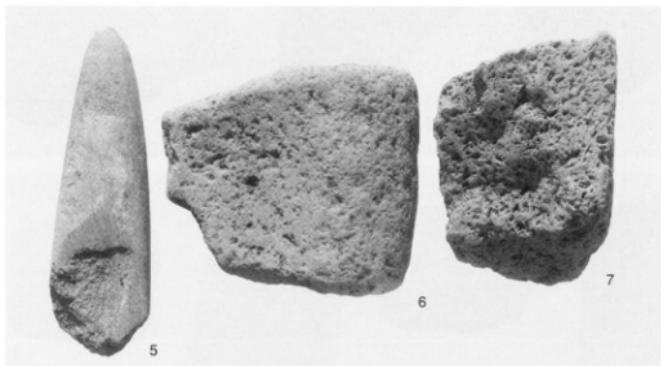
土坑SK23



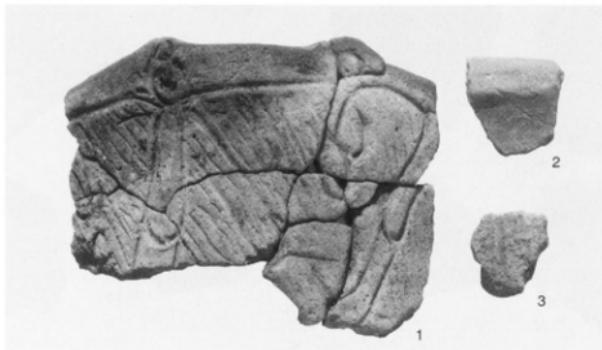
土坑SK24



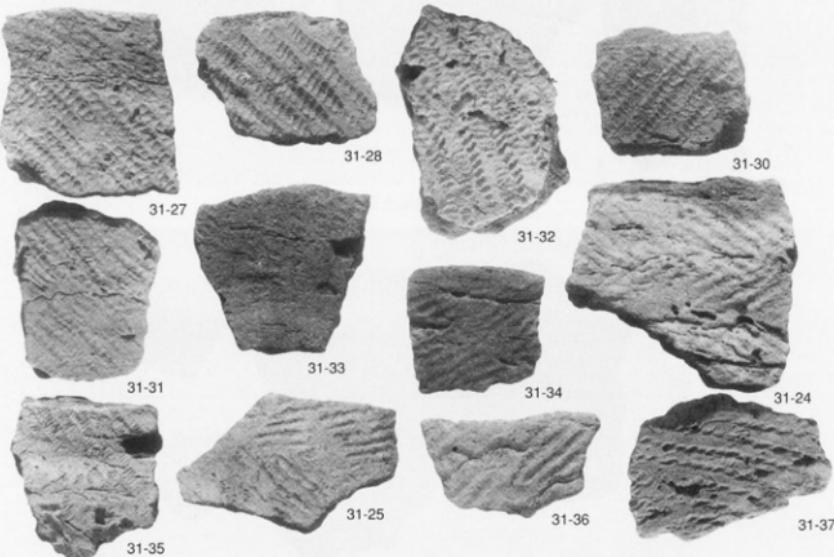
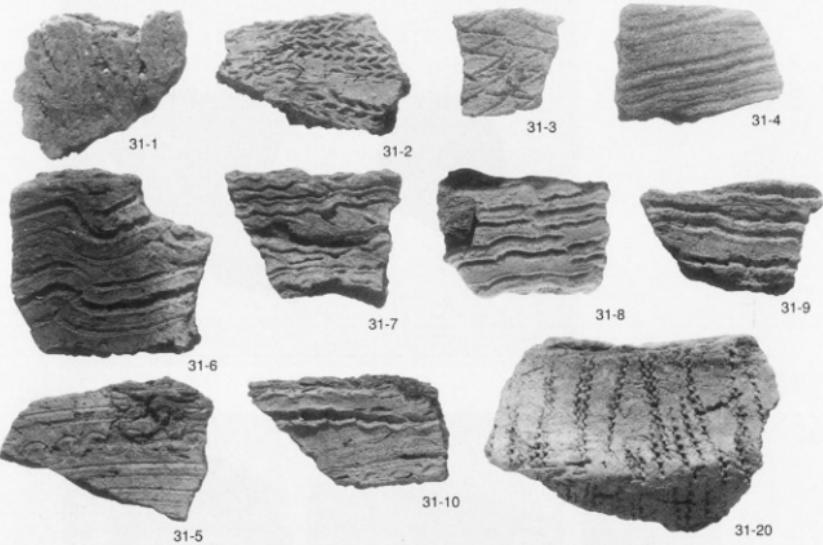
土坑SK04出土土器



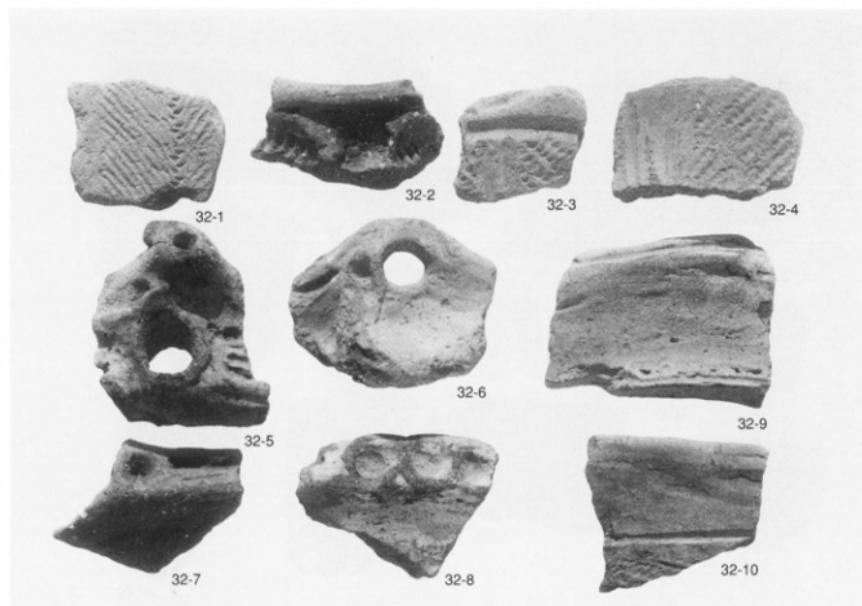
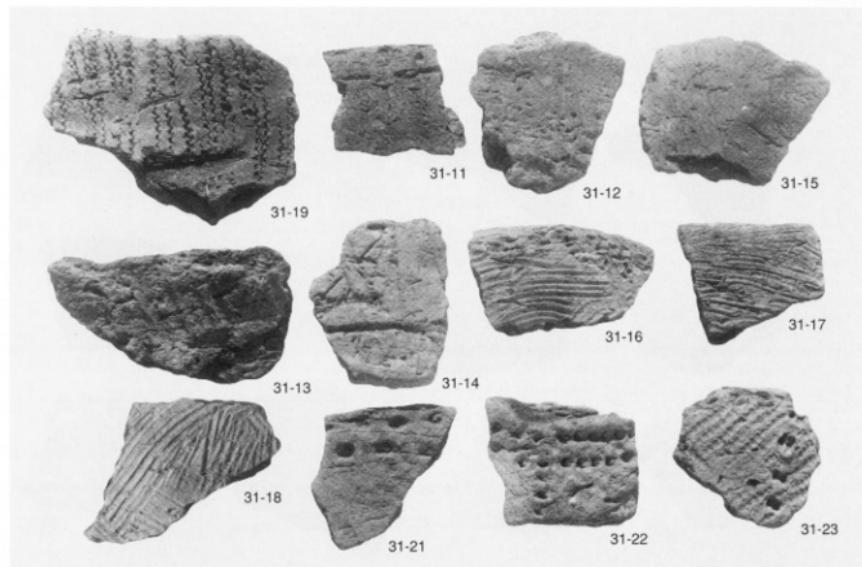
土坑SK04出土石器



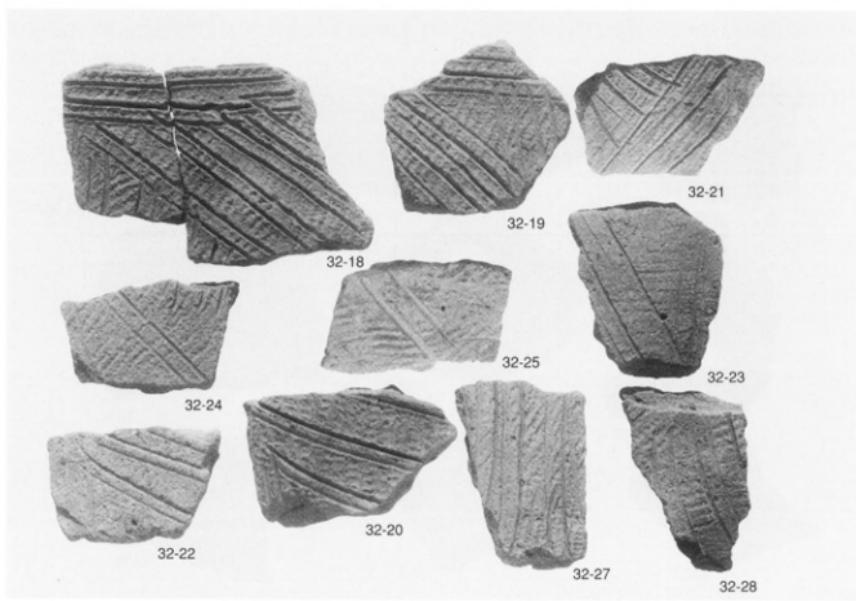
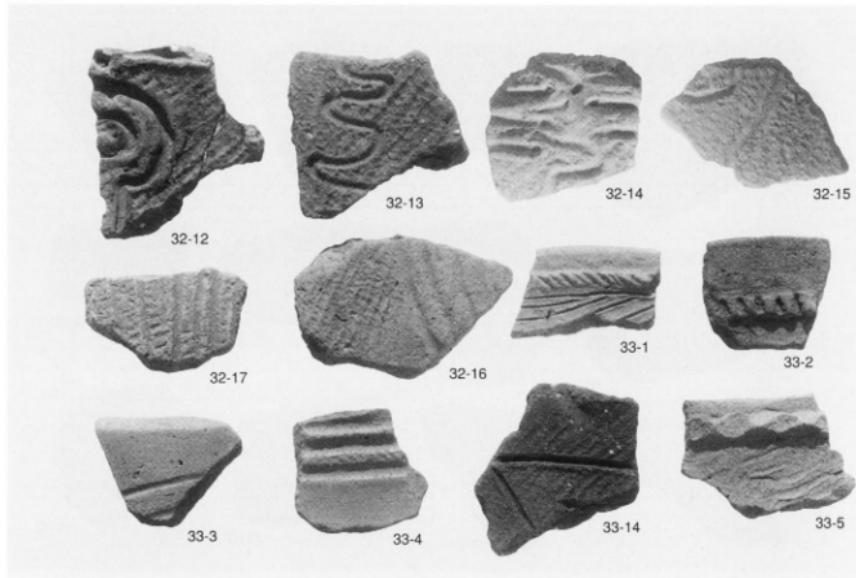
土坑SK27出土土器



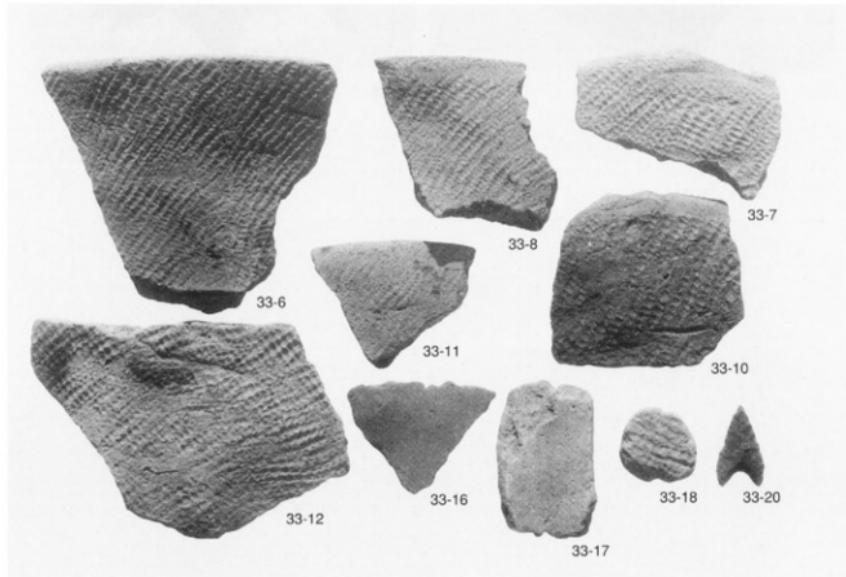
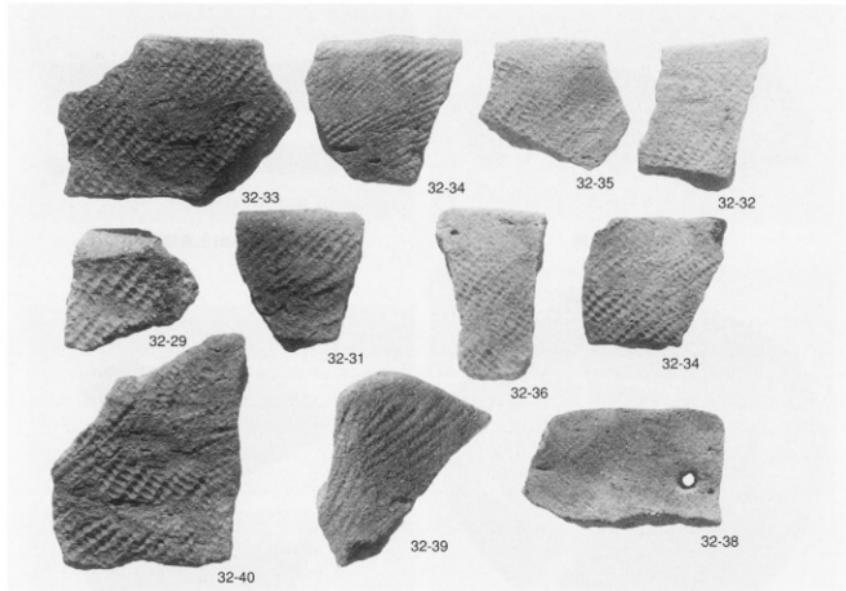
遺構外出土繩文土器（1）



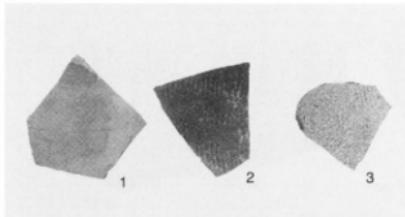
遺構外出土繩文土器（2）



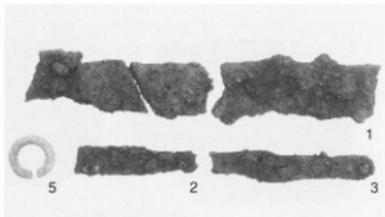
遺構外出土繩文土器（3）



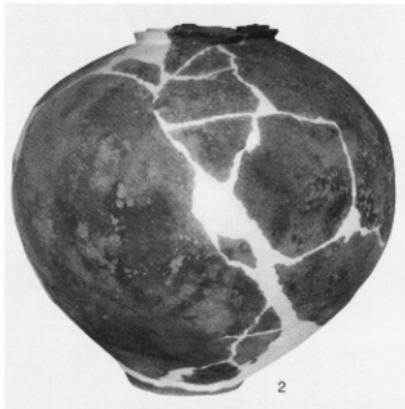
遺構外出土繩文土器（4）・土製品・石器



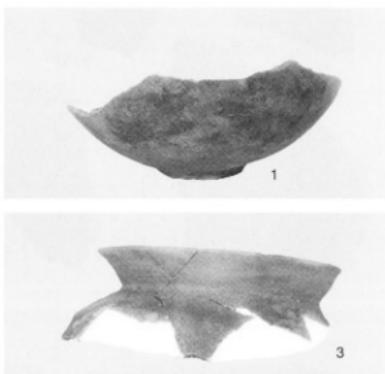
2号墳出土遺物

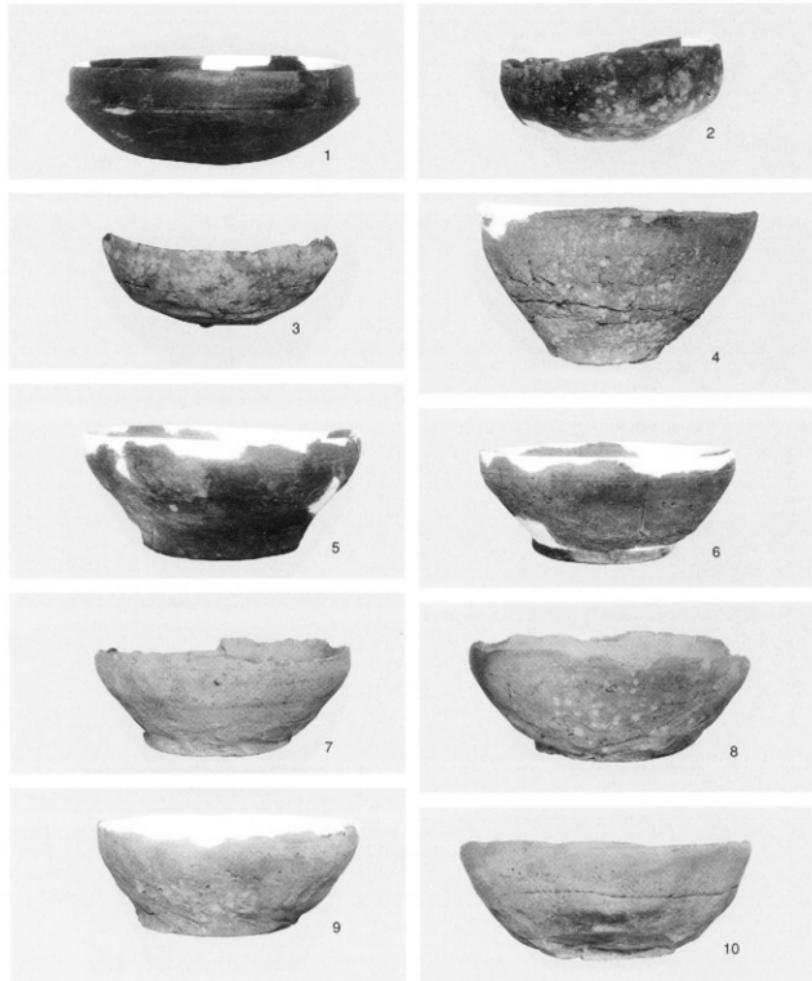


3号墳出土遺物



8号墳出土遺物

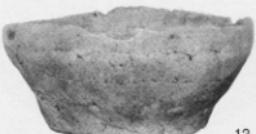




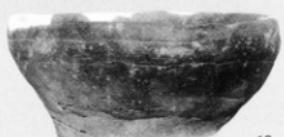
3号墳2号埋葬施設出土遺物（1）



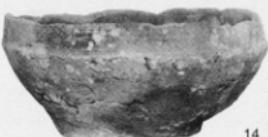
11



12



13



14



15



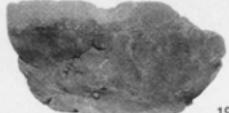
16



17



18

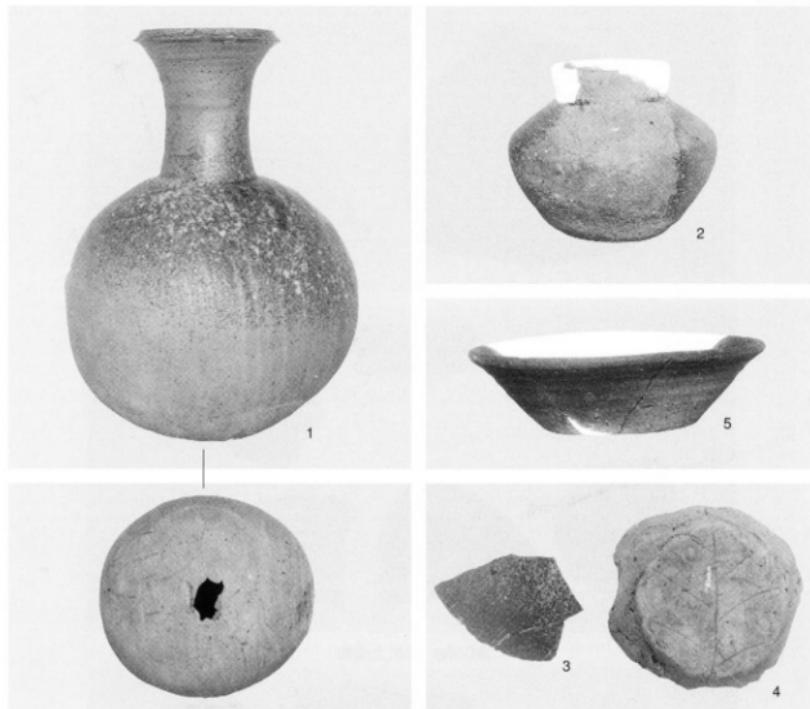


19

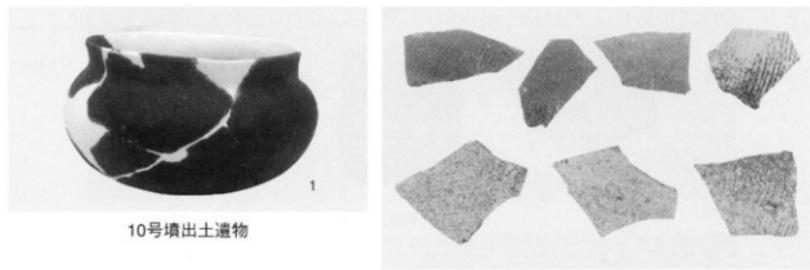


20

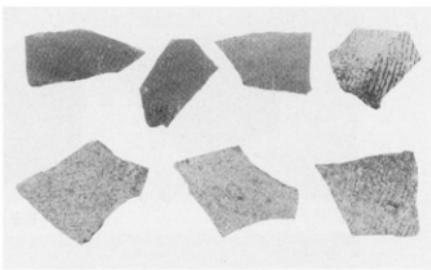
3号墳2号埋葬施設出土遺物(2)



9号墳出土遺物

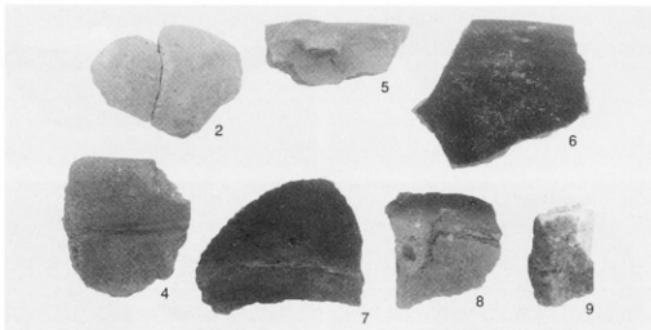
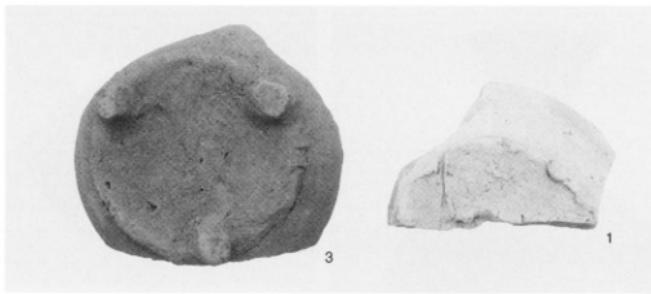


10号墳出土遺物

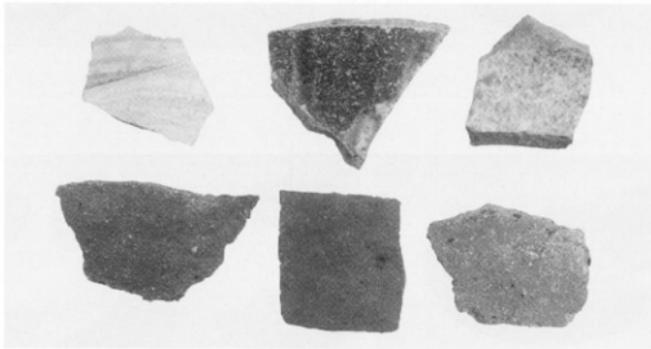


11号墳出土遺物

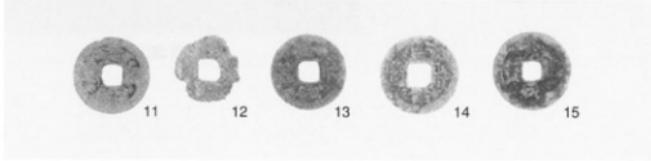
P L.42



SD06A・B出土遺物



SD06A・B出土遺物



出土錢貨 (SD06A・B-11・12、掘立柱建物跡-13・14、表探資料-15)

## 報告書抄録

ふりがな	やまかわこふんぐん（だい2じちょうさ）							
書名	山川古墳群（第2次調査）							
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第8集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	石川 功 小川和博	著者名	石川功 小川和博 増田恵 バリノ・サーゲイ株式会社 室月明歩					
編集機関	山川古墳群第二次調査会							
所在地	〒300-0811 田 029 (826) 7111 茨城県土浦市大字上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内							
発行機関	土浦市教育委員会							
発行年月日	2004年3月15日							
ふりがな 所収遺跡所在	ふりがな 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因	
山川古墳群	土浦市大字 常名字山川 2740地	08203	36° 235	140° 06° 11° 12° 12°	平成15(2003) 7月29日～10月11日	約7,000m <sup>2</sup>	市運動公園 建設事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
山川古墳群 第2次調査	旧石器時代	炉跡1	旧石器		C <sup>14</sup> 年代測定の結果、炉跡は 約3万年前のものと推定される			
		石器ブロック3						
	縄文時代	土坑4	縄文土器		早期1・前期1・後期2 遺構外から早期末葉～後期 前半の土器片出土			
		古墳群	古墳時代	古墳6	土師器 須恵器 耳環	円墳3基・方墳1基・（帆 立貝式）前方後円墳1基・ 前方後方（形）墳1基、4世 紀末から7世紀の古墳群		
	中世	掘立柱建物跡1・ 馬蹄跡1・道跡1・ 土坑1	銭貨 上飾質上器	Pit内より北宋銭出土 堀跡 は方形溝の一部 道跡は堀 跡の中より検出				
	近世以降	溝跡9・集石遺構 2・土坑20・性格 不明遺構1			上坑は耕作に伴うものか？			
	時期不明	土壇墓3			本棺墓と推定されるが、遺 物なし			

## 山川古墳群（第2次調査）

上浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

発行日 2004年3月15日  
編集 山川古墳群第二次調査会  
発行 上浦市教育委員会  
問合せ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（考古資料館）  
〒300-0811 茨城県上浦市大字上高津1843  
TEL 029（826）7111  
e-mail kaizuka@city.tsuchiura.ibaraki.jp  
印刷 （株）エリート印刷



常名台遺跡群 全体図